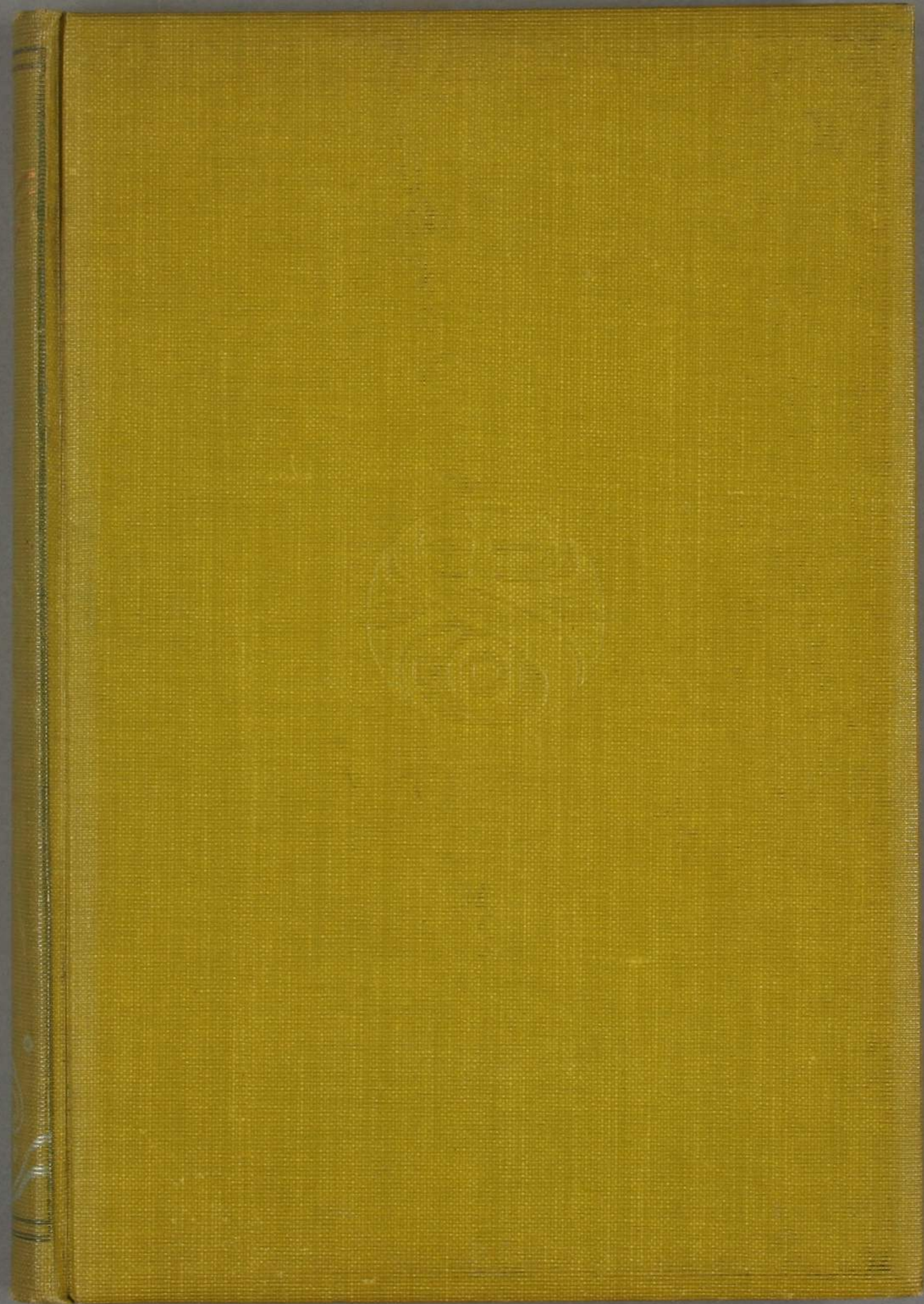
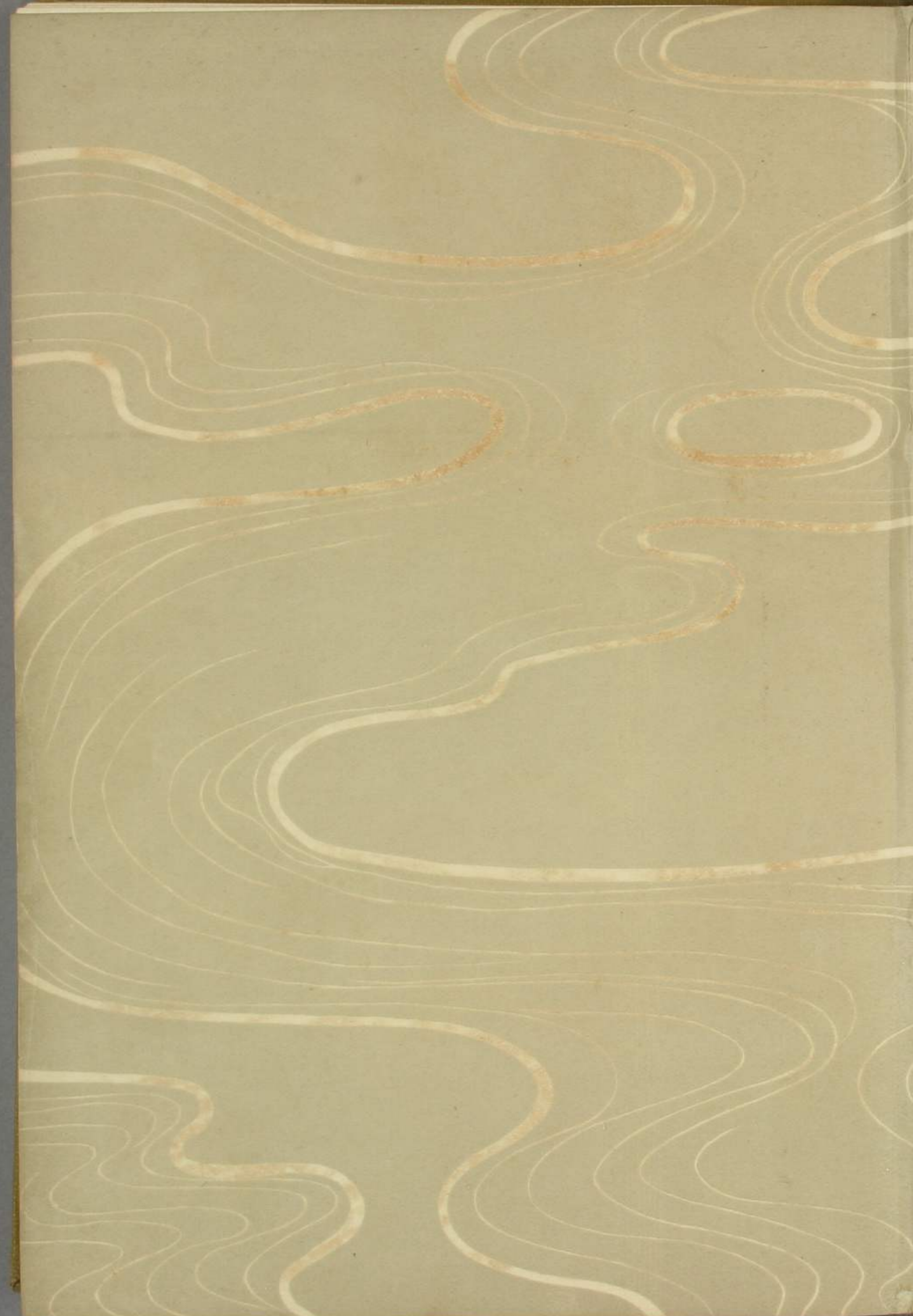




心のあそび



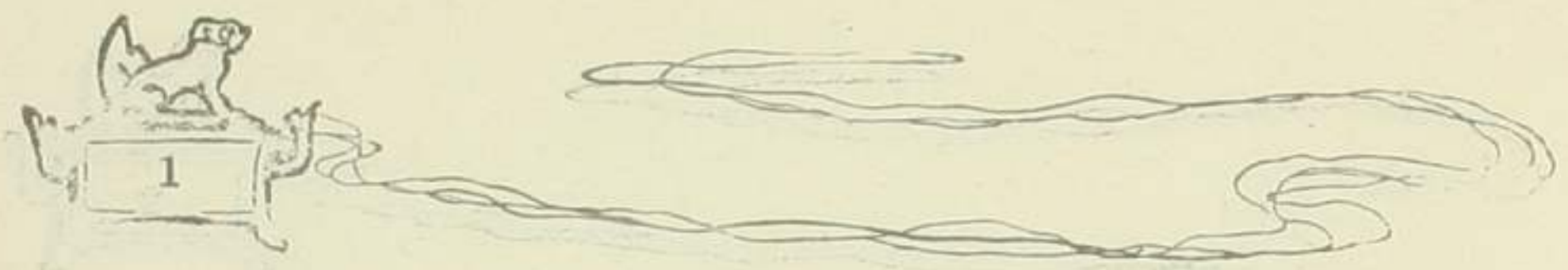




心のあと
出
廬

引

出廬一部四編、其の第一篇は世の悦ぶに足らぬをいひ、第二篇は詩の愛す可きを叙し、第三篇に至つて、空想に遊ぶもまた、竟に實在の累するところとなるを免れざるを述べ、第四篇に於て、詩と世と共に悦び愛すべく、實在と空想と相即き相容るべきを詠じたり。これはこれ予が將に世に出さんとする詩集心のあと全卷の序として見る可し。



出 廬

耽奇郎文庫

第一篇

第一章

一

おもしろや、あら、おもしろや！。

みなもと遠き 大河の

水は流れて 物言はず、

やさしく地^{ツチ}を 潤して、

ゆるく去り行く 其の姿！。

二

おもしろや、あら、おもしろや！。

出廬



伸びて行くほど 手を下げる
 柳の老樹 幾世経て、
 風がなぶれば 身は狂へども、
 眞の心は たゞおとなじう
 水に枝垂れて 立ち盡す
 じつと静かな 其の風情！。

三

おもしろや、あら、おもしろや！。
 其の物言はぬ 流れのほとり、
 其の静かなる 柳に近く、
 引結びたる 廬イホの中に、
 我たゞひとり 物思ふ時！。

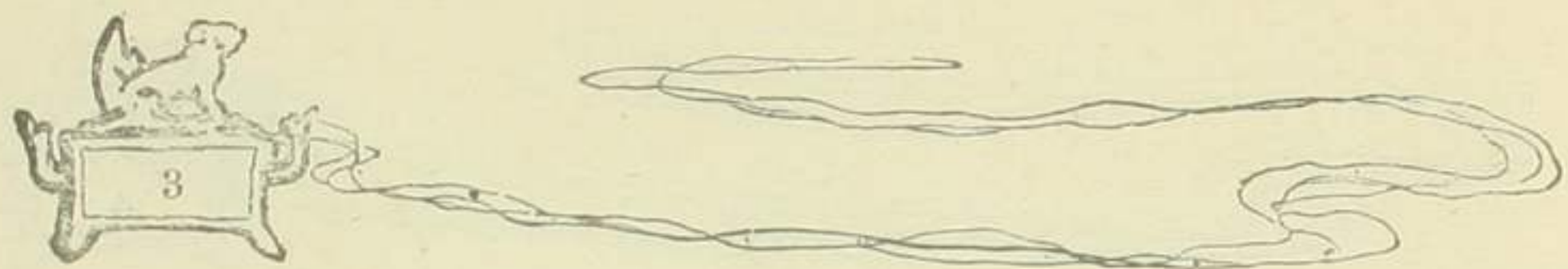
文庫

第二章

一

時知らぬ花 こゝにあり！。
 見てさへ頂イタの 寒けだつ
 雲の小口の 破れより
 時雨はらく 落つる日の
 世は情無う 淋しくて、
 萩も 紫菀も 白菊も
 千草の花の それも、も
 たゞ一ト色に 枯るゝ時、
 時知らぬ花 こゝにあり！。

二

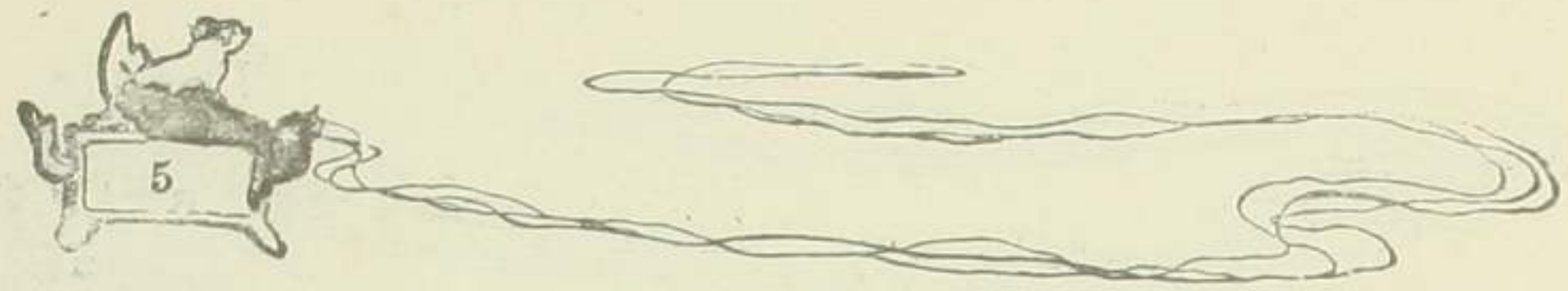




時知らぬ花　こゝにあり！。
 廬イロに祭れる　神や何？。
 いつきまつれる　神や何？。
 我　わが神を　念すれば、
 神のめぐみの　たのもしや！、
 なさけは深き　我が神の
 指さしたまふ　空の中に、
 忽ち　春の風　渡り、
 櫻が咲けば　此も来て、
 菜の花隠れ　蝶も飛ぶ！。

第三章

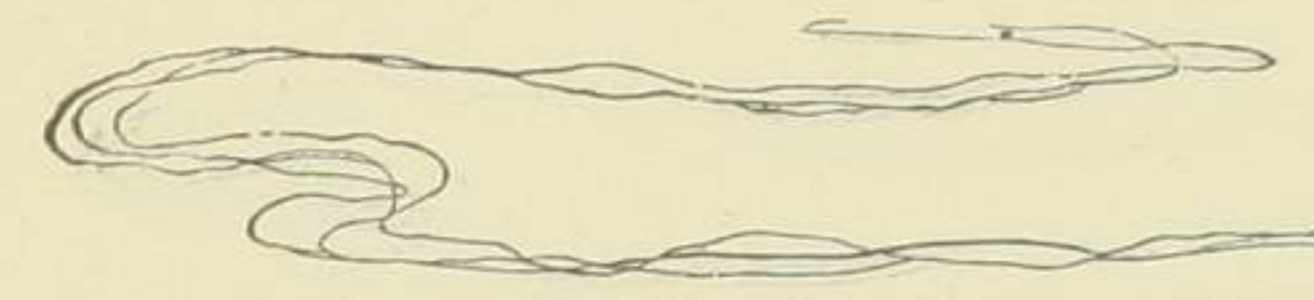
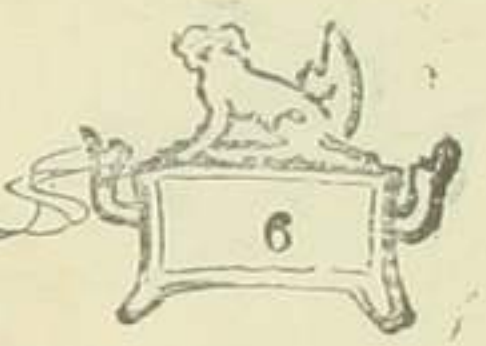
一



常住の月　こゝにあり！。
 秋風吹いて　澄みわたる
 瑠璃の大空　塵も無く、
 氷輪　高く懸りても、
 満つればやがて　缺く恨、
 十八　十九　二十ハツカ月！。
 美人やうやく　而オモ窶れして、
 終焉ツイの晦日クハ　玉を瘞ツツむる
 天の定め　はかなければも、
 常住の月　こゝに在り！。

二

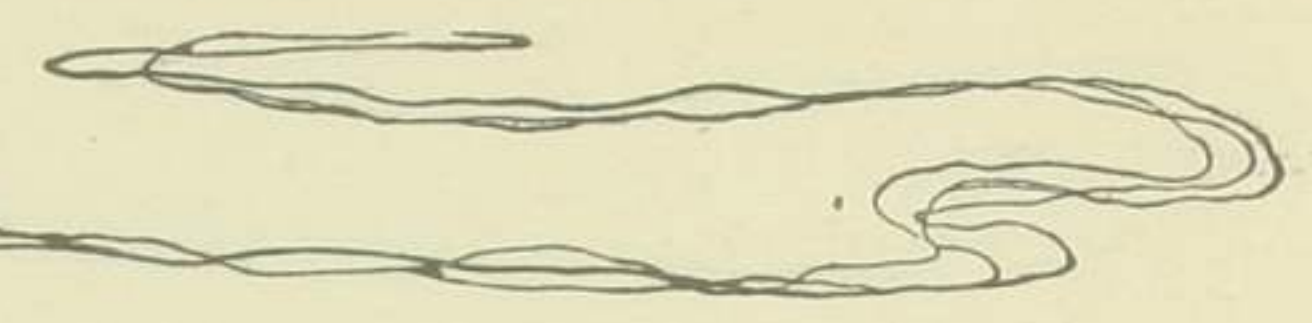
常住の月　こゝに在り！。



廬にまつれる 神や何？。
 いつきまつれる 神や何？。
 我 わが神を念すれば、
 神のなさけの 頼もしや！、
 恵みは深き 我が神の
 指さしたまふ 空の中に、
 忽ち 望の 月出で、
 水晶溶けて 散る光り
 野にも山にも 充ち溢る！。

第四章

日下江の 入江の蓮 花蓮、
ナカカエ ハチス ハナハチス



蓮の花の 美はしき
 人の盛りを うらやみて
 丹摺の袖に 面隠しつ
 老の涙を 絞りたる
 彼の赤猪子が 悲みを思へ！。

二

みもろの山の 神籬に
 傍うて生ひたる 白檮の樹の、
 膚は荒び、花は無く、
 たぶいかめじう 寒空に
 強ばり立てる 如くなる
 老いて色無き 人の身の



忌々しきさまの なさけ無や。

三

身の盛り人 羨しき、と

涙に歌ひ 出でたりし

心の何ぞ うら若くして、

廻る月日の 促がせる

老のやつれの 何ぞ悲しき！。

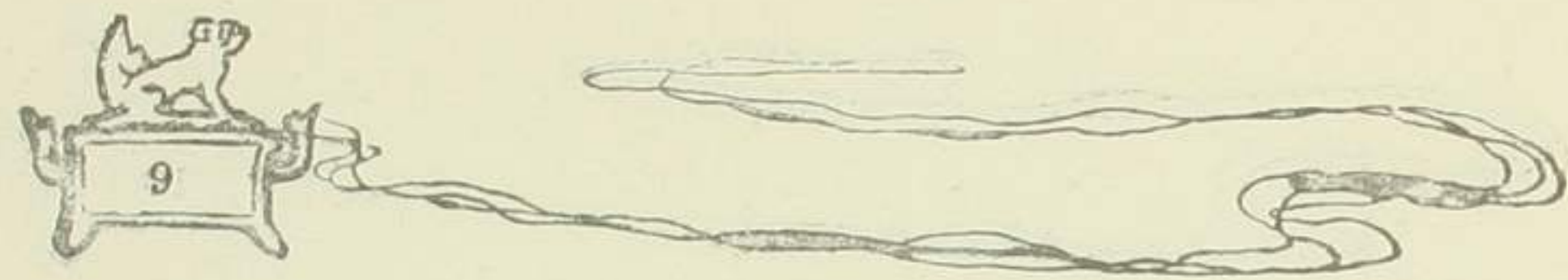
四

たのもしからぬ 人の世や！。

時の鐘の音 心無う

花顔の春の 夜を促り、

日々に吹く風 末終に



頭の上に 雪を送れば、

戀も、恨も、一トむかし！、

泣いた、笑うた、それも夢！、

後方より老の 責め來るに、

面影變る、氣も變る、

まこともいつか 虚誕となり、

互に見ざめ、思ひざめ、

心の艶光は 虚空に消え

身の醜さの たゞ遺る！。

たのもしからぬ 人の世や！。

五

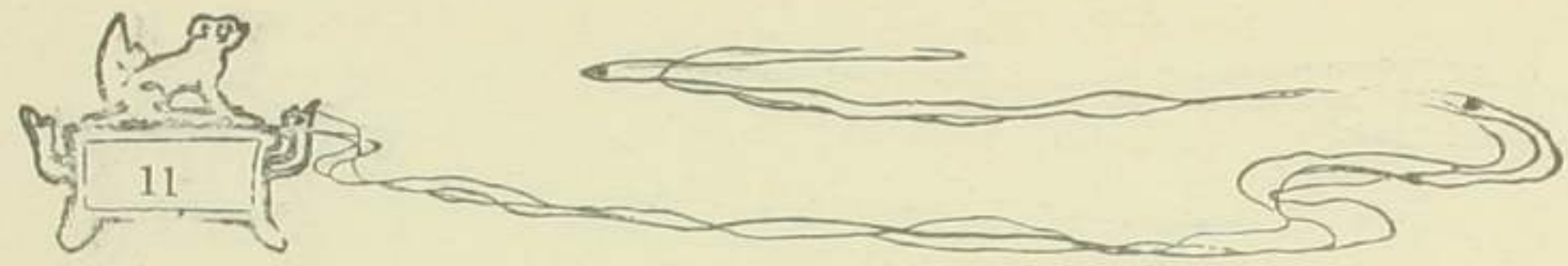
嬉しや！ ことに 不老の郷！。



嬉しや！、こゝに 不老の國！。
 我が神の なさけの光り、
 やはらかに 照らさせたまふ
 この郷は 人老いぬ郷！。
 吾が廬に いつきまつれる
 我が神の 放たせたまふ
 御光りの 渡るかぎりの
 其の國は 人老いぬ國！。

六

琴の音なして 流れ行く
 美和川の水 滑らかにして、
 水底の石も 玉と輝やく



その川の邊に 衣洗ふ
 童女は誰ぞ 美しき！。
 雪のたゞむき 寒からで、
 月の面輪に 雲も無し、
 世の憂き事も 白栲の
 清きが上に 清かれと
 澣ぐ手先に 立つ水の
 珠と躍つて 激ねかゝる
 その眼の前に 燕飛ぶ
 春のやさしさ 身にぞ染む。

第五章
一



眼に涙なし、閻王の使者。
人を免さず、黒鐵の鞭。

「汝の壽命 既に盡きたり、

地獄の門は 開け居るなり、

猛火の車 汝をぞ待つ、

疾く乗つて 冥土へ急げや！、

罪人！、いそげ！、いそげ。をぞ逐ふ。

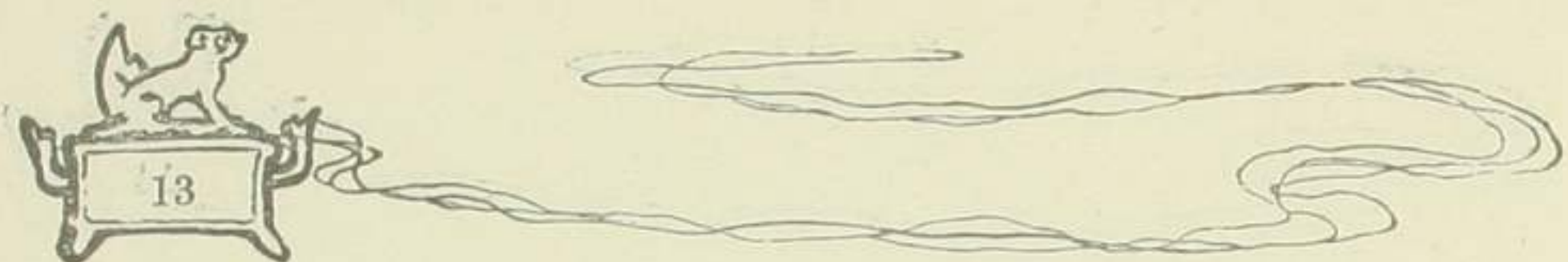
二

竹の葉末に 置く露と、

まばし結べる 人の身に、

つれなくあたる 小夜嵐！。

さらばと地に 落ちて散る



露の聲をば 誰か聞く！。
露の聲をば 誰か聞く！。

三

蝶 愁ふれど 春老いて、

油のやうな 降雨にさへ、

海棠 怯く 力無く、

ほろりと落つる 紅の

莓苔に黠する 其のゆふべ、

花の芳魂 何處にか往く！。

四

紫光 匂ふ 天つ星、

此の拂曉に 地に落ちて、



馬嵬が原に 冷まじき
 颯風急に 起り狂へば、
 空に騒立つ 八千草の
 亂れの中に 麗人の
 玉の形骸の 横はる！。

五

白綾 長う しごも無く、
 白蛇 血を吸ふ 頸の傍。
 たゞ草叢に 棄てられて、
 地に 蘭麝の 香を遺す！。

六

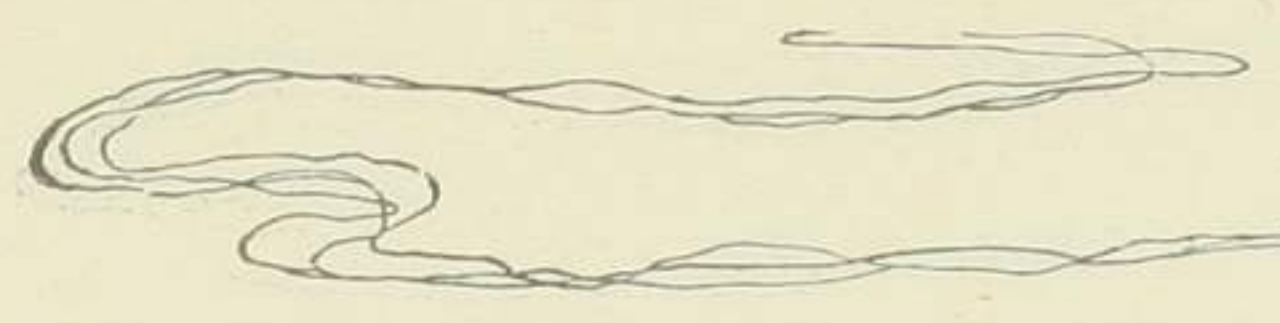
あら あぢき無の 人の世や！。



香木も灰！、悪木も灰！、
 賤の女も土！、麗人も土！。
 翡翠の髪の色艶も、
 終に蓬が もとの塵、
 桃花の面 痕も無く、
 荊が下に 骨残る。

七

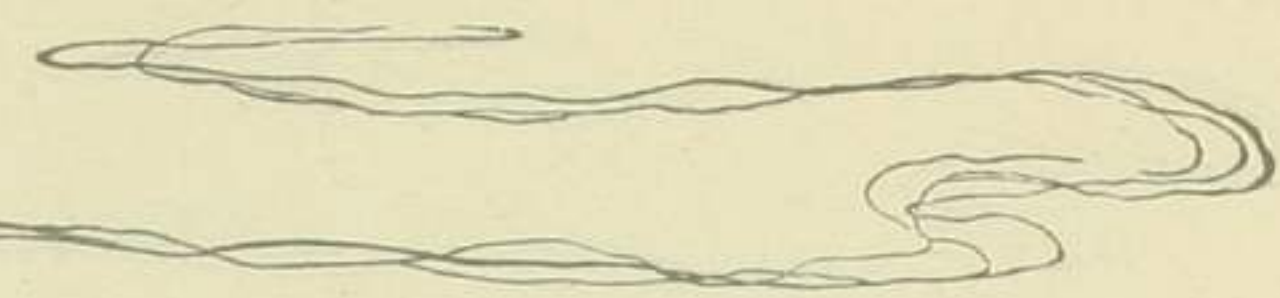
あら あぢきなの 人の世や。
 聞くに由無し、露の聲。
 花のたましひ、誰か見る？。
 戀ふとも甲斐の あらばこそ。



返魂の香 銷え易く、
 煙の中の おもかげの、
 煙より猶 果敢無くて、
 玉の簪兒 なかくに、
 なまじ残るも 恨あり。
 あら あぢき無の 人の世や。

八

嬉しや！。こゝに不老の郷！。
 嬉しや！。こゝに不死の國！。
 我が神の なさけのひかり、
 やはらかに 照させたまふ
 この郷は 人老いぬ郷！。



吾が廬に いつきまつれる
 我が神の 放たせたまふ
 御光りの 渡るかぎりの
 其の國は 人死なぬ國！。

九

九重の門 深く深きも、
 人を防ぎて、夏を防がず。
 玉の宮居の 簷近う
 槐樹の翠色 濃やかに
 熱き日ざしを 遮れど、
 黄金の箔を 振り落す
 葉漏りの光り きらくと、



瑪瑙の欄にかぐやきて、
 見る眼眩しき正午過ぎ、
 顔姣き宮女誰も皆
 瓶花に水無き風情して、
 雪を展べたる紉ばりの
 團扇の風をたぐたよる。

十

清き香の先ばしりして、
 仙山の花晝に咲き、
 玉珮の音妙に聞えて、
 金殿の中麗妃見はる。

十一

心ゆたけくおほごかに、
 御庭の彼方見そなはす
 御目は秋の露凝りて、
 羅衣めせる御姿は、
 柳に春の雪淡し。

十二

寶劍の前、堅きものなく、
 仁者の周圍、憎き人無し。
 月の桂の都より
 假に此の世に生れまして
 楊氏の妃と呼ばれます
 君が涼しき御姿の





あたりは何の 夏も無し。

十三

あつさも知らしめさぬごと、
悠然として 立ちたまふ
美はしき君が 御姿や！。
雲鬢 涼しき 風を藏して、
遠山の眉 雨後のおもむき！。
照陽殿に 夏ぞ無き、
嗚呼、照陽殿、夏ぞ無き！。

第六章

洪荒の世の 事とかや。
戦ひ負けし 暴神の、



瞋^{シキ}恚^キの眼^{マナコ} 火と燃えて、
憤怒^{フンヌ}の牙^{キバ}に 雷を咬^カみ、
不^フ周^{シウ}の山^{ヤマ}に 頭突^{ヅツ}して
雄^オ叫^{ケレ} 高く 死にし時、
天柱折れて 地維は欽け、
日は蝕^クまれ 月は死し、
満天の星^{ホシ}辰^シ 亂れ飛び、
四海^{ウシホ}の潮^{ウシホ}水^ホ 立つて舞ひ、
宇宙^{ウツウ} 壊^{クサ}れて ところはに、
闇とならんと したりしを、
勝ちし女媧^{ニウカ}氏は やさしくも
石のいろく 煉り煉つて、



天を補ひたまひたり。

第七章

一

天を補ふ 手はじめに、

取りたまひしは 白き石。

白きは彩色の 母にして、

色といふ色 皆これに

投胎りて世にぞ 現はるゝ。

これより今の 人の世に、

「眞理」てふもの 残り居て

この世に長く 「眞理」あり。

二



水は如是して 低く行き、

火はこれがため 高く燃え、

世のさまざまの 一切は

これに投胎りて 現はるゝ。

第八章

一

次に御手に 取りあげて

煉りたまひしは 青き石。

青きは清く やすらかに、

情の有りに 仇めかぬ

いとなつかしき 色の姉。

これより今の 人の世に



仁ナサケてふもの 残り居て
この世に長く 仁ナサケあり。

二

如是カクして親は おろかしき
不孝の兒をも 愍然アハレがり、
大人タイジンは 身を抛つて
衆生のために 道に死す。

三

面オモテも知らず、名も知らず、
知らず知られぬ 人同士、
何の心も なつ草の
原の中道 行く時に



肩にとまつた 馬ウマを、
拂トつてやつたが 縁縁となり、
相宿アヒヤしたる 其のゆふべ。
水あたりして 寝ぬ夜半ヨハに、
薬もらうて、看護ケンゴらるゝ、
それもをかしき 世スガタの相。
仁ナサケてふもの あればこそ。
仁ナサケてふもの あればこそ。

第九章

一

笑エミを含みて 其の次に
取りたまひしは 紅アカき石。



歡喜の色！、華美の色！、
 紅きは色の妹にて、
 若々しくも麗はしき。
 これより今の人の世に、
 「美」といふものゝ残り居て
 この世に長く「美しさ」あり。

二

うなる兒が 鮒釣る 里の溝川に
 櫻流るゝ 春の夕暮！、
 見ればこゝにも 美しさあり。
 山雞は 羽搏ちて 逃げて 谷川の
 水に點頭く 白百合の花！、



見よや其處にも 美しさあり。
 塵の世は 塵に任せて かゝほらず、
 大空高く 澄める月影！、
 かゝこに高き 美しさあり。
 海苔魚朶を 隠しつ見せつ 海中の
 風に亂るゝ 秋の朝霧！、
 こゝに幽けき 美しさあり。

三

まして女兒の 十五 十六！、
 春 十分の花の よそほひ。
 男は齡の 二十 前後！、
 秋 正に満つ 月の 精神。



身幹タネの矮ビきも 猶愛タらしく、
肌色イロの黒クロきも 雄々オウしくて善ヨシし。

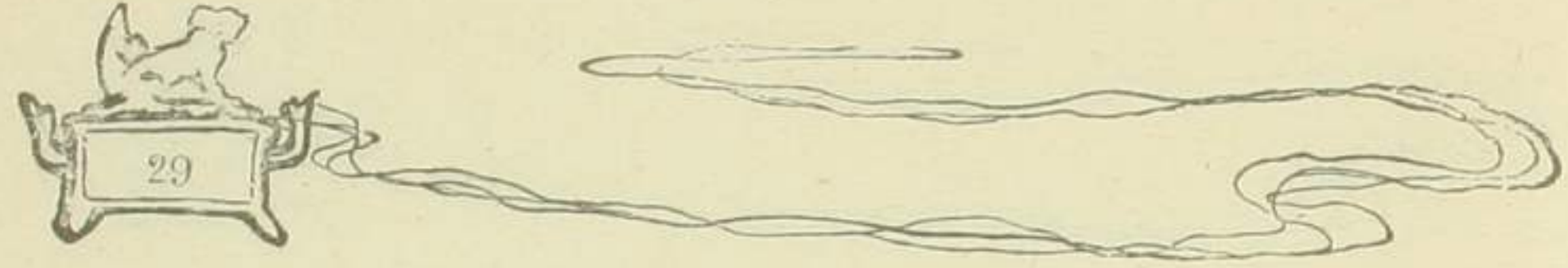
四

美ミといふものゝ 世ヨにありて、
世ヨはこれがため 香カひあり、
美ミといふものゝ 世ヨにありて、
世ヨはこれがため 光ヒカリりあり。

第十章

一

「我ワをも 御手ミテに 取りたまへ、
疾ハヤく取りたまへ、いざ〜と。」
自ミから 進マむ 黄キなる石イシ。



「さらば」と やがて取りたまふ。
黄キは おのづから 光輝カウキを
含フめる 色イロの 貴ウツクくて、
低ヒきに居イるを 肯ウケんせぬ
氣位キイ 高タカき 色イロの兄ケイ、
氣位キイ 高タカき 色イロの兄ケイ、
「希望キボウ」に満ミちて、神々カミカミし。

二

張ツルり弓ユミの弦ヒ！、何ナニぞ 直スなる！。
張ツルり弓ユミの弦ヒ！、何ナニぞ 撓カクまぬ！。
弦ヒの直スきは 弓ユミ 張ツルればなり。
勇士オモシの一念イツン！、何ナニぞ 烈セツしき！。



勇士の一念オモヒ！、何ぞ 屈せぬ！。
勇士の一念 強く強きは、
胸に希望ノゾミの 燃え 燃ゆればぞ。

三

君命 身に在り、劍 腰に在り、
風餐フクサン 露宿ロシュク 何かあらんや、
縦横ジュウコウ 馳突チトツす 千里 萬里、
樓蘭を斬つて 笑みて還らん。

四

張り弓の弦！、何ぞ 直なる！。
張り弓の弦！、何ぞ 撓ヤまぬ！。
弦の直きは 弓 張ればなり。



賢者の心！、何ぞ 廣きや！。
賢者の心！、何ぞ 枉ヤらぬ！。
賢者の心 廣く廣きも、
胸に希望ノゾミの 燃え 燃ゆればぞ。

五

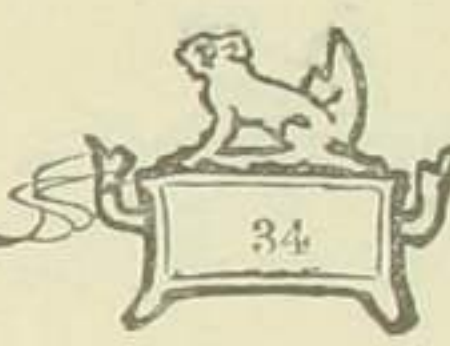
世のさがな口、我をそりりて、
誹謗ソウリョウの聲は 雷と はためき、
世の小人シロドの、我を呪咀ソひて、
咀呪ソの毒箭ドクヤ 雨と 降れども、
悠然として 身じろぎもせず、
莞爾と笑みて 心ゆたかに、
雲の 往來コキを 下に見なして



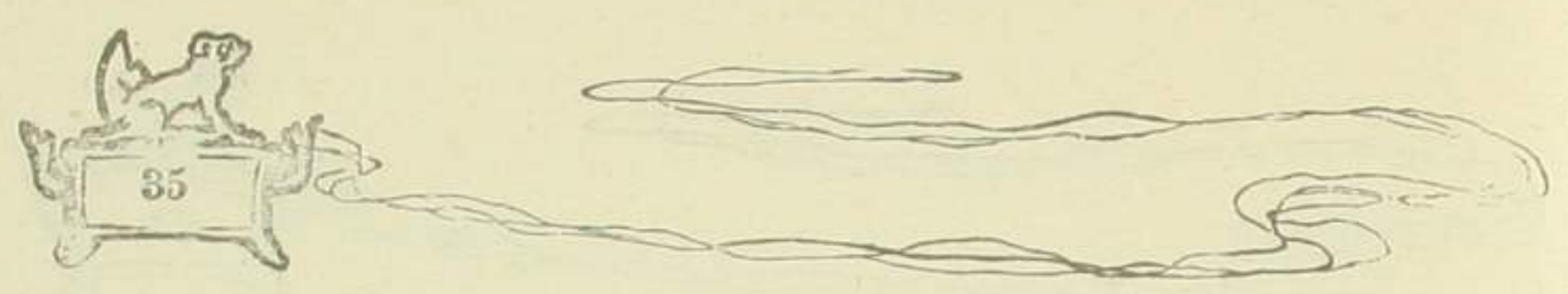
山の尾上に立つ 孤松、
 天風に奏でる 琴の音を
 梢に獨り 起すごと、
 世を教へんと 言をなす
 賢者の心 廣く 廣きも、
 胸に「希望」の 燃え燃ゆればぞ。
 「覺めて後、夢の悦び 甲斐無きを知り、
 無くて後、物の眞價を 人は知るなり。
 見よ、吾が言の いつはらぬをば、
 今宵は汝 悟らずも、
 明朝は汝 悟るべし。
 賢愚の差 三十里、



我 汝をば 欺かんや、
 たゞ夢にして 夢をば知らず、
 有るが中には 物の價を
 知らずて過す 人を悲しむ！
 見よ、吾が言の いつはらぬをば
 今宵は汝 悟らずも
 明朝は汝 悟るべし。
 六
 梅 笑へども かへり見ず、
 櫻 呼べども 見かへらず、
 人生の春 幾歳の
 おもしろ盛り 空にして、



頭腦カシラ 悩ます 幾何の問題、
 夜の眼 疲らす 燈前の辭書、
 下宿の二階 輕薄の
 障子の破れが 舌出して、
 野暮と笑へど 苦にもせず、
 「雪に身を偃す 吳竹の
 やがて世に立つ 日を見よ。」と
 學びの窓に 踏セウまる
 書生も「希望」抱くなり。
 七
 前世如何なる 罪ありて、
 此の世 悲しき 薄命フシアハセ！。



舞の扇の 黄金コガネ 照る、
 其の若かりし 往時ムカシより、
 歌の澁味を 人褒むる
 昨日に今日の 憂き身まで、
 誰がため 描く 眉の月、
 月の筵に 笑を賣り、
 言葉に花の 美はじき
 色を持たせて 賓客マロウドに
 酔をすゝむる 花の宴。
 人それくの 機嫌取る
 風に柳の あしらひも
 ほどく厭きて 自分から



懊惱^{オウノウ}る 心の もつれ絲、
 解^トけぬ 思^{オモ}ひ 癢^{シヤク}となる
 女も 終^{ハシ}の 末々に
 頼^タむ希望^{キボウ}の あればこそ、
 何^{ナニ}をか祈^{イノ}る 神^{カミ}まゐり、
 えりもと寒^{サム}き 曉^{アカツキ}天^{アメ}の
 風^{カゼ}を厭^{イヤ}はぬ 事^{コト}もあれ。

八

奥山^{おくやま}に 眞柴^{ましか}刈^{かり}る爺^{おや}、
 溪川^{せきせん}に 衣^いあらふ婆^{ばあ}、
 荒磯^{あらいそ}に かぢ布^{かぢぬ}取る海人^{あま}、
 牛^{ウシ}の脊^{せき}に 笛^{フエ}吹^ふく童^{わらわ}、



人^{ひと}といふ人^{ひと} 誰^{たれ}か皆^{みな}、
 希望^{キボウ}の無^なくて 世^よにあらん。

九

人^{ひと} 一日^{いちにち}の 命^{いのち}あれば、
 人^{ひと} 一日^{いちにち}の 希望^{キボウ}あり、
 人^{ひと} その希望^{キボウ} 絶^たえざれば、
 人^{ひと} その生命^{いのち} 絶^たえぬなり。
 風^{かぜ}は一年^{いちねん} 二十四番^{にじゅうよっぴん}、
 番^{ばん}々の風^{かぜ} 吹^ふいて休^{やす}まず。
 人^{ひと}は一生^{いっせい} 二萬餘日^{にまんよにち}、
 日^ひ々に希望^{キボウ}の 光輝^{こうき}を見る。
 希望^{キボウ}てふもの 世^よにありて、

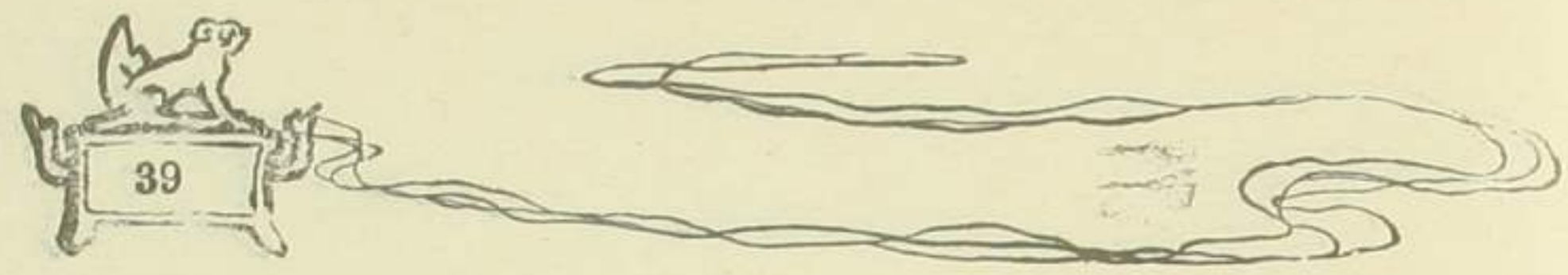


退潮に待つ 来る潮、
 満潮に待つ 減る潮、
 沈む日に待つ 明日の朝、
 入る月に待つ 此の夕、
 世は勇あり、光明あり。

第十一章

一

たゞ黙す 黒き石、
 「この我を 誰か遣れん」と、
 たゞ黙す 黒き石、
 「われ如何で、遣らるべき」と。
 破れし天を 補ふに、



此石を缺きては 叶はじと
 最後に御手を さしのべて
 取りたまひたり 黒き石。

二

黒きは色の 父にして、
 力ある色！、強き色！。
 百種の色 皆、これに出で、
 百種の色 皆、これに服す。
 色といふ色 黒にあひては
 勝ち得るものも 何あらばこそ。
 藍花の青きは 襦染となされて、
 臘脂の紅きは たゞ澤を増す。



力ある色！、いと強き色！。

これより今の人の世に

「強力」てふもの残り居て、

この世に長く「強力」あり。

三

天に聳ゆる千尺の

巖イホ二つに劈ツざさて、

山もどぶろにたがり落つる

水の強さの頼もしや！。

白雲クモ絶壁を蝕ムシんで、

老樹しづかに枯藤垂れ、

亂石セキ堰切ギる溪狭く、

山靈 水の去るを憐アハレめど、

「我」大海に到るべきなり。

我 大海にゆかんとぞおもふ、

我 強力チカラあり。我 進む。

磧セキ礫は 我 推し流してん。

磐石は 我 躍り超えてん。

我 強力あり。我 休まじ。

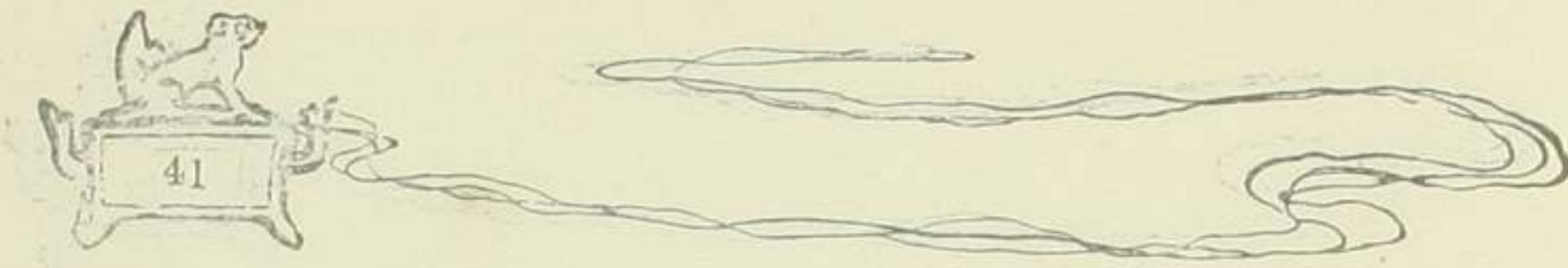
さへぎる岩は 岩 潰クやしてん。

攔ト住バむる岸は 岸 崩してん。

我 鬪ク戦カを 厭はざるなり。

我が呐喊し 怒號する

聲は 常磐に 衰へじ。

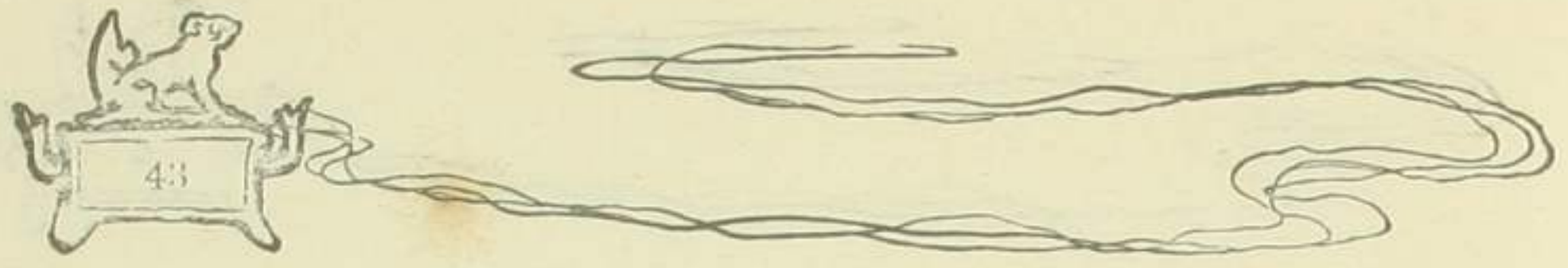




見よ、大海に 到らでは、
 必らず 已まじ、休まじ。」
 獅子と狂つて 雷と鳴る
 瀧川の水！ 瀧川の水！
 水の強力の 頼もしや。

四

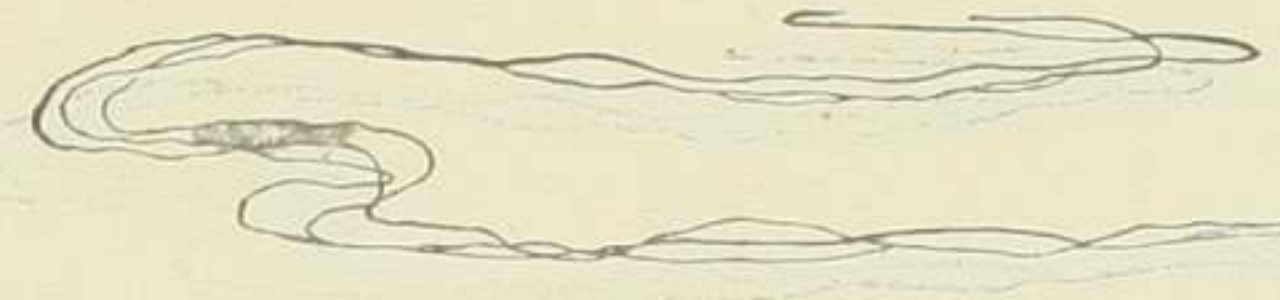
水暗き 野澤に生ふる 蒲の葉の
 裏面這ふ 螢 猶嫩き
 それより弱く 幽微なる
 光り 小さき 一點の
 火の有つ 強力 すさまじや。
 初め 燦々 力無けれど、



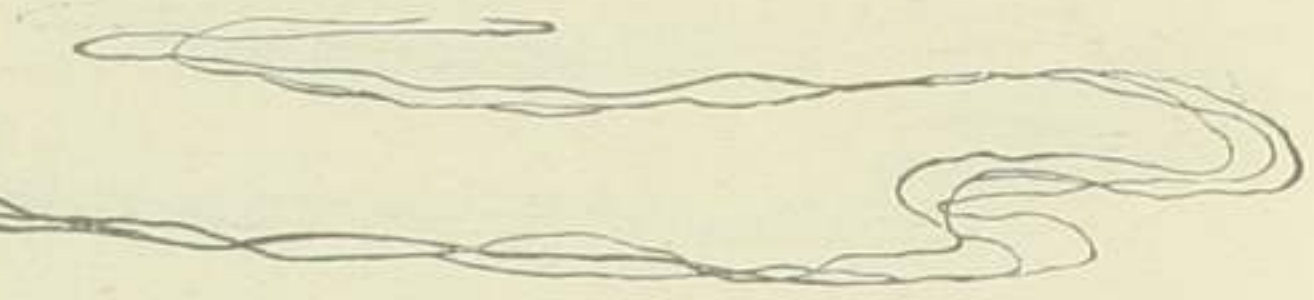
やがて 灼々 明るさを做し、
 炎々として 誇り 出せば、
 いつか みづから 風をさへ呼び、
 烈々として 怒り盛れば、
 終に激して 雨にさへ勝つ。
 火の有つ 強力 すさまじや。

五

「我、我が觸るゝ 一切を、
 伴ひ 連れて 天に還らん。
 天つみ空の 日の神の、
 勅令 かしこみ 天に還らん。
 日より來れる もろ／＼のもの！、



神 汝等を 召したまふなり。
 我に従ひ 天に昇れや。
 日より來れる もろくのもの！
 原に還れと 神 宣らせたまふ。
 我に従ひ 天に到れや。
 我は 還原を 促る使者なり。
 我が眼の 走り 行くところ、
 物 皆 黒き 烟をあげよ。
 我が手の 指の さすところ、
 物 皆 赤き 炎を立てよ。
 我が鞭の 責め打つところ、
 崩れよ、 墮ちよ、 地に委せよ。



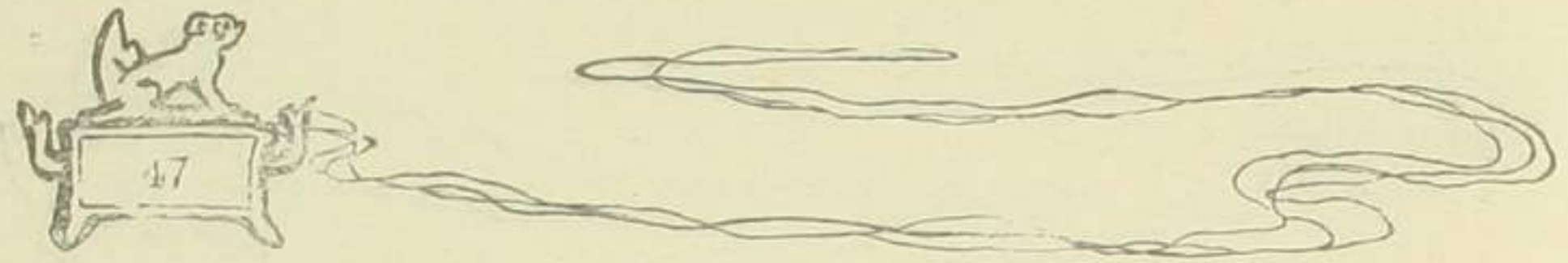
起つて 猛威を 打ふるふ時、
 火の 有つ 強力 すさまじや。
 豊 聳ゆる 花の雲、
 黄金の 蚩尾 日に逼る
 阿房の 宮殿も たちまちに、
 赤龍 蜿蜒る 最大梁、
 紅蓮 かゞやく 圓柱、
 扇 極に 風煽る
 眞黒煙 先立つて、
 萬點の星 迸り飛び、
 魔君 號呼す 聲の文、
 焼け落つる音 爆裂る音、



たゞ恐ろしき 一團の
 火炎の山と 熾え立ちて、
 百里を照らす 火の光り、
 幾日 空に 大空を焼く。
 火の有つ強力 すさまじや。

六

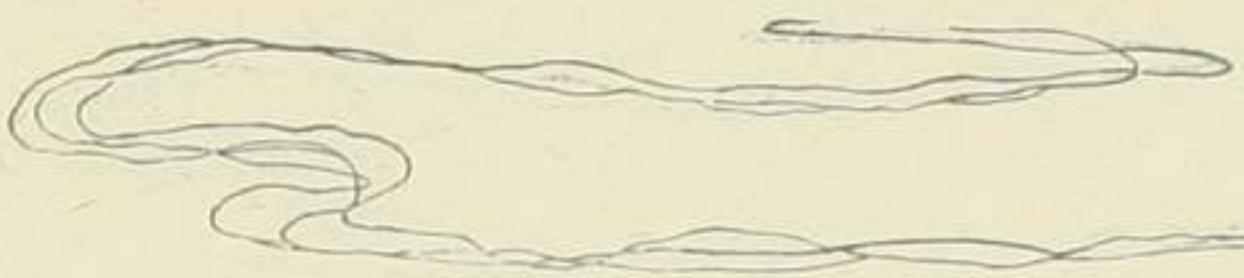
緑の色の 新しう
 一ト夜に 伸びて 若竹の
 はや、いさぎよき 音をなしたつ
 さやぎぞ初むる 朝あらし。
 一ト夜に つとと 伸びし若竹！
 竹には竹の 強力あるかな。



七

日は 暖かに 蝶 倦んで、
 しづかに垂ると 繡簾の
 内に 人無く 沈 薫る
 富家の 庭の 初夏の日午、
 玉巻く芭蕉 忽として
 輾り 開けて 枝蛙驚く。
 生絹 日に透く 碧一張、
 鸞羽 風あり 揺ぐ翠光。
 たちまち 開く 玉巻く芭蕉！
 草には 草の 強力あるかな。

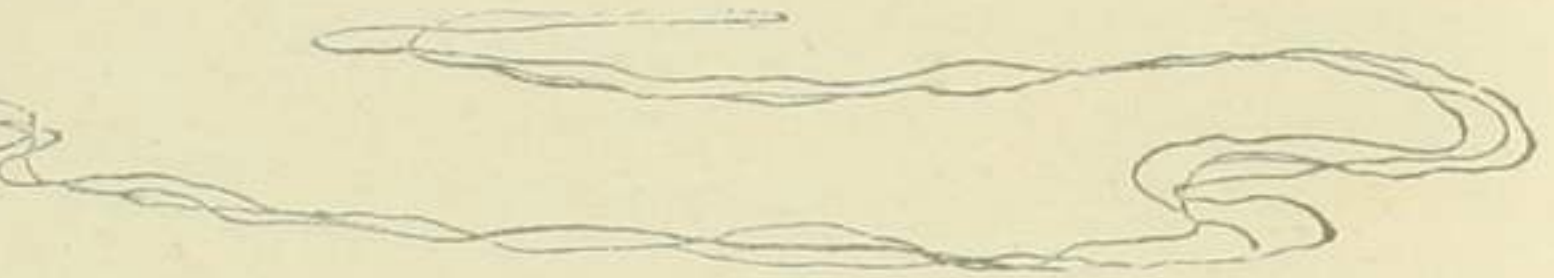
八



自己を支ふる 物質の強力！、
 他を動かす ものゝ強力！。
 強力交はり 萬象をなす、
 強力無ければ 世は空虚なり。
 動いて休まぬ 心臓の力に、
 六尺の身は 熱き血を盛り、
 進んで飽かぬ 精神ありてぞ
 人生五十 夢ならぬなる！。
 強力ありて 人の世は立つ。

第十二章

白き石、また 青き石、

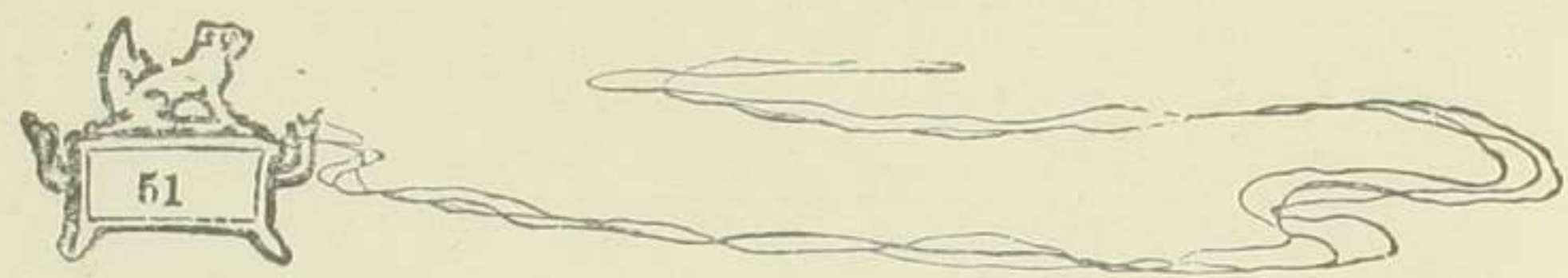


赤き石、また 黄なる石、
 黒き石をも 取り採りて、
 女媧氏は これを 煉り煉りつ。
 終に天をば 補ひし
 其の往時こそ 恨あれ！
 五色の石を取り煉つて、
 猶一ト色の 好き石を、
 遣れし事の 口惜しや。
 天 これがため 猶缺けて、
 補はれても 猶足らず、
 世は これがため とこしへに
 人の泣くべき 世となりぬ。



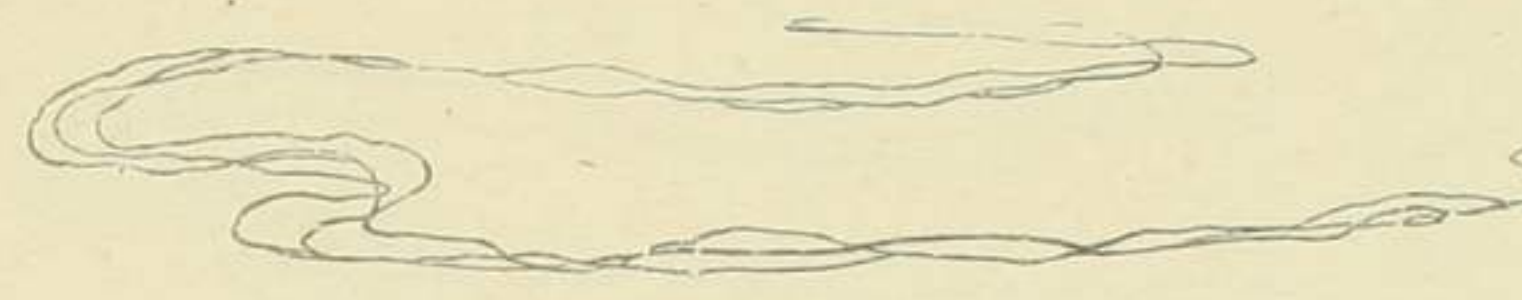
二

あゝ、忘れし 其の石は
 そもく 何の 色の石？
 あゝ、遺されし 其の石は
 たゞ 水色の 石なりし！
 水色の石！、色の無き石！、
 露に 影無く 玲瓏と凝り、
 色の無き石！、水色の石！、
 氷 曇らず 晶瑩シヤウエイと照る。
 この色 有りて 猶無きがごと、
 餘色イロに交りて 色を奪はず、
 この石 堅く 獨り勝れて、



三

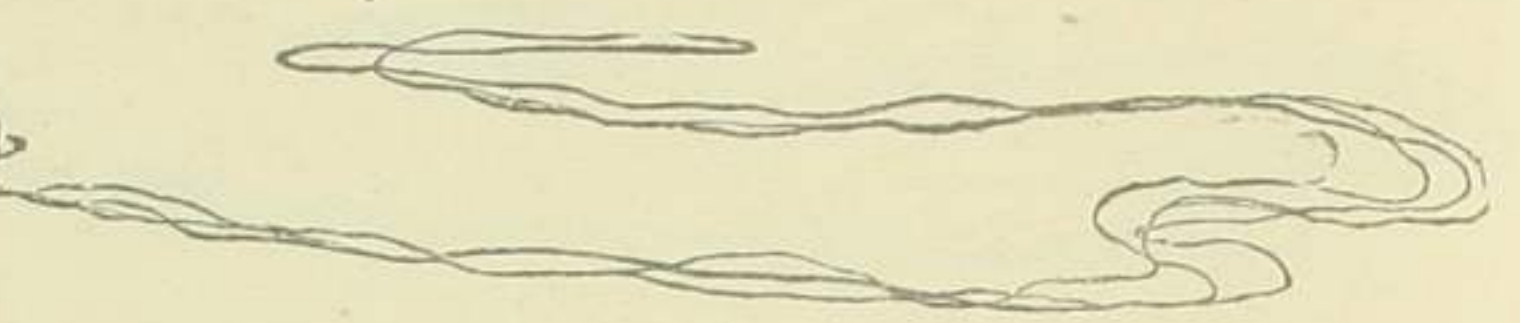
不壞フエの徳をぞ 身に具へたる。
 おもへば 恨み ある太古ムカシかな！
 有色の石を 採り取つて、
 無色の石を 取り忘れ、
 五色の石を 煉り煉つて、
 水色の石 煉らざりし
 女媧メウカウ氏の 事功ジコウの 愚オロシしや！
 その 色も無き 水色は、
 色の中にも どこしへの
 榮えを有ちて いつまでも
 變らで 若き 色の弟オト、



又 上も無く めでたかりしを
 取り忘れたる それよりぞ、
 天は起初に 復らずて、
 さらでも辛き 人の世に、
 長久てふこと 無くなりぬ。
 恨めしの世や、何じかも
 世に長久てふ 事の無き！。

四

岩根峻しき 高山の
 溪水 日夜 沙 流る。
 沙 いづくへと流るぞや。
 見よ、山 瘠する 秋の暮！。



水に底無き 山沼の
 萬頃 碧く 澄み切りて、
 一夜 天より 黒雲の
 垂れて 水面に 觸れし時、
 俄に 迷る 稻妻の
 光の絲の 縫ふ 雨の闇、
 樹を抜き 枝をもぐ風に、
 連れ とどろきて 龍卷の
 起りし事も ありしとよ。
 その沼 今は あせ涸れて、
 昔語の たゞ残り、

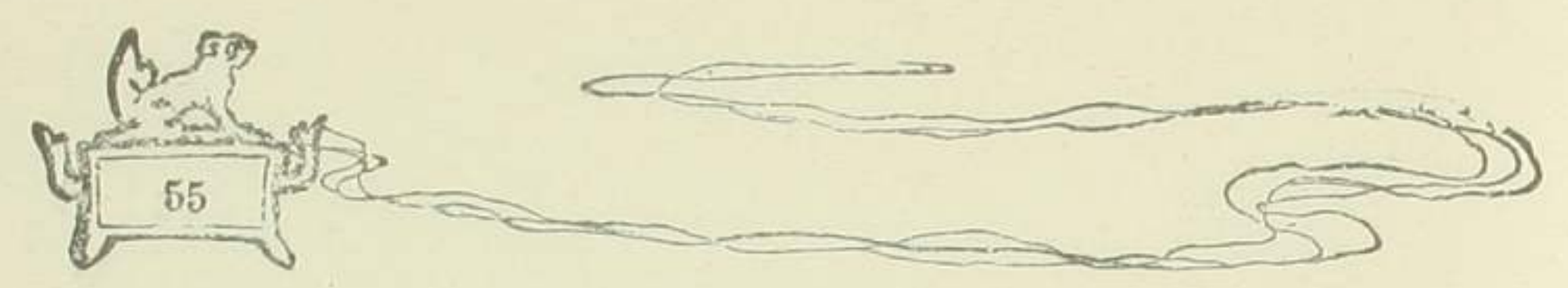
五



見よ、^{スミレ} 蜚咲く春の朝。

六

なさけ無き世や！、いかなれば
「^{トキハ}永久てふことの 更に無き！。
天人もまた 五衰あり。
美女の芳魂^{タマシヒ} あくがれて、
化^ナり出でし蝶の 慾も無く、
たゞ うらくと 世を経るも、
野分情^{ツレ}無く 吹き立てば、
羽の白粉^{オシロイ} 日に落ちて、
弱りくし 其の果は、
終焉^{ツイ}の姿の 口惜しく、



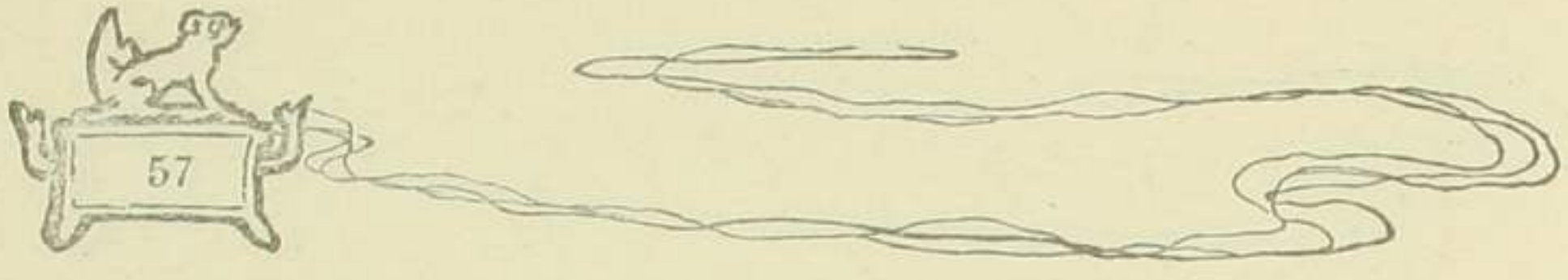
霜の小川の 水に委す。
なさけ無き世や、いかなれば
永久てふことの 更に無き。
蝶の衰へ 嗚呼 情無や。

七

口惜しき世や！、いかなれば
「^{トキハ}永久てふことの 更に無き。
英雄の末路^{スエ} また悲し。
怒り毛 空に 逆立て、
月に一ト聲 叫ぶ時、
林木 急に 恐れ 戦^{オウ}き、
秋ならざるに ひらくと



三片 五片 葉をふるふ
 獅子王の威も 力無や。
 金毛薄く 光り錆び、
 弛める皮に 骨高き
 老いての後は 昏々ど
 陽炎 燃ゆる、スナ 黄沙の上
 椰樹の根方に たゞ眠る
 其の眞額に 蒼蠅の
 翼小ざかしう 振舞ひて、
 むさきものして 侮れど、
 怒りも得せず、物うげに、
 わづかに 耳朶を 振つて已む。



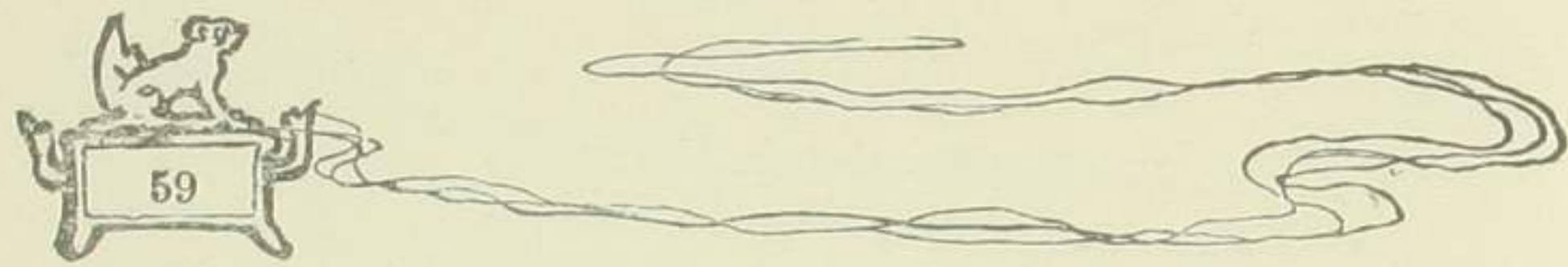
口惜しき世や、いかなれば
 永久てふことの 更に無き！
 獅子の末路の 嗚呼 口惜しや。
 八
 世はかゝる世ぞ、世はかゝる世ぞ。
 怒るも おろか、泣くも おろかよ。
 涙 淋しき 雨の 芙蓉の
 花の笑顔エガホを 強ひて爲つて、
 美人梅川 よくぞ云ひたる。
 同じ浮世に 同じ花、
 芳野 初瀬に 常夏の
 櫻が 咲くちやあるまいし。と。



世はかゝる世ぞ、世はかゝる世ぞ、
實にいつくにか 常夏の
花の咲く里 あるべきや。

九

世はかゝる世ぞ、世はかゝる世ぞ。
頼むもおろか、恨むもおろか。
「後の世までも 迷はん」と
戀に 泣きしは むかしにて、
「我をも 忍ぶ 人あらん」と
心の泉 塵を絶つ
歌に癩せたる 老の身の、
燈火 青う 瞬きて



凍れる鐘の 音の渡る
夜寒に 擁す 桐火桶、
彼の俊成が ほそくと
呻き出せる 聲を聞け。
「世の中を おもひつらねて眺むれば
むなしき天に 消ゆる白雲、
消ゆる白雲 痕無じと
ながめし思ひ、幽玄なる哉。
實に世の中の 貧富怨親、
宮も 藁屋も 仇もなさけも
眼に見ゆる間は しばしにて
やがて忽ち 消え失する



末白雲の 相形ぢや迄。

十

色無き石は 忘れられたり。

世に永久なる 事も無し。

卯月の風に、櫻 空しく、

十六夜の天、月の缺け行く！

八十年を 戀に 惱みし

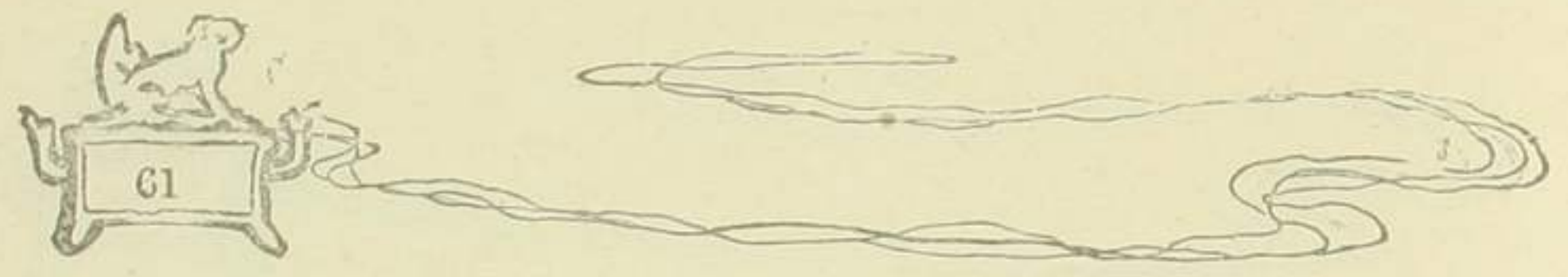
あはれ 赤猪子、何とせん 老。

四百餘州を 色に亂し

よしや楊氏も、詮の無の 死や。

十一

世に眞理あり、世に永久無し。



眞理 そもく 何のまことぞ。

「まこと」は 夢の 國の 法律よ！

「まこと」は 夢の 國の 法律よ！

十二

世に仁あり、世に永久無し。

仁 そもく 何ぞ はかなき。

仁は 風の 中の 花の香！

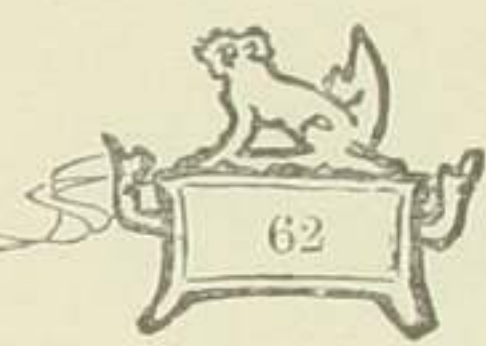
仁は 風の 中の 花の香！

十三

世に永久無く、美しさあり。

その美しさ 何に似たるや。

暴風雨の 起る 前の 燕虹！



あらしの 起る 前の 蕪虹！。

十四

世に希望あり、世に永久無し。

開けば 何も 無きものを、

戀じき人の なつかしき

ものゝ藏めて ありとおもふ

その玉手匣 ひらかんと

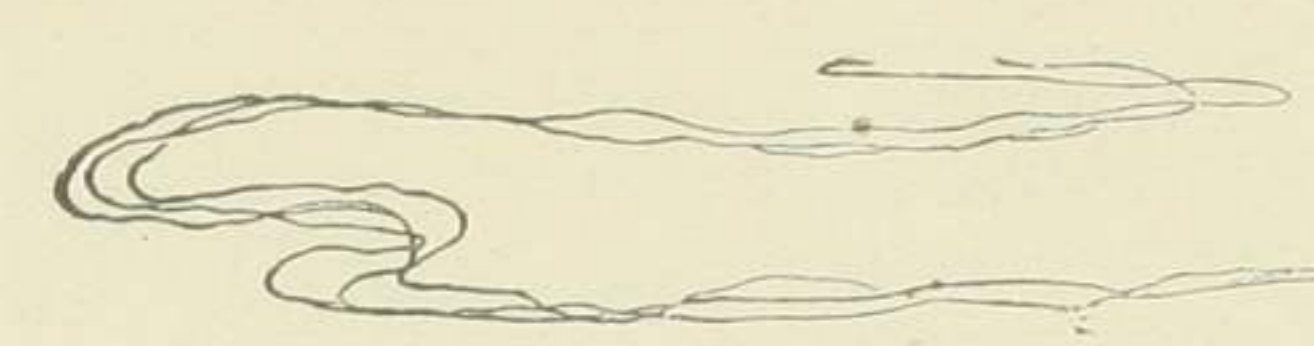
勉むるほどや 世の希望。

十五

世に強力有り、世に永久なし。

蠟の燃ゆる時、蠟耗せて、

強力 去る時、強力あり。



強力は往かず、また來ずて、
天飛ぶ星の、飛びて行く
さきには物も 無きに似たるよ！

第十三章

女媧氏 このかた 月日茫々、

現世 終に 頼むべからず。

天は 歪みて 長く 缺け。

地は 傾きて 猶 足らず。

七星 めぐり めぐり従ふ

彼の北辰も 正北には居ず。

磯に打つ浪 止む目なけれど、

海は やうやく 南へと退く。

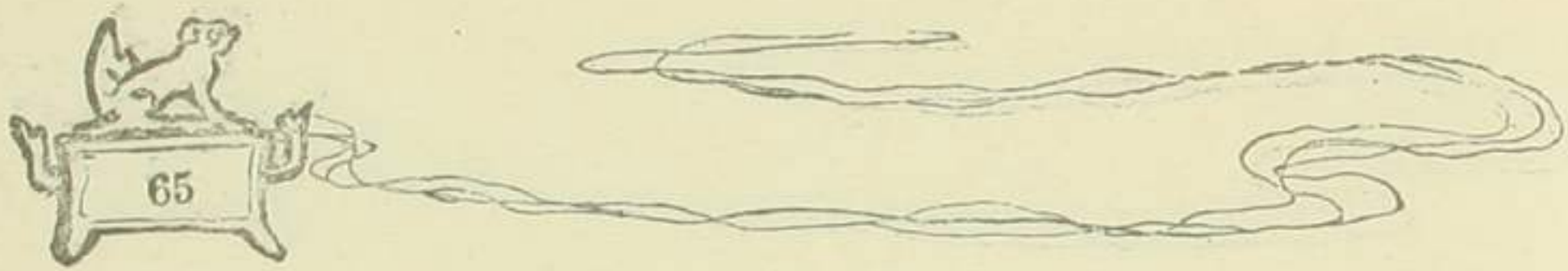




自然の定め、既に如是なり、
 人間の事 また何かあるべき。
 現世 終に 頼むべからず、
 現世 終に 頼むべからず。
 まことに 曲も 無の 現世や。

第十四章

うつし世 言ふに足らず。
 いふに足らず うつし世！
 我 現世に 心無きなり。
 我 現世と 相忘れてん。
 我が生 いくばく？



笑む日 いくばく？
 この 現世に 泣きて 愁ひて、
 何 いたづらに 悶え 狂はん。
 われ 現世に 眼をば背向けて
 我 たゞ 睡る 吾が廬の中。
 廬に 友あり、其の名は柳。
 柳 客あり、其姓は陶。

二

酒 濁りあり、濁れるもよし、
 濁れる酒を 且つ酌みて、
 琴に絃無し、絃無きも好き
 絃無き琴を かい撫でつ、

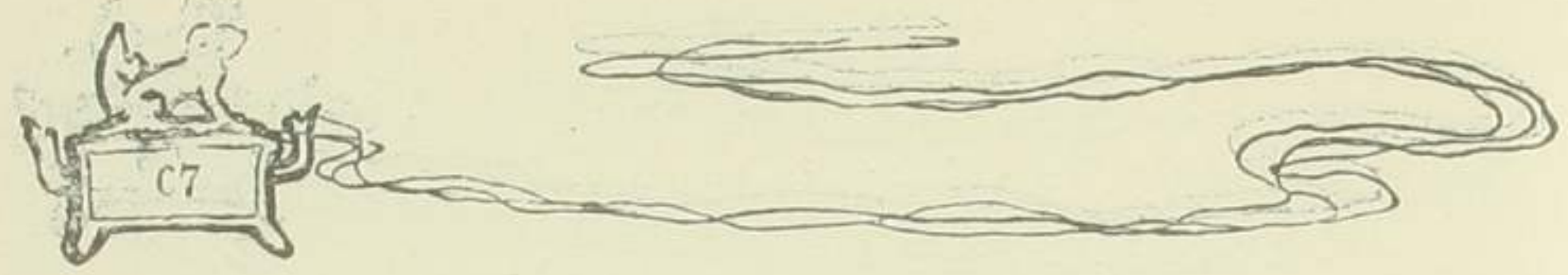


陶氏の翁 醉ふて歌ふて
 「鼎々たりや 百年の内、
 これをば持して、何 成さまくす。
 阿々。」と笑うて。長く嘯く
 聲 おもしろう 我が耳をうつ！。

第十五章

一
 うつし世 いふに 足らず、
 よろこび 何か あらん。
 つうし身 いふに 足らず、
 かなしみ 何か あらん。

二

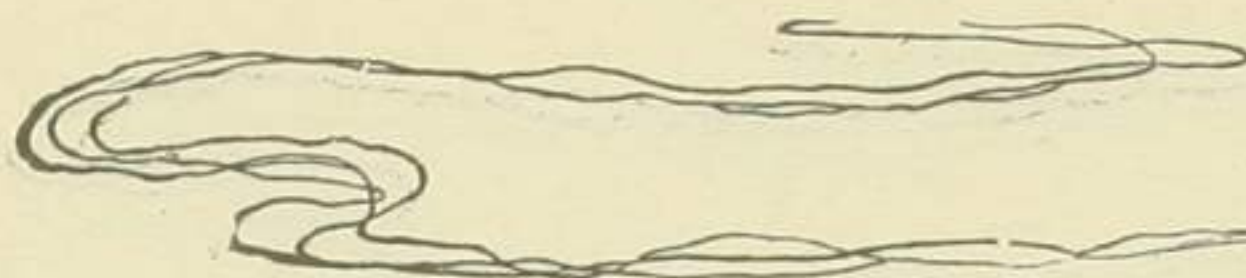


我と 世と 共にいつはり、
 世と我と 相あやまりて、
 この世をば 眞實と思ひ、
 この身をば 我とおもひて
 年月を あたら過しつ
 春秋を あたら経つるも、
 現世の いふに足らぬを
 つくんと 我もおもひさとりて、
 現身の いふにたらぬを
 しみんと 我もおもひ知りぬる
 其の日より 我 籠りける
 これの 慮に。



三

廬イホのうしろの柳ヤナギしづかに、
柳の絲イトの盡ヒネ目に垂れ、
廬の主人の心ココロしづかに
心の水のミヅとことばに澄スミむ。



第二篇

第一章

一

現世ウツシヨ いふに 足らず、
よろこび 何か あらん。
現身ウツミ いふに 足らず、
かなしみ 何か あらん。

二

我と世と 共にいつはり、
世と我と 相あやまりて、
この世をば まことと思ひ、





この身をば 我とおもひて

年月を あたら過しつ

春秋を あたら経つるも、

現世の いふに足らぬを

つくぐと おもひさとりて、

現身の いふにたらぬを

しみぐと おもひ知りぬる

其の日より 我 籠りける

これの廬に。

三

廬イホのうしろの 柳しづかに、

柳の絲の 晝日に垂れ、



廬の主人の 心しづかに
心の水の ところは澄む。

第二章

一

現世は まことにあらず、

現身は 我にもあらず。

現世は 影にも似たり、

捉へんに、捉へ處も無く、

現身は 讎敵カメキの如く、

いたづらに、我を苦しむ。

二

浮世は廻る 廻り燈籠！。



はじめをばりも 無く動く影、
 動きて動く 火の消えぬ間は！。
 この身は 何の 我の讎敵ぞ！、
 心の 常に それにひかれて、
 ひかれくゝて 長く忘れぬ！。

第三章

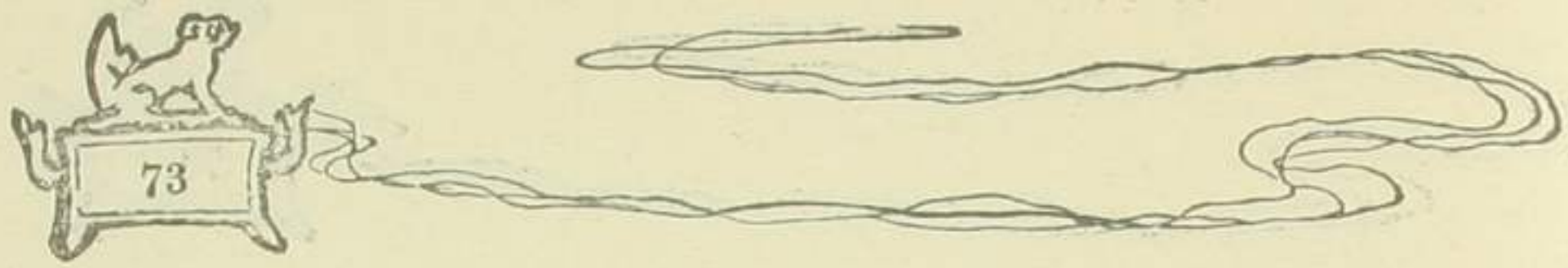
一

造物 人に 戯れて、
 人を五尺の 身に封ず。

五尺の此の身 何か好き？、

此の身は鐵の 囷圍ならずや。

二



囷圍 たゞ有り 窓五つ。

見よ 其の窓を 數へ見よ。

第一の窓 眼と名づけ、

第二の窓は 耳といふ、

第三の窓 鼻と呼び、

第四の窓は 口といひ、

第五の窓は 肌膚といふ。

たゞ五つある その窓の

中より外を 眺めては、

腰の鎖の 千斤の

重さに堪へて 泣きながら、

苦み躍り 跳ね狂ふ



瘡^ヤせ猿^{ザル} ひとり呼はつて
「我は人ぞ。」と 誇りいふ。

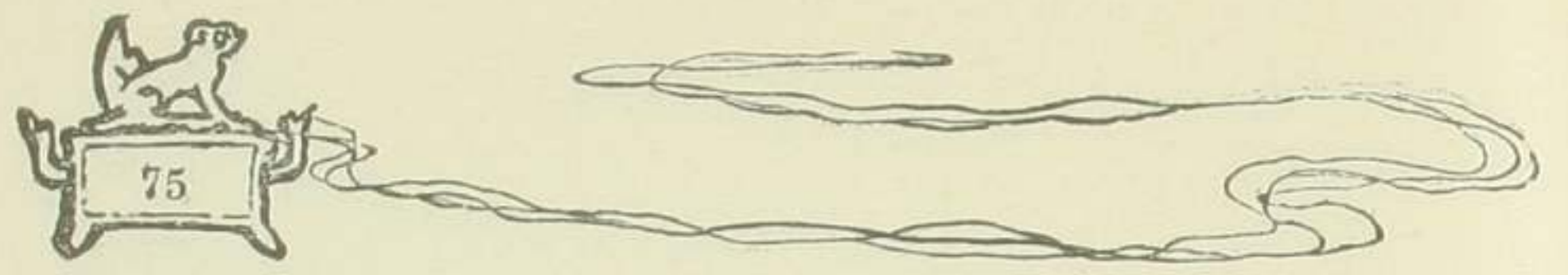
三

自から人と 誇れるものよ！
人にもあらめ、猿ならじ。
猿にも似たる 醜^{シコ}の奴^{ヤツ}よ！
猿にもあらめ、人ならじ。

第四章

一

造物 才^{サイ}を もてあそび、
人に示すか！ 自己^{オノ}が技巧^{ワザ}。
長さは 萬里 萬々里。



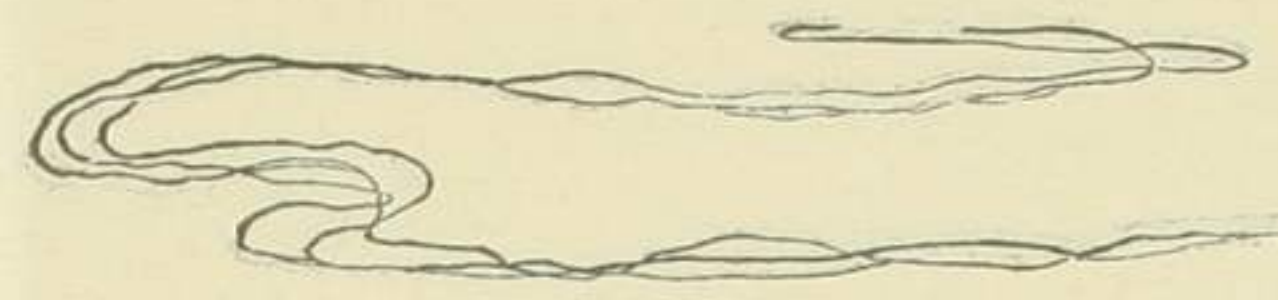
廣さも 萬里 萬々里、
見れども盡頭^{ヘテ}の 無き網を、
大初このかた 數千年、
今だに編みて 編みやます。
大空の中に 懸け晒らす！

二

網は目も狭^セき 枯梗^{カキ}すき、
風^ト返^トむべく 細密^{コウカ}なり。
其網や何？、其網や何？。
網に名ありて 「人の世」と呼ぶ！

三

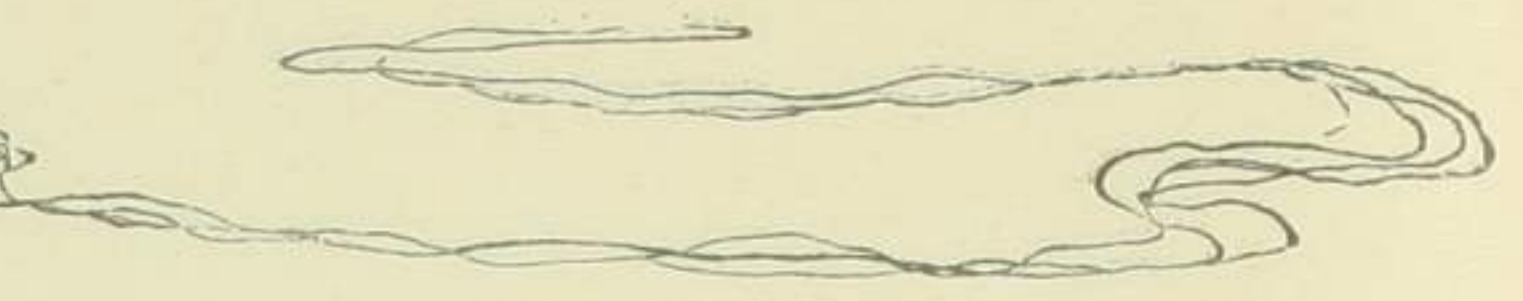
西に没して 東^{ヒシガシ}に出で、



南にくぐり 北に現る、
 網針の動き 須臾も休めで
 造化の編める この大なる
 網をぞ 人は 人の世と呼ぶ。
 網をぞ 人は 人の世と呼ぶ。

四

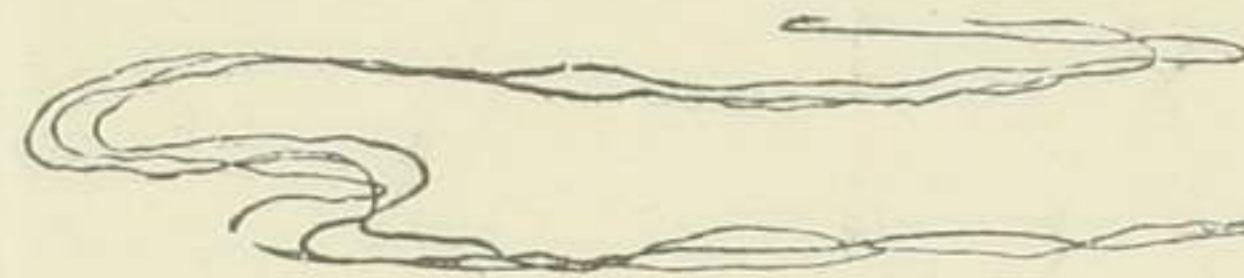
一ト目の四方 四つの結節、
 一節の中心 四線 攪まる。
 絲 縦横に 走り絡みて、
 力 互に 相保ち依る。
 左を引けば 右の引かれて、
 上方張らるれば 下方もまた張る、



網の相は そのまゝに
 吉凶ともに 響きあふ
 この人の世の 相なり。

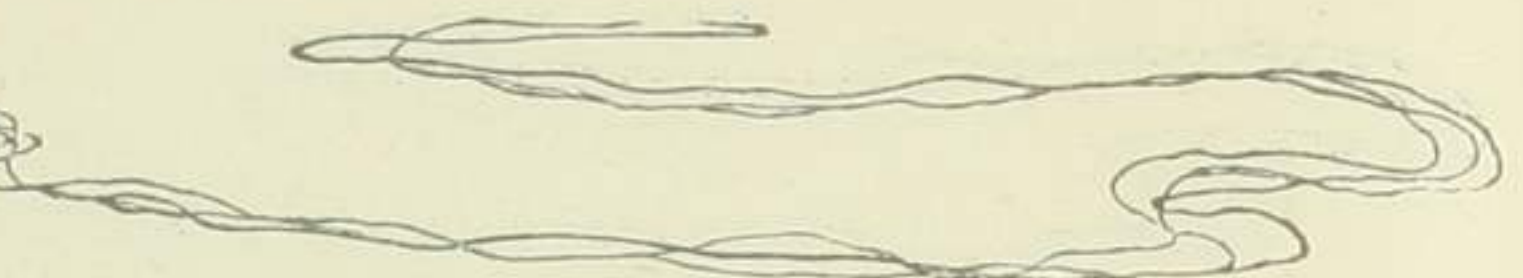
五

結節積んで 網を編み成し、
 人あつまつて 現世を成す。
 我も一つの その結節よ。
 他も一つの その結節よ。
 わが目の上の 結節の
 近き二つは 父 母よ。
 わが目にならぶ 結節は
 妻よ、弟よ、兄 姉よ。

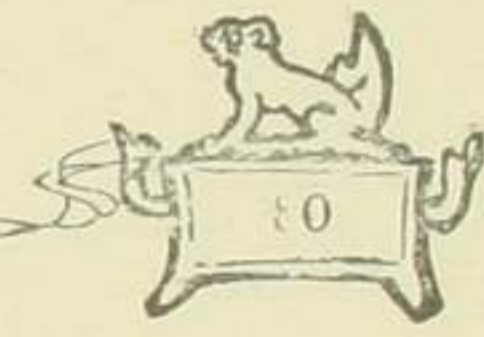


わが目の下の 結節は
 我より出づる 子よ、孫よ。
 我に縁ある 朋友は
 絲相近き 仲らひの
 その結節の 數々よ。
 あゝ現世の わづらはじきや。
 造物 我を 編みつけて
 我を一つの 結節としぬ。
 われ自由なし われ自由無し。
 われたゞひとり 如何でかは
 我がおもふまゝに 世にはあり得ん。

六



網は 連り 連れり、
 恒沙の 數の 結節の
 こなたの 端の 結節と
 かなたの 端の 結節と
 間は 遠く 隔てども、
 千里相牽く 絲の綾。
 七
 世に區劃てふものも無し、
 幾千年は 縦につらなり、
 幾大國は 横に布けども、
 過ぎし世の人 今の世の人、
 彼の國の人 此の國の人、



間は遠く 隔たるも
 迎れば縁の 無きも無く、
 たゞせば心 通はぬも無し。
 血統つらなる 百代の前、
 勇に誇りし 猛き祖先の
 その血の熱は われに傳はり、
 我が胸の中 火は燃ゆるなり。
 山河はるかに 遠く距れし
 異國人の 物をおもひし
 そのおもひ 猶 かくに傳はり、
 我が胸の海 これを湛ふる。

八



世はたゞ網ぞ、我はたゞ
 その結節の 一つぞや。
 結節 一トつ、おのれのみ
 善くとも何の 甲斐あらん。
 此の人の世の 煩さきに
 我 白壁の 徳を懐くも
 人の 踏立つる 紛々の塵
 落ち來て積もる そを如何にせん。
 此の現世の 何か好き！、
 此の現世の 何か好き！。
 現世はたゞ 我を苦しむ。
 我たゞひとり 善き 甲斐無や！



隣家の嬰兒泣き叫ぶ時、

我が酒不美しくみづくさく、

對戸の妻の 燻焼く暮、

我が梅 薫る ゆかしさも無し。

第五章

一

うつし身 いふに足らず、

此のうつし身の 何か好き！。

うつし世 いふに足らず、

此の現世の 何か好き！。

實在 すべて いふに足るなし、

空想 ひとり よろこびつべし。

二

實在 實か？。實在は空！。

空想 空か？。空想は實！。

見よ！、實在は、たゞ貝の殻！。

醜く 磯に 横たはるのみ。

聞け！、空想は 鳥の飛ぶ道！。

妙に 虚空に 充ち満てるなり。

三

磯の貝殻 日に曝れて、

其末 終に 何處に行か行く？。

其末 終に 何處に行か行く？。

鳥の飛ぶ道 跡も無けれど、





虚空はすべて 鳥の飛ぶ道！
鳥の飛ぶ道 長く留存まる！。

第六章

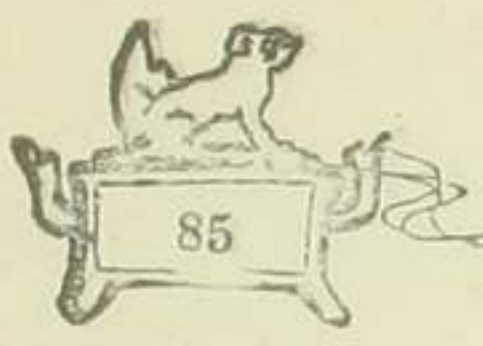
一

銅雀の臺 いくにかある？
たゞ蜃樓と 消えてほろびて
一片の遺瓦 既に稀有なり！
パベルの塔の 何となりじや？
幾冊の書の 枕くづれて、
假寐の夢の 痕無きが如！
實在の實、空想の空、
相距る事は 一步半歩よ。

二

實在や何？、空想や何？、
物質の 虚空を 塞ぐをば
これ實よとて 人は重んじ、
思想の 時間を 填むるを
たゞ空として 世は軽く視る。
おろかや 實も 實ならで
空も 空には あらざるを、
妄執の雲 深くして
解脱の月の 牙を見ず
自他迷ふ 五七十年！。

第七章





一
白髪の二人の翁、

碁を圍む小齋の中。

其の心 たゞ石子イシに在り。

得失に心を勞ツカらせ、

殺活に思をいたむ。

長き眉 或は皺み、

嗟ナガく聲 時に起りて、

ひたすらに 相争へど、

一局の 其の碁 終れば、

其の石子を 取りても行かず、

其の石子を そのまゝ置きて、

ゆるく吹く 煙草の煙、

悠然と 笑ひ語らふ。

二

心と心 戦タガつて

我と彼とが 碁を圍む。

石子イシは假物！ 石子にそも

何のあるべき！。石子は假物！。

第八章

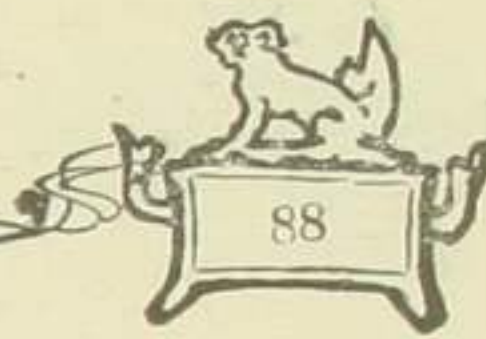
一

岸の楊樹の もさくくと

生ひたる中に 身を埋め、

河の流れに 打對ひ、





隠士 盡日 鯉を釣る。

二

釣綸 たるむ 春の風、

黄蝶 睡る 釣竿の先、

天地 音無く 雲淡く、

河水 碧に 膩膏凝る

景色長閑き 彼岸過ぎ、

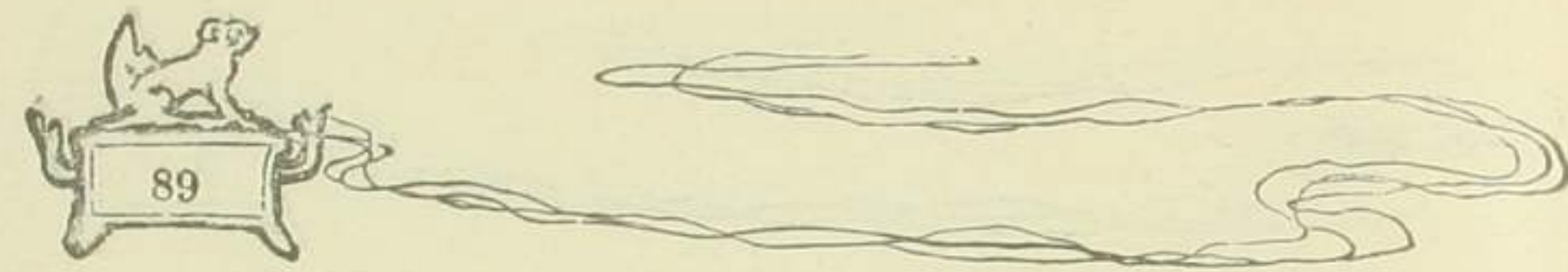
心は釣魚の ほかも無く

時を過ごして 其の夕、

歸りて魚を 家貧の

隣の 軀に 呉れてやる。

第九章



一

心 心を 和らげて

われたどひとり 釣を垂る。

魚は假物！、魚に抑

何のあるべき！。魚は假物！。

現世 何ぞ。現身 何ぞ。

實在は 皆 釣の魚！

物質は 皆たゞ 碁の石子よ。

我嫌はずば 其を假りるまで！。

二

魚忘るべし。石子忘るべし。

達人の碁は、石子無くて濟み、



高士の釣は、鉤に魚餌無し。

絃無くて琴 聴くべくば

宮商の調キウシヤウ それも要なし。

實在すべて 忘るべきなり、

空想ひとり 樂みつべし。

第十章

實事は 積んで 歴史 世に生ナり、

空想 凝つて 詩歌シカ あらはる。

歴史の あたひ そもや幾何？

詩歌シカの かをり なつかしや たゞ。

第十一章

一

夜半の寐覺に 聞く雨の

ふりにしかたを かへり見て、

燈火ほそき 閨の中、

浮世 過ぎ來し 我が歩ツの

踪跡をおもへば はづかじや。

おもふ通りを そのまゝに。

心まかせに 眞直マコトに

つい 歩ツいたる 事も無く、

潮ウしほのさし引く 沙濱スナの

浪打際に 風あらし

中を うねく 幾うねり

すぢりもちりて 千鳥行く





それにも似たる ありさまや！。
事實は心と 異なりて、

心に事實は 伴はず、

胸の思ひは 空になり、

たゞ いつはりの 痕残る！。

二

歴史の價値アタヒ そもや若干！。

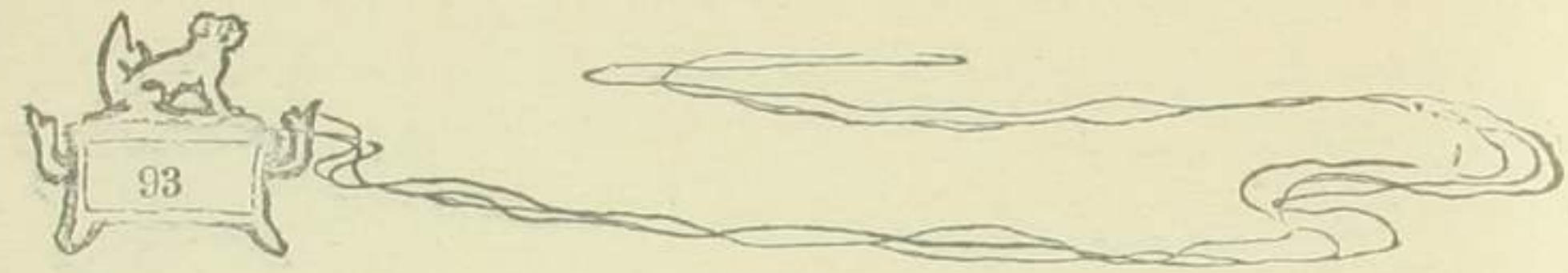
かよわき鳥の 濱づたひにし

その足跡が 何の眞實マコトぞ！。

さして退く潮！、潮の妨害サマタケ！、

吹いて 吹く風！ 風のいたづら！、

潮と風とに 心ならずも、



直には行かず 立タテ杵シに行く

かよわき鳥の 濱づたひにし

その足跡が 何の眞實マコトぞ！。

何の 歴史の まことめかして

事實マコト 事實で きつい嘘つく！。

六千年の 人間ヒトの歴史は、

濱の千鳥の 足跡ぢやまで！、

濱の千鳥の 足跡ぢやまで！。

第十二章

一

世に事實ほど 虚妄ウソなるは無し！、

世に事實ほど うそなるはなし！。



深潭の水！、深潭の水！。

水は表面オモテの暗くして

くぐりて見れば ほがらかに

中は明るく 光りあり。

明燭の火よ 明燭の火よ！、

火はその外邊ソトの 光れども

中心シロは黒みて 薄青く

内部ウチは却つて ほの暗し。

二

ゆかしの思ひ そめし時、

口でけなすは 戀の癖、

たゞ人前を いろ／＼に



諺ことわざつて置いて 反對ウラハテに

心の底に なつかしむ。

世よに事實マコトほど 虚妄ウソなるはなし。

三

まこと好かぬは 慇懃マコトの

坐まなりの言葉 美しう

候さしつかへべく候に あしらふて

逆さからひもせず 留とどめもせず

流ながして仕舞まふ 塵芥チリクサ、

潮うしほに任せて 埒さ明ける。

世よに事實マコトほど 虚妄ウソなるは無し。

四



世に事實ほご うそなるは無し。

黄玉の盃、瑠璃の壺、

褒むる男は まづ買はず！。

酷い事いふ 有情漢の

牡丹 賣らるゝ 花の市！。

世に事實ほご うそなるは無し。

五

世に事實ほご うそなるは無し。

氣は世を蓋ふ 項王の

猛きも 虞氏に つらからず！、

情餘れる 樂天の

樊氏を放ると いひしあはれさ！。

世に事實ほご 虚妄なるは無し。

六

世に事實ほご 虚妄なるは無し。

まして事實も 傳はらずして

持つ酒盞の 酒にさへ

蛇と動ける 月の影、

蛇となりたり 月の影。

歴史が 何の！。何の 歴史が！。

何の！、歴史が 實傳ふる！。

虚妄を つらねて 世に歴史あり！。

おろかや人の 自己をいやし、

自己を歴史の 犠牲とせんとす！。





歴史の犠牲と 身をなさまくす
 意の何ぞ 自己を卑しむ!?

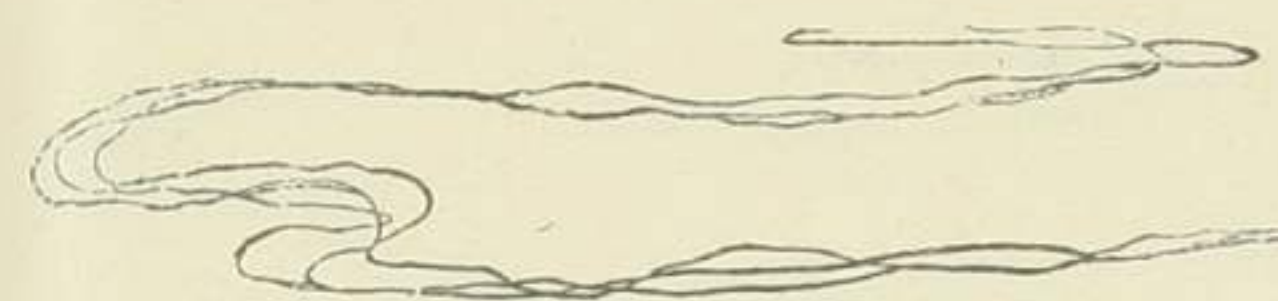
第十三章

一

實在 いふに足らず、
 物質 たゞ假るべし、
 世に事實ほど 虚偽は無く、
 虚誕を束ねて 歴史成り出づ。

二

うき世の人の おろか! おろか!
 たゞ實在を 實と尊とみ
 この空想を 空と蔑視して、

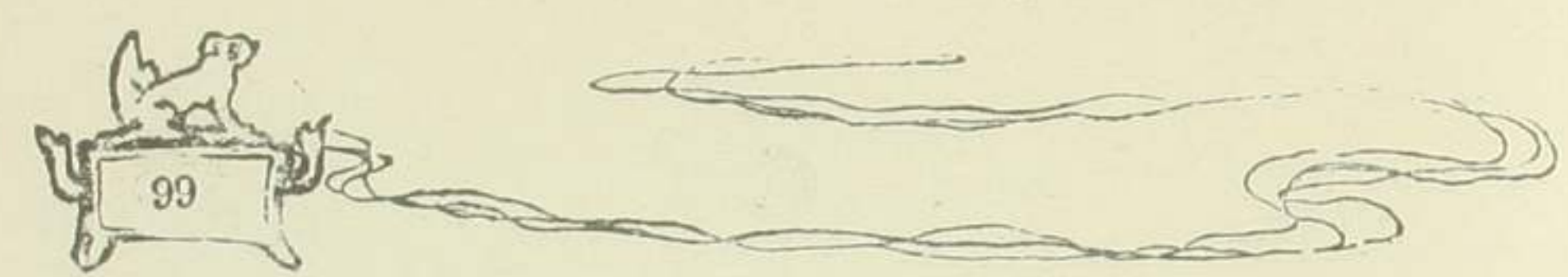


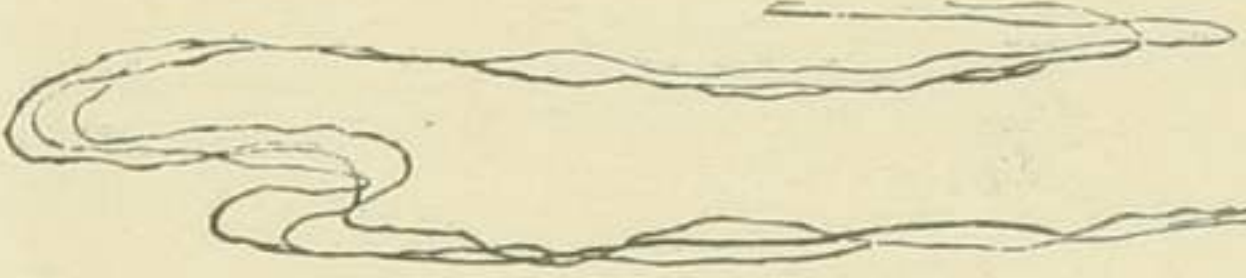
我が懐中の 珠を忘れつ、
 河原の沙裏に 黄金を覓むる!
 何ぞや河原に 疲れ勞るゝ!

第十四章

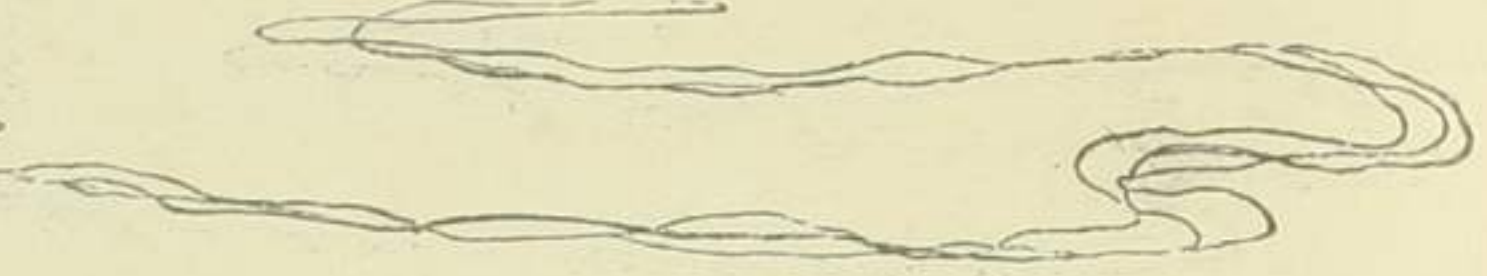
一

歴史の神像の 見ても見にくや!
 たゞ冷やかに 重き鉛を
 つくねくゝて 其の肢體成る。
 見よ、其の像は 天に沖りて
 世にいかつげに 聳え立てども、
 「史家」と名を呼ぶ 里の童兒が、
 鈍り まつはり 遣ひ上りては





小さな鐵の 鎚を手に取り、
 「此處の肉置 我が神の
 真相に似ず」と 丁々を撃ち、
 「この筋骨 我が神は
 如はおはさず」と 打ち打きて、
 休む時も無く 鎚を揮へば、
 神像は鉛の 反抗力乏しく、
 打たるまゝに 黙々として
 片頬は隆く 片頬は低く、
 或は額に 瘤と陥缺を
 鎚ち成されても そのまゝに
 寐ぼれしごとく 立ちたまふ。



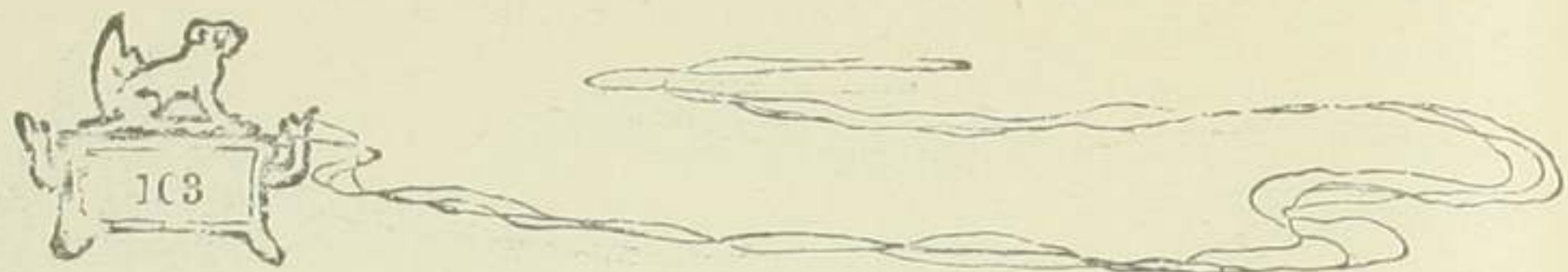
歴史の神像の 見もて見にくや。
 抑や神威の いづくにかある！
 二
 おろかや人の、人のおろかや。
 生命もあらず、光明も無き
 歴史の神像の 足下に立ち、
 神の慈悲の まなじりを得て
 その懐中に かきも抱かれ、
 恩寵に誇る 兒とならんとして、
 櫻咲く春 春にそむきつ、
 友おもふ夜を 友もたづねず、
 戀もなさけも 犠牲にして



なご其の神を 崇め尊む？
 神 靈ありや。神に靈無し。
 神 情ありや。神に情無し。
 鉛の神像を そも何にせん！
 たゞ冷やかに 重きばかりの
 鉛の神を そも何にせん！。

第十五章

冷やかにして 重きばかりの
 酷き歴史の 神の御前に、
 膝を屈めて 何をもとめん！
 詩歌の神は 愛に満ちたる
 御手さしのべて 笑を含みて、

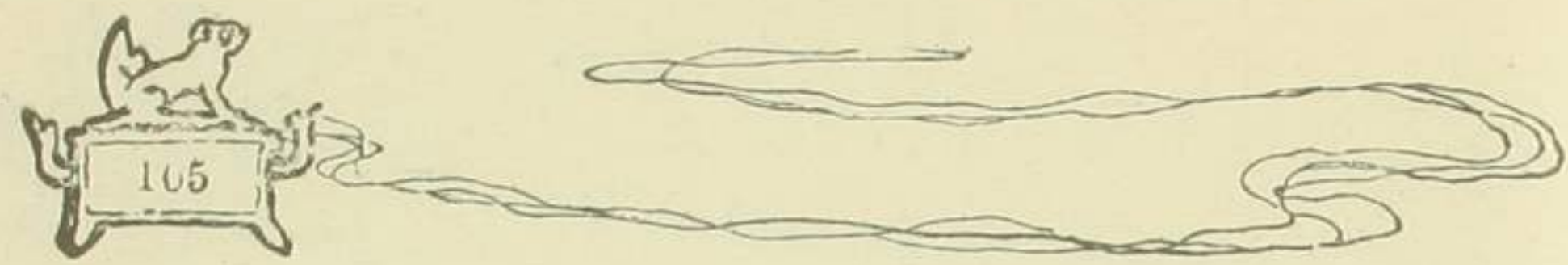


吾が頂^{ナツキ}をば 塵^チでたまふなり！
 あらなつかしの 我が神や！
 子は孝ならで 親を残して
 他郷の山に 遊びくらせど、
 親は飽まで 子をおもふ
 心 千里の 野に迷ふ！
 人 詩の神の 愛に負きて、
 たゞあさまじう 現世^{ウツミヨ}の
 榮華^{チヨウカ}の 衢^{チヨウカ} 慾^{ウツクシ}の 辻、
 そこにかしこに 狂ひても、
 神は あはれと 見たまひて
 憎しとおぼす ことも無く、



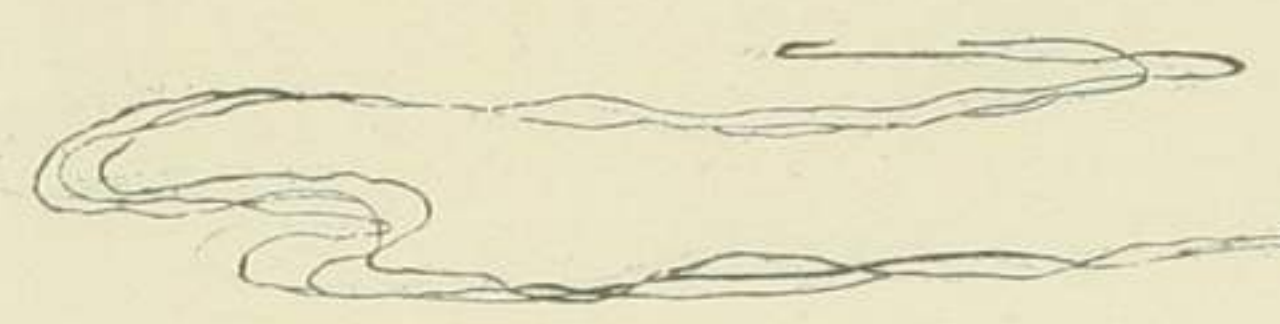
たまく辛き 瀬にあひて、
 その御仁慈の 戀しさに、
 一ト聲呼べば 時も無く、
 「わが兒！そこにか！いとしや、」と、
 火のもゆる中 水の中
 劍の光 飛ぶ中も
 厭はで走り 來たまひて、
 世にあたふかく 柔かき
 御袖の下に 罪の子を
 おほひて護ひ たまふなり。
 あらなつかしの 我が神や。

第十六章

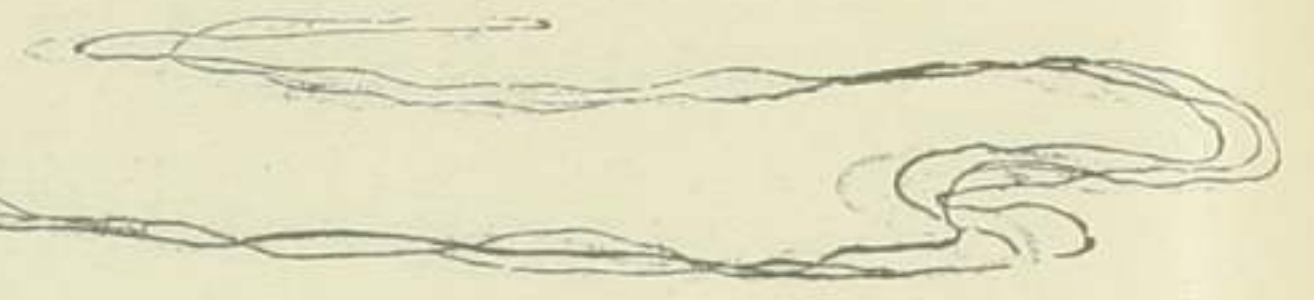


一
 風無き晝も ざわつきて
 浪の頭の 皆白む
 阿波の鳴門の 春の潮！
 その潮さゝるに 笹の葉の
 小舟浮べて 漕ぎ渡る
 人の世のさま！ あはれなり。
 漕ぎて渡りて、いづくにか
 結局の碇泊地の 好き處ある？。

二
 平沙 連なる 天の盡頭、
 新月 血より 紅くして、



物に露無く 風乾き
 疲勞れし駱駝 膝を折る
 沙漠の旅の 夜の夢に、
 清泉 流るゝ 音を聞く、
 それにも似たる 人の世や！
 嬉しき夢は さめ易く、
 辛きおもひの 日は長き
 六十年の 旅行の末、
 やつれくゝて 辿り着く
 其處に誰ある！？、誰そこにある！？
 闇に倚つて待つ 母もあらねば、
 主を見て勇む 狗もあらずて、



人聲もせず 燈も見えず
 たゞ夕靄の 籠むる故郷！
 三
 見る眼も眩む 水の渦！、
 鳴門の船に 身を載せつ
 浪に幾春 たゞよひて
 つひの碇泊地も もとめかね、
 たゞいたづらに 疲れたり。
 四
 足蹴焦ぐる 熱き沙、
 沙漠の旅に 喘ぎく
 照る日の下を 我行きて



我幾度か 夜の夢の
果敢無き痕を 悲しみて、
空しく 涙 じぼりたり。

五

鳴門の船路 我 堪へず、
沙漠の旅に 我 倦みぬ。
人の世 つひに いづくにも
つひの泊りの 頼むべき
ところも無きを よく知りて、
人の世 つひに いつか我が
樂しき夢の 覺むる夜半
「あなや」と聲を 立つべきを



身にしみて 我 おぼえたり。

第十七章

夜に入つて たゞ鶴白く、
桃李隠れて 梅残る！。
人やゝ老いて 神を知り、
世念失せて 詩をおもふ！。
浮世の憂さに 堪へかねて
さまよへる子の 母を呼ぶ
聲も涙に 打曇る
其におなじき 我がおもひ、
他し意も 今は無し、
われたゞ頼む 歌の神！。

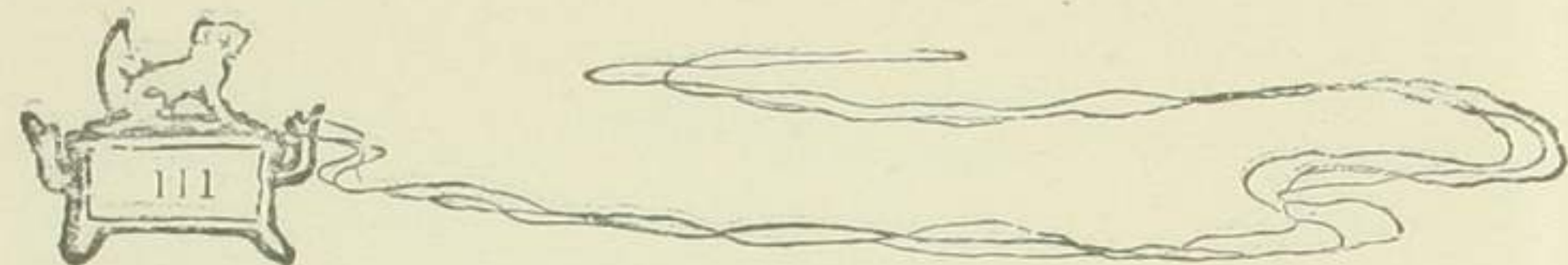


わが廬に我がいつく御神は
空想の神！、歌の神！。
あらなつかしの歌の御神や。

第十八章

一

寒さ怯るゝ優育ち、
美人 爐に寄る 冬の夜。
見よ 紅色の 爐中の火、
春を湧かして 柔らかに
ころ／＼燃ゆる 美しさ！。
真紅の躑躅花 日に咲えて
水にうつりて 影動く！。



二

火の燃ゆる時 石炭 價値あり、
燃えざらばたゞ 一塊の石！。
一塊の頑石！ 黒く醜し、
長く塵土に 棄たるべきのみ。

三

頑石 價値無し 火に價値あり、
火に價値あり 頑石 價値無し！。
心ある時 身に 價値あり、
心なき時 身に 價値無し！、
頑石たゞ燃えよ 燃えよ 熾んに！、
燃ゆる時汝が 光輝あるべし。



たゞ一心の 火光無からば、
 五尺の形骸 膿血を盛る
 此の身醜く 厭ひ棄つべし。
 三百の骨 皆一心の
 花と燃え立つ 火を揚げて
 燃えよ 熾んに 人の一代。
 燃ゆる時 人 光輝あるべし。

四

石炭の中には 火の價值
 さらにあらずて 火の中に
 石炭の價値の 有りけるを、
 我か身の中に 我ありと



思ひ僻めて 何時よりか
 心の中に 身のあるを
 忘れ果てけん 愚さよ！。

五

心は火なり 身は燃材なり。
 綾の幅紗に 石炭をつくみて
 秘めしむかしの はづかしや！
 思ひは主なり、物貨は奴婢なり。
 尊き頭 押し下げて
 奴婢を崇めし むかしをかしゃ。
 現身何ぞ、いふに足らず
 心まことに いとをしむべし。

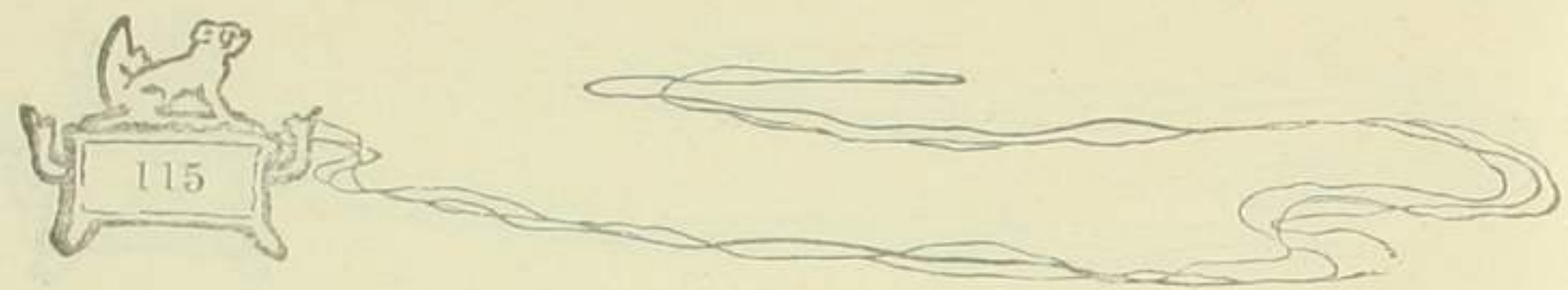


現世は我 おもひきりたり、
 詩歌の神の 御國戀しや。

第十九章

一

歌をおきて あだし心を 我有たば、
 毒龍怒る 雲の中、
 蒼海の水 舞ひ立つて
 北斗をひたす こともあらなん！。
 あく 歌をすてく また現世を 思ひなば、
 金翅鳥王 天に荒びて
 鐵翮拂ふ 天の河、
 颶風起つて 星落ちて



雨と飛び散る こともあらなん！。

二

歌をおきて 他し心を 我持ちて、
 廬にいつく 我が神に 我負きなば、
 その狂ひ立つ 蒼海の
 水に溺れて 身は悶え、
 その雨と飛ぶ 大空の
 星に撃たれて 心 惱まん。

第二十章

一

浮世の富の 威力無や、
 黄金 萬貫 何を買ひ得る？。



老いて悲しく 髪 白む時、
たゞ一莖の 黒き毛をだに、
いかで新に 買ひ求め得ん！。

二

願はしからぬ 世の富や！。
蠅は あされし 肉に集り、
虱は 温き 垢につく。
銅錢の香の なまぐさき、
人間の蒼蠅 これに集り、
内懐の あたゝかき、
浮世の虱 はひまはる！。
富 たゞ招く 蠅 虱！。



富 たゞ招く 蠅 虱！。

三

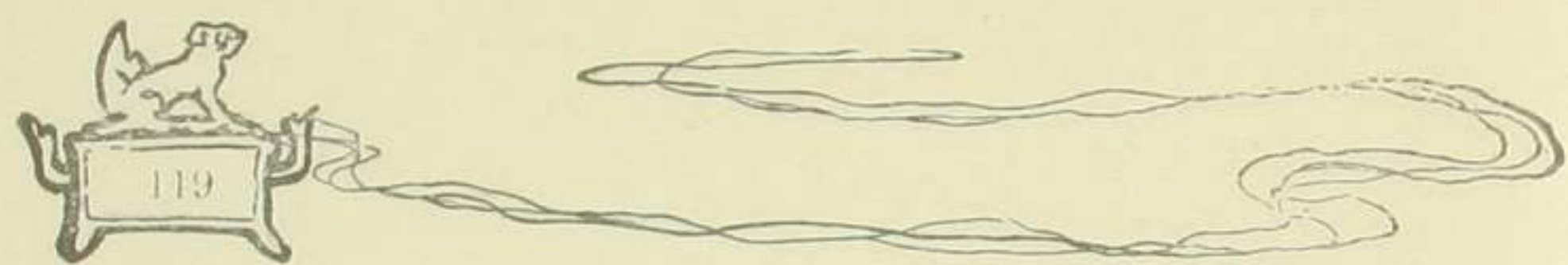
うき世の富を 何戀はん、
浮世の富を 何戀はん。
投げの情を 賣る里の
あだな櫻の 中にさへ、
すいと立つたる 若松の
お千代が歌に「足る事を
じる鍋一ツ 埒の明く
庵は富貴 自在鍵」よと
洒落て退けたる 心ゆかしや。

四



世を花やかに おもしろう
 たのしげに行く 山車の牛、
 ちやんちきくの 鳴物に
 囃さるゝ身も 安逸は無う
 夏の一日 荷は強く、
 夕陽に辿る 歩重し！
 一門 光り 輝きて
 世に囃さるゝ 物持の
 見る目まばゆく 榮ゆるも、
 山車の牛ぞや 山車の牛！
 何か異なる 山車の牛！

五



翠山園む 村古りて、
 白雲の底 鶏唱ふ、
 午寂々々 じづかなる
 僻地の瘠田 鋤く牛の
 歩みもゆるく 日を暮す
 心のごげく ゆつたりと
 尾を動かすや 春の風。

六

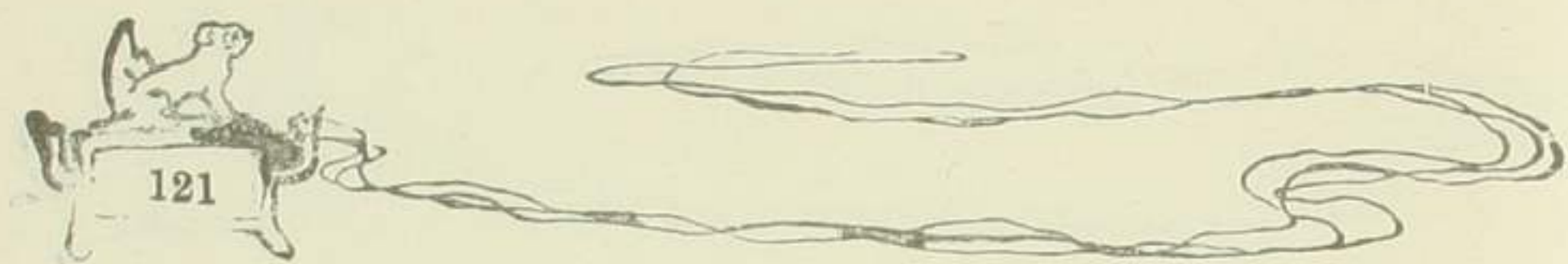
山田鋤く牛！、山車の牛！。
 虚榮の街の かしましき
 笛鐘の音に わが耳を
 濁して 心 疲らせて、



他の玩弄アソビならんより、
 自然シゼンに近き山里の
 松樹マツの根方の晝休み、
 梢頭コメヒの風に 罪も無き
 夢を吹かせて 田夫タウと
 共にまごろむ 小半時、
 羽翼ツバサつかれし 蛺蝶テウテウに
 角は假カしても よしやよし、
 たゞ我が性を 遂げんこそ
 いつはりあらぬ 望みなれ。

七

浮世の富を 何戀はん、



浮世の富を 何戀はん。
 我 詩に富まば 足りぬべし。
 われ我が神を 祈る時、
 我が神笑みて 我を召す。
 召されて登る 雲の梯。
 雲の浮梯 危くて、
 脚タビを失して 空さまに
 身は落ち來れば 夢さめて、
 詩をおもひ寐マドの 枕頭マクラモト、
 青き錦の 囊あり。
 囊中の物、何ぞく、
 皆これ無字の 詩卷なり、



神われに資ふ 詩卷なり。
 我これを讀まば 詩に富まん。
 わが身の貧を 何か憂へん。

第二十一章

一
 日は爛々と かぶやきて、
 夏の澤水 湯のごとく、
 太莞秀で 一丈の
 琅玕青く 新しき
 其の葉に上る 太鼓蟲！。
 天戀ふ願望 今日満ちて
 衣脱ぎすて 蜻蛉と



我が名呼ばれて 飛びて立つ。
 白き生絹の 羽輕う
 天翔ける今 飛び返り、
 もぬけの殻を かへり見て、
 心ひそかに 水蠶の
 昨日の我が名 忌み厭ふ！。

二

心ある士の 世にあるや、
 日々に新に また日々に
 新に身をば 變らせて、
 昨日に今日の 美しく、
 今日より明日は 又善くて、



我が生を經んと こひねがふ。
 天飛び翔くる 蜻蛉は
 水蠶の舊身 戀はぬなり。
 男兒いさゝか 心あり、
 昨日の我を 恒に愧づ、
 昨日の名譽 何かせん。

三

進みて已ます 世を經れば、
 昨日の我は 太鼓蟲！、
 今日の我が身ぞ あきつ蟲！。
 進んで已ます 世を經ては、
 また今日の身を 水蠶にして、



明日の我が身を 空高く行く
 蜻蛉とこそ 爲んとおもへ。
 昨日の我を 人の呼ぶ
 心羞じき 身のほまれ！、
 それはもぬけの 水蠶の殻！、
 それはまことの 水蠶の殻！。

四

昨日の我は 我ならで
 我の今のみ 我なれば、
 名譽は何ぞ？、 ゑびむしの殻！。
 名譽は何ぞ？、 蛇の脱殻！。
 ゑびむしの殻、 醜しや、



たゞく水に流すべし。
 蛇のぬけがら 白くとも
 たゞく風に任すべし。

五

現世の名の 何に値す？
 るびむしの殻！。蛇のぬけがら！。
 鏡氏は淡く 蛾眉を掃へど、
 悪女しきりに 白粉を戀ひ、
 賢者多くは 名を厭へども、
 痴物大抵 譽をば釣る！。

六

賢者の賢は 我知らねども、



長風に 髪 さばかせて、
 鯨魚に騎つて 酔を吹き、
 浪を破つて 去りしてふ

七

痴物の痴をば 我厭ふなり。
 譽を釣つて 何にかもせん、
 詩を釣らば 我 足りぬべきなり。
 詩を釣るか、酒！。酒 飲みつべし。
 一斗の酒に 酔ひて狂ひて、
 百篇の詩に 笑みて興じて、
 生命死すとも よしや惜まじ、
 詩仙 例あり 詩仙 例あり！。



その妄傳も おもしろや。
 天に上らん 詩思の募らば、
 水に溺るゝ 最期も佳からむ。
 善悪無き人の 口にかゝりて、
 無き名云はれて そしらるゝとも、
 叶はぬ戀の なかゝくに
 浮名も嬉し 心遣り、
 歌ゆゑならば 甘なひつべし。

第二十二章

一
 汚れしものゝ 絶えて無き
 雪山の牛 芳しき



草のみ食みて 日をおくる、
 その乳汁何ぞ 濃く甘き！
 天の漿と 味佳くて、
 その色何ぞ 美しき！、
 白壁溶けて 微青あり。

二

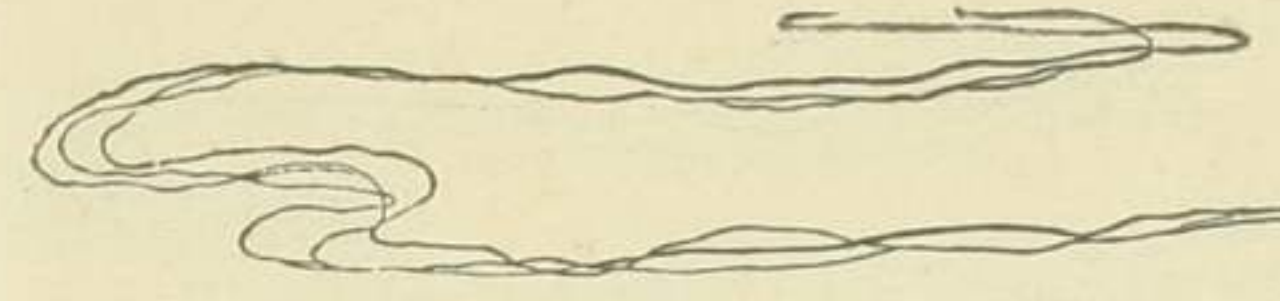
村女 その年 十一二、
 花は苔の 猶かたく、
 春まだ知らず 心清し。
 我が父母の 命により、
 朝々しぼる 牛の乳。
 浄水 洗ひ 洗ひたる



淨瓶 これを 盛りたふへ、
 日にく山の 岨道を
 みづから運び もたらして、
 道に心を 澄まし居て
 世をば思はぬ 婆羅門の
 住める岩窟の 前に置く。

三

婆羅門 ある日 わが道の
 おもひに深く 耽り居て
 供養の乳を 打忘れ、
 飲まずて時を 過しうが
 夕風立ちて 草靡き、

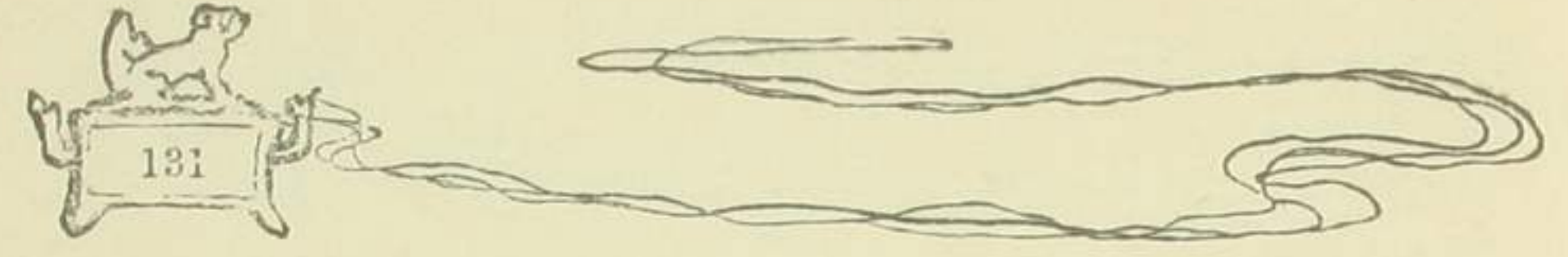


金星 幽に 光る頃、
 飲まんとすれば 牛乳饒えぬ。

四

雪山の牛、牛 清し。
 信士の女、女 良し。
 淨瓶 淨く 汚無く、
 窟に何の 塵も無し。
 されども牛乳は すえはてぬ。
 されども牛乳は すえはてぬ。
 牛乳の中には 水の有りたり。
 もとより牛乳に 水の有りたり。

五



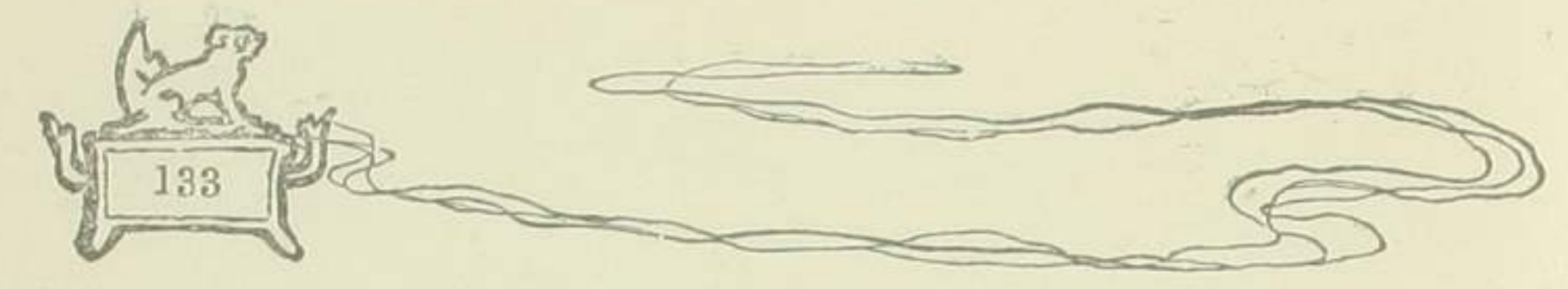


牛乳チに水あり。牛乳腐る。
戀コイに淫慾ヨクあり。戀コイいやし。

六

乳汁チは水より 成れるなり、
水無き乳汁も 世にあらず。
戀慕コイホは性慾ヨクに 伴へば、
慾を離れて 戀も無し。
たゞ乳汁いまだ ふるびずて
體スえざる時に 價値あり。
たゞ戀コイ 嫩ワカく 幼ワサナくて
清らなる時 愛すべし。

七



牛乳チを煉り煉る 黄金キンの鉢、
鉢ハチあたふかに 牛乳乾く！
乾きくゝて 水分スイブン去りて
乳汁は其名を 酥ソと呼ぶ。
酥の味 何ぞ それ美なる！
仙家の花の 春足りて
芳香ニホヒゆかしく 甘露凝る！

八

酥を煉り煉るや 玉の鉢、
鉢ハチあたふかに 酥は乾く！
乾きくゝて 水分去りて、
終に貴き 醍醐成る。



醍醐の徳の 奇なるかな！
 玉髓ぎょくすい 滑る 舌の上、
 異香 五臓に 滲みしみ 徹り、
 含めば消ゆる 雪甘く、
 心火 忽ち 和ぎて
 胸に清さしき 風薫る！。

九

醍醐となりて 乳汁は貴く、
 詩に入つて後ち 戀 價値あり！。
 詩をも知らざる 女あはれや、
 詩をもおもはぬ 男憎しや。
 現世の戀 何を値す？、



何の浮世の 色つけた肉！、
 何の浮世の 肉つけた骨！、
 それが何様ドした 斯様カしたの戀！、
 見る目も痒し 見るも厭なり、
 聞く耳汚る 聞くも疎まし。
 現世の戀 何を値す？！。
 我 詩の中の 戀に溺れん。
 我が神 我に 賜ふ 醍醐味、
 體え易き乳汁 我何にせん。

第二十三章

一
 富貴は既に 棄てゝ願はず、



むかよしり云ふ 貧は士の常、
冬は古りたる 布子一貫、
夏は萎えたる きびら一枚、
かくても濟めば 濟む世ぞと、
ひそかに傲る 廬の中。

二

廬に肉無く 魚無く、
庖厨清らに 鼠無く、
雑炊淡き 手とり鍋、
袖味噌薫る 夜の膳、
かくても在れば ある身ぞと、
われと甘んず 獨り住。

第二十四章

一

名譽も既に 棄てし願はず、
夏の日中に 道傍の
木槿の花の 目に立ちて
馬に知られて 食はるゝを
ひそかに傷む 深山の樹。

二

深山の櫻 年々の
春來り また 春去るに、
花咲きて また 花散りて、
人に見らるゝ 事も無く、





枝を折らるゝ ことも無く、
心ゆたかに 大空の
塵無き中に 立盡す。

三

木槿の花を 悲しみて、
深山櫻を 師と仰ぐ
心は人と 競はねば、
思ひは雲と 静かにて、
楨の柱に 寄りながら、
鶯が輪を 畫く 春の日の
空の青きを 眺めやる
廬^{イホ} 物寂び 世と遠し。

第二十五章

耳聾^シひて後 樂曲^{キョク}を作す。
其の樂曲 天の聲あらん。
身ありて戀に 狂ふ時、
戀 猶肉塊^{ニクク}の 香のあらん！
空を結んで 文^{フミ}を成す
音樂^{ガク}の神趣に あこがれて、
身ありて後に 情起る
浮世の戀を 厭ひ棄つ。

第二十六章

我 一切を 棄てはてふ
たゞ／＼ひとり 詩をおもふ！。





此の物言はぬ 流れのほとり
 此の静かなる 柳に近く
 引結びたる 廬の中に
 我たゞひとり 詩をおもふなり、

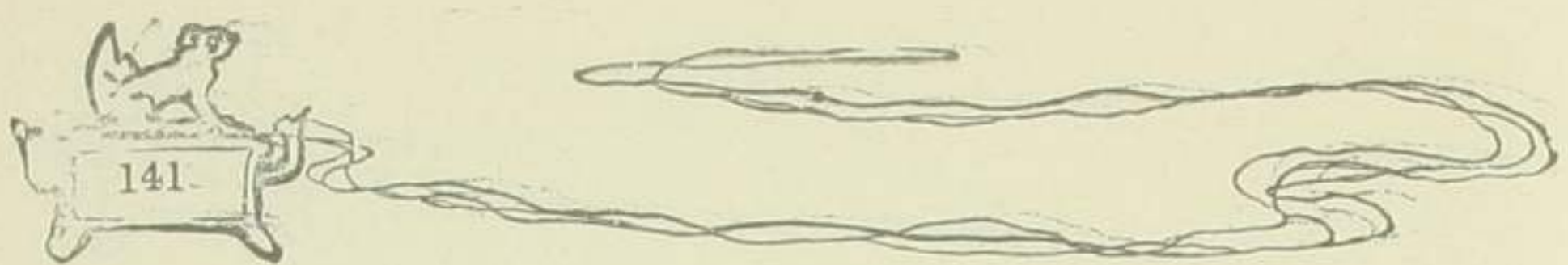
第二十七章

一

半^{ナカ}水無き 山河の
 潤^シき^カ積^ヘの まなご石。
 月ある夏の 夜冷えて、
 ひそかに結ぶ 露の珠。

二

石上の露 溥^タ々^クと



何の色無く たゞ寂びて、
 眞珠ころがる 蓮の葉の
 水の光は 無けれども、
 ひとりしづかに 清^スみ澄みて
 濁りなければ 天と地と
 遠くて近き 幾万里、
 月に情あり 尋ね來て
 其の懐^マ中^ナに 影宿す！

三

女 まことに 人を思へば、
 眉 描き惱む 鸞鏡の前、
 芳心 糸と 亂れくゝて、



郎を笑ます 貌無きを愧づ。

我 むかしより 詩をおもふ時、

句を成し惱む 小齋の中、

文字足らぬに 意餘りて

胸は流れぬ 水と若しく、

詩神を笑ます 才無きを慚づ、

詩神を笑ます 才無きを慚づ。

四

貌無きを羞ぢ 貌無きを羞づ、

女の胸の あはれ切なる、

其の心また 美とも見るべし。

才無きを愧ぢ 才無きを愧づ、



我が年來の たゞおろかなる、

詩神 或は あはれとも見ん。

五

露が清めば 月に情あり。

見よ、天上の 一痕の月！

石の河原の 萬點の露！

萬點の露 露ごとに

月の光りの 無きも無し。

露たゞ清めば 月に情あり。

六

嬉しや 月に 情はありけり。

心一つに 詩をおもふ、



身は色も無き 石の露、

思を澄まし 澄ましうに、

風が吹き奪る 雲の衣、

詩神の月の 影さして、

なさけの光り かつ添ひし

或夜ひそかに 悦びぬ。

嬉しや 月に 情はありけり。

第二十八章

一

浮世はすべて 捨てはてぬ。

世を樂まん 心なし。

晨鐘の音の 夢さめて、



むかしを笑ふ 今の我、

厭や櫻！ 厭や戀！ いやゝ酒！

二

空想の神 なつかしや。

詩のおもしろさ 身に染みて、

肘をもたする 廬の窓、

寂として句を 案ずれば、

堤長く、水長く、 詩思長し。

第二十九章

一

世には背けど、法衣着ず、

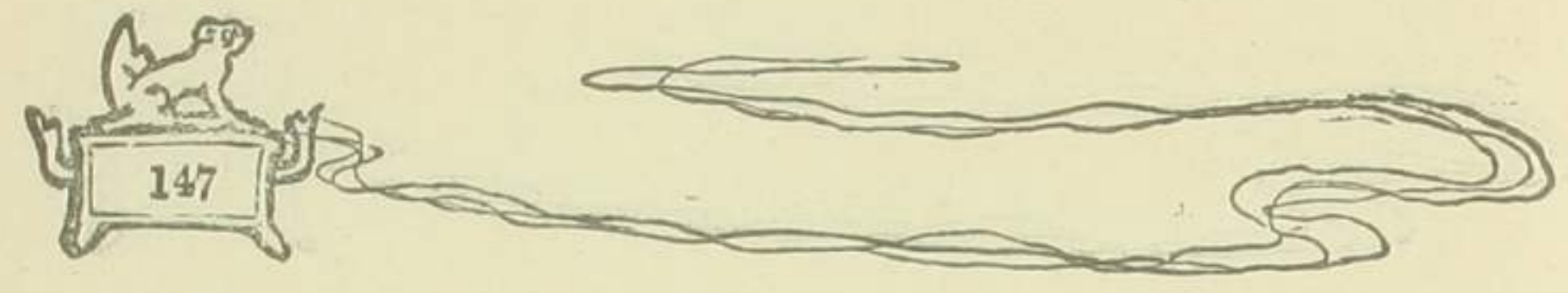
佛陀の道は 肯はず。



木枯寒き 冬の野に
 すたれる巖と 身をなして、
 氷にとぢし 山の井の
 たゞ情無う 冷えわたる
 佛陀の教 何にせん。

二

花は いろく 咲き散れど、
 朝顔いとし 罌粟花憎し。
 世をおもひ切る けしの花、
 その散り際の 氣は酷く、
 未練に残る 朝顔の
 心やさしく 憐れなり。



けし 憎むべし、 うとむべし。
 あきらめ過ぎて 智慧過ぎて、
 なさけが足らず 愛足らぬ
 佛陀の道は うけがはず、
 我 詩の神を たゞいつく。

第三十章

わが詩の神の 尊しや。
 その御心の 光り照る
 その御國 皆 美し。
 時知らぬ花 こゝにあり、
 常住の月 こゝにあり。
 不老の門の 内の春、



148

盡くること無く あたふかに、
 玉しく不死の 庭の井に
 涸れぬ泉の 湧き上る。
 美人萬人 萬々人、
 雲のごとくに むらがりて、
 勇士の萬騎 萬々騎、
 星のごとくに 集ツドひ居る。

第三十一章

雌雄相呼ぶ 花の間ナカ、
 禽に歡喜の 聲ありて、
 芳雲護る 禽の影、
 花 圓滿の 香を送る、



149

梵王宮の 春の色、
 六慾足りて 自在なる
 それにも増して おもしろき
 神のみなさけ 頼もしの
 空想の郷 妙タなりや。
 たゞ一念の 願ふもの、
 彈指の間に 皆現じ出で、
 寸心馳せて おもむけば、
 千里の山河 眼の前に在り、
 龍 驅使すべし、虎 馴らすべし、
 神代このかた 世の人の
 唱ひし歌を 皆おぼえたる



木精の歌も 聞きて知るべく、
 幾春秋の 果しなく
 霞に遊び 霧に寝て
 山めぐりする 山姥の
 山に立ち舞ふ 振も見るべし。

第三十二章

獨り寐る夜も 梅あれば、
 寝ざめゆかしき 庵の春。
 まして優しき 詩の神の
 神の氣息の 香はしき
 中に起臥す 朝ゆふべ、
 その懐かしさ 身に染みて、



何の生命の 五十年、
 露惜からじ 歌のため、
 我か神に我 捧げなん、
 天 長しへに 神にいつきて
 大地 久しくも 廬は出まじと、
 一日ひそかに 思ひきはめぬ。

第三十三章

夏流れ、冬流る、
 流れて休まぬ 廬前の川。
 春も好し、秋も好し、
 好し柔順なる 廬後の柳。



川水ゆるく、柳しづかに、
 盧 物寂び、人 老いんとす。

二

人やゝ老いて、笑を含んで、
 古句を誦して、閑窓に倚る。

「詩卷 長く留めん 天地の間、
 釣竿 拂はんと欲す 珊瑚の樹。」

三

窓前の春 あゝら樂じや！。

窓前の秋 あゝら樂じや！。

風やはらかに 天うらゝかにして、

川水ゆるく、柳静けし。

第三篇

第一章

一

青天 忽として 春雷 動き、

芳草 亂れ披いて 雄雉 起つ。

俄に聞ゆる 物の音！。

俄に聞ゆる 人の聲！。

二

物音 何と 耳を澄ませば、

こはすすまじの 物の音や。

鐵蹄 石を蹴つて 萬馬 怒り、





刀槍 憂ウツと 鳴つて 壯士 奮ふ。

三

人聲 何と 耳を立つれば、

「男兒！西せよ！、男兒！西せよ！。

西方ニシに敵あり、人道の敵！。

西方ニシに敵あり、平和の讎カタキ！。

人道の敵 懲らすべきなり。

平和の讎カタキ 懲らすべきなり。

男兒寧ろ當に 格闘して死すべし、

いづくんぞ能く怫鬱フツとして 長城を築か

防マモりくつて、堪へ堪へぬ、

今は堪へじ、撃つて、撃て！。

男兒！西ニシせよ！、男兒！西ニシせよ！。

西方ニシに敵あり、人道の敵！、

人道の敵 懲らすべきなり。

西方ニシに仇あり、平和の讎カタキ！、

平和の讎 懲らすべき也。

男兒西せよ、西せよ！。」と呼ぶ。

第二章

われたゞ廬イホの 我が神の

玉の御聲を 聞かんのみ、

對ムカひの岸の 物の音を

心に入れて 何せんと、





耳を塞ぎて 氣を澄まし、
小爐に添ふる 一片の
金桂の香の 空に去る
有無の間に 詩をおもふ。

第三章

一
昨日の水に 今日の水、
濁れる水に 清める水、
千古續きて 流れく
山より海へ 行く川の
その川下る 船のいろく！
二



昨日の船に 今日の船、
薪の船に 炭の船。
日々に變りて 流れく
川上より川下へ 來る船の
その水棹執る 人のいろく！
三

いづくより來し 小舟なるらん、
大江の中流 小舟 今 來て、
如何なる人の それに潜める？、
徐に起る 歌の聲する！
四

毛笞茸きたる 胴の間の蔭、



姿隠れて 吟聲ばかり洩る。
其の聲 何ぞ 緩く悲しく、
世の船歌の をかしきに似ず、
その歌 何ぞ 意 遠くて、
戀も情も 敢て歌はぬ！。

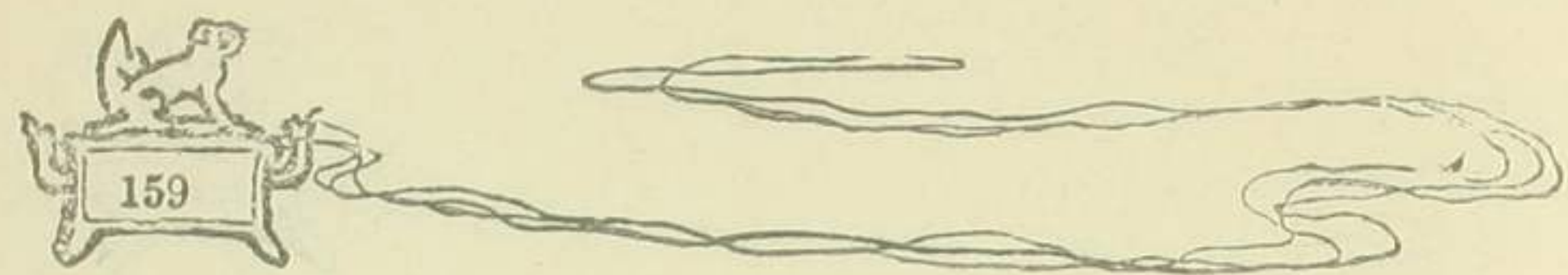
五

小舟 流るゝ 廬の前、
吟聲 起る 筈の中。
何人 歌ふ 何の歌、
歌さしいへば 嬉しくて
歌とし聞けば 耳ぞ立つ、
いでや、聞かうよ、人の歌。

第四章 船客の歌

一

天より風の 下す日は
孤雲流れて 先づ動き、
地より風の 起つ朝は
小草戦ぎて 先づ顫ふ。
天をいたゞき 地に立つて
天地の靈を 方寸に
結びて有てる 人間の
此の心 先づ 雲と動きて、
此の心 先づ 草と戦げば、
大天の下 大地の上、





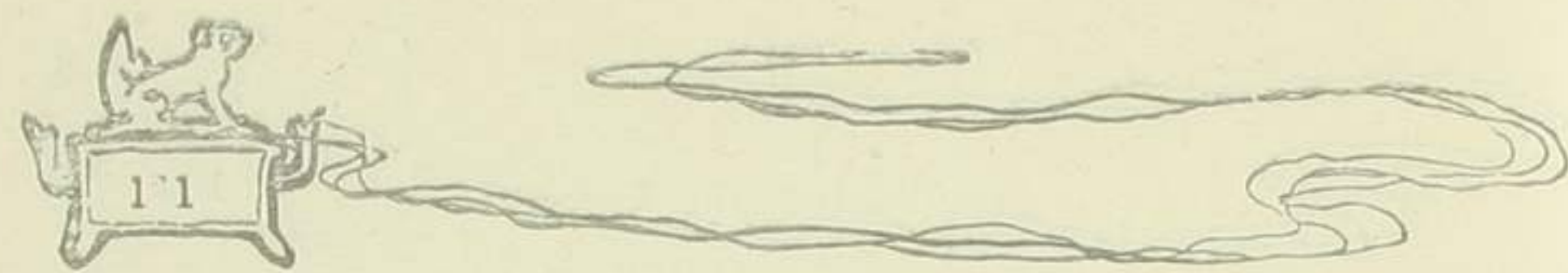
此の世の中に おそろしの、
切運の風 吹かんとす。

二

切運の風のおそろしや、
この風 一トたび 吹く時は
鬱々 芊々 美しき
國土 たちまち 相貌變りて、
巍然 赫然 隆昌なる
國家 あるひは 命を更む。

三

此の風 そつと 過ぐる夜は、
瑠璃の薨の 高樓も



ゆらぎくゝて 安からず、
寶鐸 叫ぶ 聲亂れ、
雕梁 軋る 音凄く、
翠帳の内 人愁ふ。

四

まして悲しき 山岨の
眞葛の絡む 賤が家、
または小暗き 谷間の、
杉の根方の 笹小屋は、
衛る力も あらざれば、
秋の木の葉と 情無く
たど一ト吹きに 掃はれて、



屋根無き 霜の 朝寒み、
袖搔き合せ 貧者泣く。

五

この風狂ひ 狂ひ暴べば、
二十八宿 星座壊れて、
雲は悪鬼の 姿して舞ひ、
千里萬里に 劍火迸つて、
草は壯士の 血を吸はんとす。
却運の風の、 あらおそろしや。

六

見よ美はしき 我が邦の
民の心の 雲と動きて、



草と戦ぎし 歳や幾歳、
却運の風は 終に來れり。

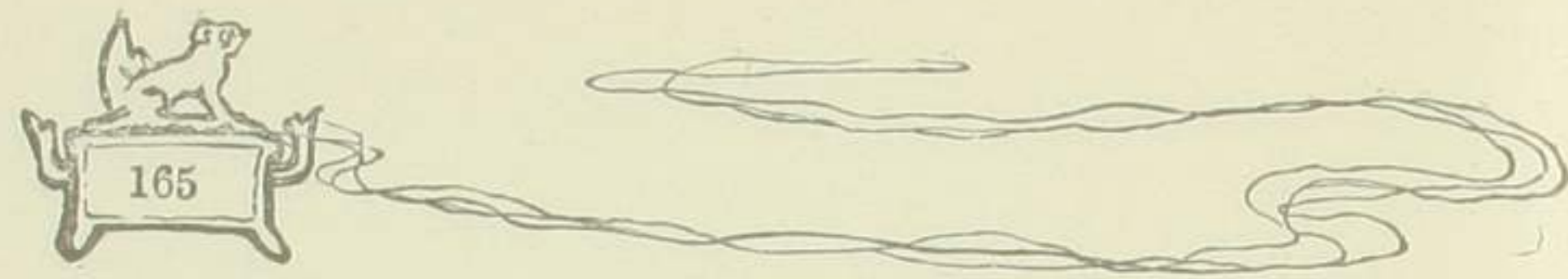
七

あゝ山の花！、あゝ谷の花！。
夕ユラベの雲の したゞりの
甘きに酔ひて 生ひ出でよ
春のあしたの 日の恩恵
あたゝかき世に 咲き匂ふ
あゝ山の花！、あゝ谷の花！。
花にそもく 何意コトある？。
花たゞ譯も無く 咲きて、
花たゞおのが 香に匂ふのみ。



八

金色の民！、銀色の民！。
 慈愛の乳汁を たゞ頼る
 生れ落ちにし その日より
 道義の衣の あたゝかき
 下にやうやく 人となる
 金色の民！、銀色の民！。
 民にそもく 何意ある？。
 民たゞ譯も 無く 生きて
 我が世樂しく 經んとするのみ。
 民たゞ譯も なく 生きて、
 性を遂げんと こひねがふのみ。



九

蠶を飼ふものは、蠶をおもふなり。
 蠶をおもひ 蠶をおもふ
 夜また朝。
 蠶は眠れども 我は眠らず、
 我は餓うれど 餓ゑしめず蠶を。

十

桑植うるものは、桑をあはれむ。
 桑をあはれみ 桑をあはれむ
 冬また春。
 おのが心も 凍りゆくほど
 冬の夕は 雪を愁ひて、



おのが頭髪も 白み行くまで
春の朝は 霜を悲む。

十一

民をはごくみ、國を保つ、
人の君 誰か 民をおもはざらん、
民をはごくみ、國を保つ、
人の君 誰か 國を愛まざらん。

十二

あらおそろしの 却運の風や、
山の花飛び、谷の花飛び！
静に咲きて 匂ひたる
それは昨日の 春となり、



枝吹きしをる 夜嵐に
山谷動き 鳴りごよみ、
山の花飛び！、谷の花飛び！。

十三

あらおそろしの 却運の風や、
金色の民、銀色の民、
此民競ひ立ち 彼民競ひ立つ！
笑顔と笑顔 睦まじう
親子夫婦の 打そろひ
楽しく経しは 昨宵の夢、
今朝の現實は 戈執りて、
大丈夫心の 角立つる



眼はたゞ遠く 戦場の
 天を望みて いきまきて、
 家を忘るゝ 國のため、
 妻を忘るゝ 君がため、
 恩愛の故郷 後にして
 修羅の衢に 向はんと、
 金色の民 銀色の民、
 此民競ひ立ち 彼民競ひ立つ！。

十四

あらおそろしの 劫運の風や。
 蠶を飼ふものは 蠶をおもふなり、
 賤の少女も 此の道を知る。



桑植うるものは 桑をおはれむ、
 賤の男も 此の情あり。
 民をやしなふ あゝ 人の君、
 人の君 誰か 民をおもはざらん。
 民をおはれみ おもひたまはぬ
 君はまことに まじまかねども、
 見よ！、劫運の 風の吹く時
 君の心も あだになり行く！。
 あらおそろしの 劫運の風や！。
 日出づる國の すめらみこと、
 劔の劔 執りしぼり
 西方見そなはし 立ちたまへば、



170

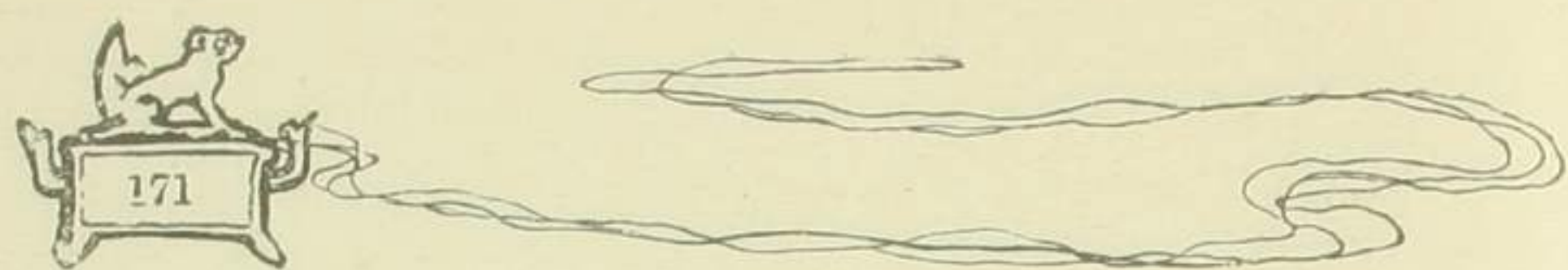
月没る方の 大君も
 黄金の甲 身に掛けて
 東方を望み 起ちたまふ！
 劫運の風 終に來れり！
 劫運の風 終に來れり！

十五

花は願はず 小夜あらし、
 民は願はず 世のみだれ。
 人君 豈嘉し たまはんや。
 金鼓の響 閑の聲。

十六

たゞ如何にせん 運命の



171

測り難きを あゝ如何にせん、
 逃れ難きを あゝ如何にせん。
 陰陽 激し 雷 起り、
 鬱氣 悶えて 地震 ふるふ。
 天地の事は 誰が爲するぞや、
 人間の事 皆 人間が爲るかは。

十七

劫運の風 終に來れり、
 劫運の風 終に來れり。
 山の花 飛び 谷の花 飛び、
 金色の民 銀色の民、
 此民競ひ立ち 彼民 競ひ立つ。



劫運の風 終に來れり、
劫運の風 終に來れり。
浦安の國 浦安からず、
大八洲人 島を出でたり！。

十八

見よ！ 劫運の 風の姿を。
見よ！ 劫運の 風の姿を。
昨日は、八の 心 幽けく
雲と流れて 動きたりしが、
今日は大兵 海を渡つて、
雄威堂々 氣肅々、
旌旗は雲なす 滿州の原。



見よ！ 劫運の風の 姿を。
見よ！ 劫運の風の 姿を。
昨日は人の 心やさしく、
草と戦ぎて 顛ひたりしが、
今日は秋野の 霜の芒と
萬卒 劍を 閃かしたつゝ
縦横蹂躪す 遼東の地。

十九

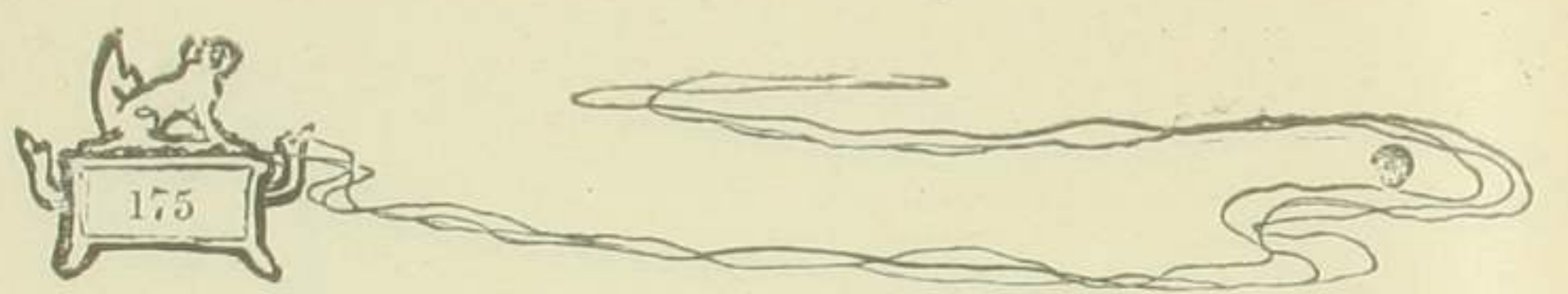
烏雲下り立つ 大曠野、
夕立雨の ざつと降り、
銀箭 萬枝 亂るれば、



尾花 葛花 萩 桔梗
 本葉末葉の 別ちなく
 濡れざる草も あらぬなり。

二十

劫運の風 吹き荒れて、
 彼の蒼々の 天が下、
 此の茫々の 地の際涯、
 塵を巻き 砂を巻き 礫を巻き、
 物といふ物を 巻きて走れば、
 沼怒り 川怒り 海怒つて、
 水といふ水は 狂ひ逆立ち、
 枯木は怨む 聲乾き切り、



嫩樹は泣きて 聲烟び入り、
 凹める巖は 悶え呻きて、
 聳ゆる巖は 叫び號はり、
 魚は恐れて 深く潜めど
 夢に魔えて 心驚き、
 禽は愁ひて 更に飛び得ず、
 身をば細めて 眼のみ動がす。
 有情非情の 別ちなく
 悲まぬもの あらぬなり。

二十一

夕立降れば、草は皆濡れ、
 兵火起れば 須陀も刹利も、



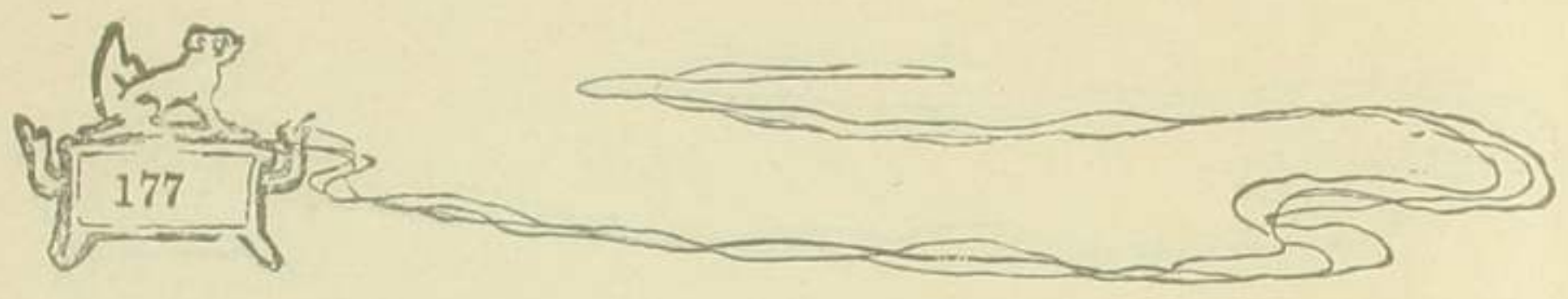
憂さは異らず 物おもふなり、
物おもはざる 人も無きなり。

二十二

劫運の風！ 吹けよ吹け〜！
吹かでは止まぬ 風ならば
吹けよ吹け〜！ 何を厭はん。
お〜！劫運の 風の吹くなり！

二十三

世を忘れたる 水の上、
花を排いて 湖る
春の細流 魚を釣り、
身を安んずる 舟の中、



月に戕^カ崩^シふり 假^カ泊^チする
秋の川隈 酒を酌み
幾歳経にし 此の叟^ヲも、
まだ雲中の 人ならで
王土に生ける 民なれば、
よし、其の風に 兩鬢の
霜 戦^ソがせて 立上り、
鶴と癩^オせにし 老人なれど、
空にはなざじ 我が腕^チ力^カ、
御國の爲に 盡さんか！
いで 筈^ト撥^ハ退^チて 立たうかや！？

二十四

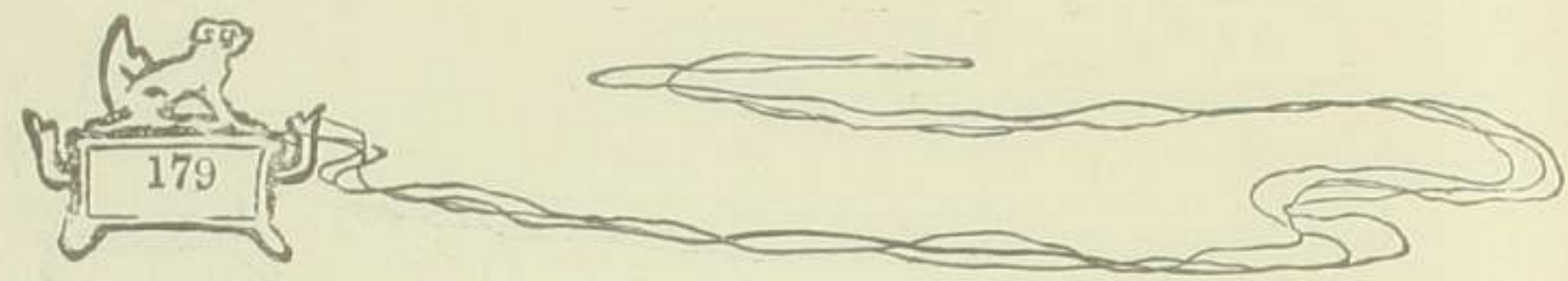


大鵬は 搏たんと欲す 扶搖の風。
 希有鳥は 翔らんと願ふ 焚輪の風。
 太平の春 勇士睡つて、
 豪傑奮ふ 戦亂の秋。

二十五

劫運の風 吹けよ吹けく！
 勇士よ爾 笑みて起つらん、
 爾の待ちし 時は來れり。
 劫運の風 吹けよ吹けく！
 豪傑！ 爾 大功を成せ！
 爾待ちけん 機は來れり。

二十六



箕星は既に 動きく〜て、
 飛廉は既に 怒り怒れば、
 逢々として 風渡り、
 發々として 風扇り、
 大鵬は 搏ち 上るなり、
 希有鳥は 翔り 遊ぶなり。

二十七

劫運の風は 吹き渡るなり、
 劫運の風は 吹き扇るなり。
 勇あるものは 勇の翮を
 鼓らして天に 搏ち上れよ！
 才あるものは 才の翼を



振ひて空に 翔り遊べよ！。

二十八

大風^{カゼ}を悲み 草に潜める

禽や 何禽？。小がら！、小雀！。

小がら、小雀！、何ぞ醜き！。

時運^{トキ}を恐れて 啣^クち言する

人や何人？。無膽漢^{フナシ}！、無骨漢^{ホチナシ}！。

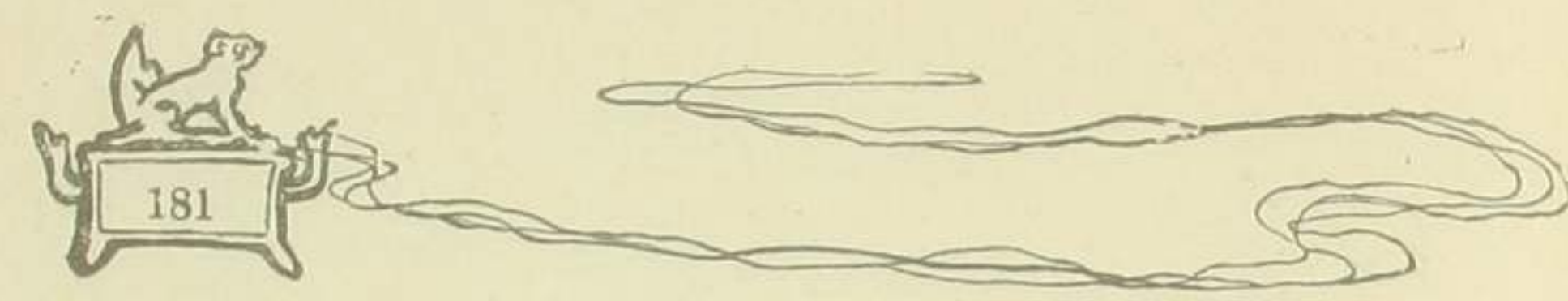
無膽漢！、無骨漢！、何ぞ卑しき！。

二十九

春に後るゝ 山間^{ヤマノ}の

董々^{スミレ}菜の花の 小さきも

風の渡れば 香を送り、



夏の初の 川岸の

蘆 嫩^なけれど 風行けば

葉擦れ 涼しき 音を出す！。

風をよろこぶ 大鳥の

思は無きも 小雀の

いやしき嘆^{ナゲキ} 我厭ふ。

深山の董々^{スミレ}菜！、川の青蘆^{アヲ}！、

爾知るらん 我が心。

三十

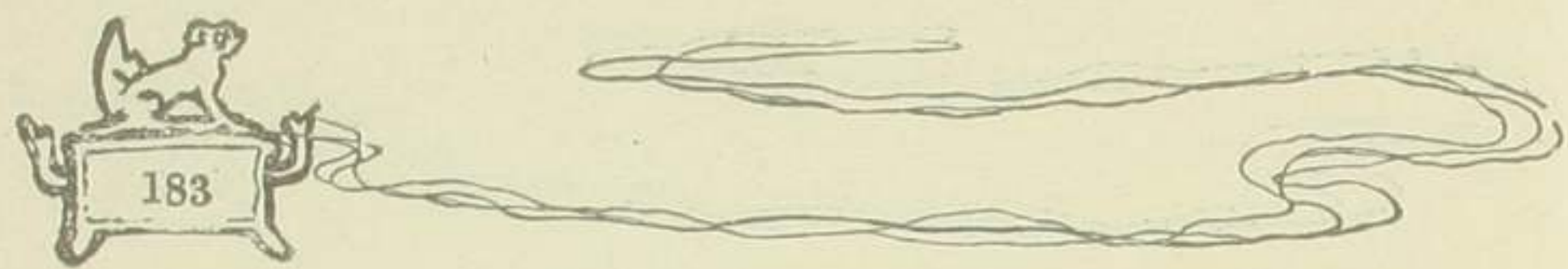
世を忘れたる 水の上、

身を安んずる 舟の中、

幾歳^{オシ}経にし 老翁^{オヤジ}なれど



笞撥ね退けて 立たうかや。
 まだ雲中の 人ならで、
 王土に生ける 民なれば、
 劫運の風 我を吹く！
 梶枕して たゞ一人
 火床ヒド船フネに睡る 笞の下、
 夢は馳せ行く 蓬萊の
 島山めぐり をかしきも、
 深山の董々菜 汝ニに慚ぢ、
 川の若蘆 汝に愧づ。
 深山の董々菜、川の蘆、
 爾知るらん 我が心



爾知るらん 我が心。

第五章

一
 よごめる川の 漾々ヨウヨウと
 水の心の 長閑ノドクくて
 流れ流れず 流るれば、
 漕がざる舟の 悠々ユウユウと
 動き動かす 動きつゝ
 下る姿も ゆるやかに、
 廬イホの窓より 眺めやる
 長江チヤンキョウの畫の 一幅の
 中にしばらく 見えけるが、



184

何時しか歌の 聲消えて、
夕暮起る 川霧の
彼方に隠れ 去りにけり。

二

いづくより來し 舟ならん、
水上遠く 眺むれば
たゞ茫々と 水 烟り、
人いづくにか 去りにけん
川下遠く かつ見れば
たゞ漠々と 霧 埋む。

三

風の中なる 蘭の香の、



185

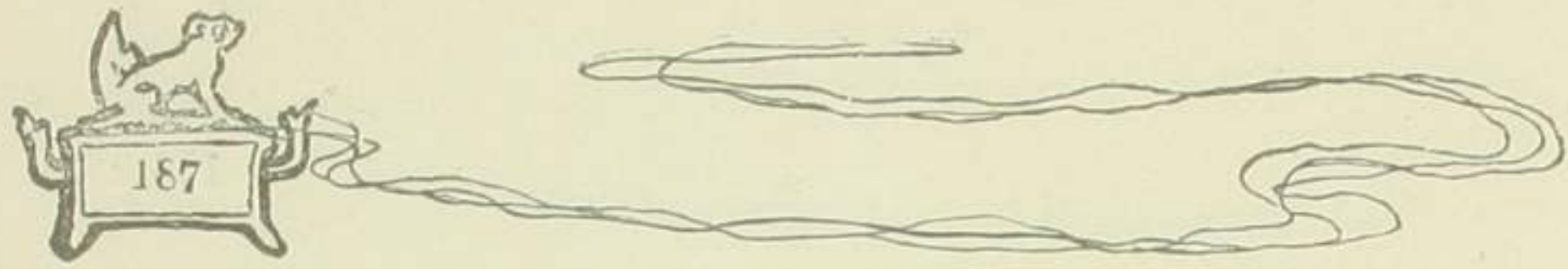
出處をたゞせど 出處知れず、
鏡の裏の 鳥の影、
痕もとむるに 痕も無し。
現か？ 現 夢をあざむき、
他かや？ 他の 我に似たるよ！。

第六章

我も浮世は 忘れたれども、
まだ雲中の 仙ならず、
我も廬中に 獨り住めども、
王土に生ける 民のかたはれ。
實に夕立の 降る夕、
濡れざる草も あらぬなり。



劫運の風 吹くあした、
 身を吹かれざる 人もなし。
 大風カゼをよるこぶ 大鳥の
 思は無きも 小雀の
 いやしき嘆 敢てせず、
 菫アジと咲きて 香を放ち
 蘆アシと戦ぎて 音を立てん
 願を述べし 彼の人の
 歌の心の あはれやさしや。
 劫運の風 吹かん日を
 爲す事なくて 過ごさんは、
 菫よ！ 我も 汝ナニに慚ぢ、



嫩蘆ワカアシ！ 我も 汝ナニに羞づ。
 彼の人 筈を はねて出でなば、
 我も蘆イホを 立ちて出でなん。
 彼方の琴の 絃イト鳴れば、
 此方の琴の 絃イト應へ、
 他人ヒトの心の 聲聞けば
 おのが心も 聲響く！
 あゝ彼の人の 歌のやさしや！
 我が心動く！ 我が心動く！

第七章

あらおろかなり、おろかなりけり。
 われたる蘆イホの 我が神の



玉の御聲を 聞かんのみ。
 流れの中の 笛舟の
 その管蔭の 人の歌、
 心に入れて 何すべき。
 われたゞ廬の 我が神の
 玉の御聲を 聞かんのみ。

第八章

一

我いとけなき そのむかし、
 都會の塵の 市中に
 我よく花を 造り得と
 誇れる 姫オウナ あるを見き。

二

浮世に老いて 白き髪、
 額に智慧を 寄せし皺、
 いと尊げに 見えしかば、
 花無き冬の ある夕、
 稚心ワカナの 疑はで
 一枝の櫻 得んと願ひぬ。

三

吐く氣息イキ白う 眼に見えて、
 大路オホヂ人無き 寒き朝、
 「見よ、我が術ワザの 妙タマシなるを、
 小禽も枝に 凍り着く





このあかつきの 北風に

我 咲かせぬ。」と打笑みて

老嫗オウナは呉れぬ 山櫻。

花は盛りの 色 艶に、

三月ヤヨヒの姿 今見せて、

世に美しく ゑまひたり。

四

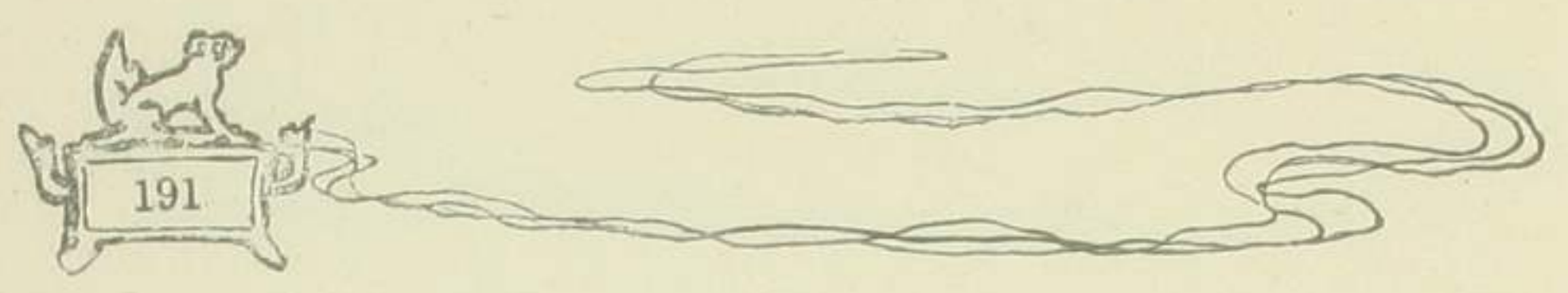
冬の寂びたる 此のあした、

春を手にせし、嬉しさに

我よろこびて 遊びしが、

忽ち泣きて 恨みたり。

花はまことの 花ならで



たゞいつはりの いろざりの

目をあざむきし まさなごと、

人の巧タカミと 知りし時。

五

美ウツクしかりし 花ハナ瓣ハナは

生絹を紅の 染めしなり。

つやゝかなりし 葉は何ぞ、

色を帯びたる 蠟の紙。

枝の太きを 見れば枯柴、

枝の細きを 見れば銅線ドウセン。

まことの花の 名を冒しても

人の工タカミの 浅きいつはり、



何おもむきの ならばこそあれ、
たゞ見にくさの 眼にのみぞ立つ！。

六

我その日より 悟り知りたり、
人の手の若し 花を造らば、
その花真の 花ならずして
花の眞實の 句無きをば。

七

花はおのづと 春に開きて、
詩はおのづから 胸になり出づ。
人の手終に 花をなし得ず、
我が意の如何で 詩をばなし得ん。



おろかなりけり、おろかなりけり、
我が意の作る 詩はあらぬをや。

第九章

一

淡雪融けて あらはるゝ、
土の濡れ色 新じう、
去歳の宿根フルネの よみがへり、
今歳の二葉 萌え初むる。

二

夢に酒無く 戀も無く、
覺めて現に 願望無く、
たゞ花を待つ 園守と、



我が名呼ばれて 微笑みて、

身を陽炎の 中にして

土塊碎く 細菌杷、

照る日の夕 井を汲みて

やさしく恵む 如露の水。

三

摘みては除く 醜草の

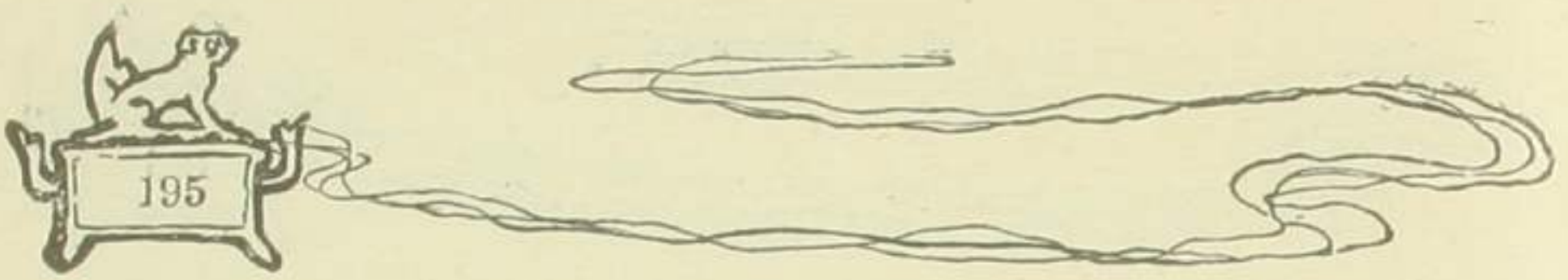
庭蘿蔔やら 鷹の爪、

取りては棄つる いまはしの

氣條蟲 また 根切蟲。

老の生命の せまり行く

それは思はで 初花の



そのあかつきに あこがれて

日々に心も 身も使ひ、

土の溢氣に 指あれて、

日に焼け黒む 顔の色。

四

春の御神の あたゝかき

御心香る 風吹けば

その神靈なす 神業を

たゝへまつりて 鳥 歌ひ、

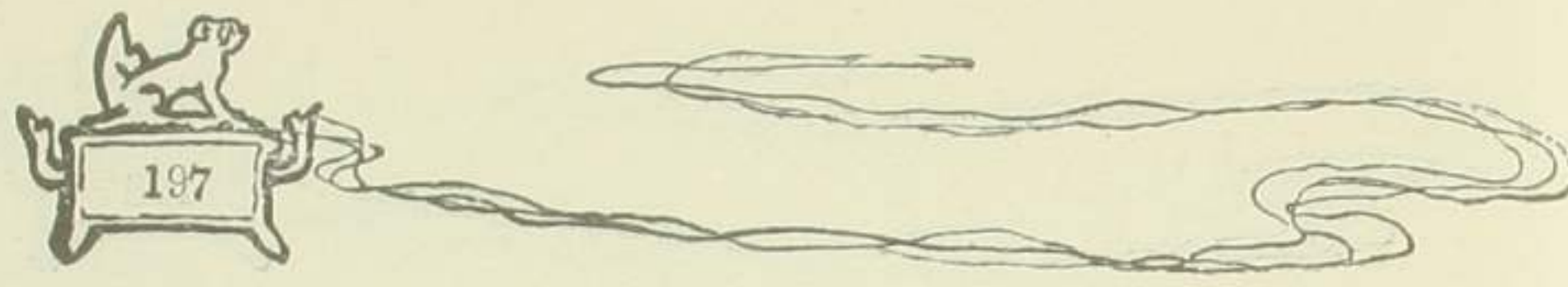
そのうるはしき みなさけに

心 勇みて 胡蝶 舞ふ。

五



春の御神の 愛深き
 御心の隈 おもしろや。
 深山の奥の 童子には
 山の蕨を 賜はりて、
 田つくる里の 乙女には
 田芹を摘めど 賜ふなり。
 花を待ちたる 園守に
 終に賜ひぬ 花 幾朶。
 六
 待ち得し花の 笑顔見て、
 小鋤片手に 煙草吸ふ
 老いたる今日の 園守の



顔にも笑の 花ぞ咲く。
 七
 我たど花を 待ちぬべし、
 我 園守と 身をなさん。
 我 つくるべき 詩を知らず、
 我 なり出でん 詩をおもふ。
 廬に神在す、神在す、
 我たど廬の 我が神の
 玉の御聲を 聞かんのみ。

第十章

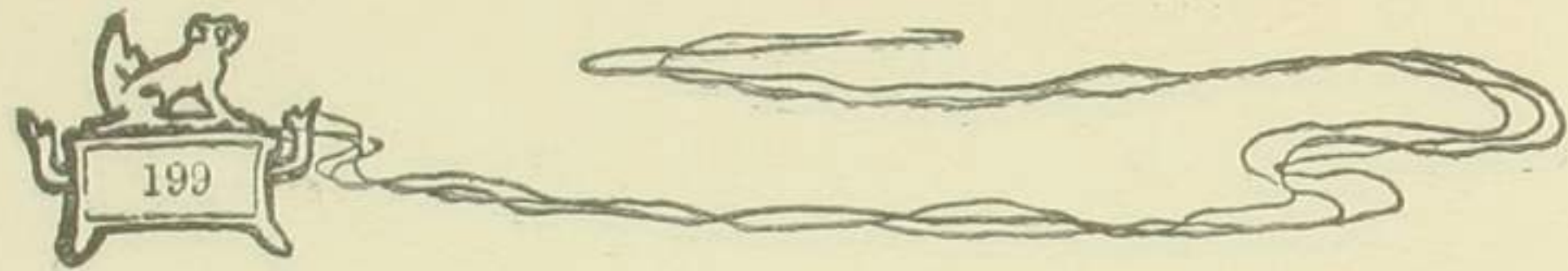
おろかなりけり！ おろかなりけり。



我が神います 吾が廬を
出でくづくに さすらひて
何見出して 何なさむ。

二

鼓子花の色 薄くとも、
市のはづれの 塵塚に
咲きて匂ふと 定まらば、
我その蔭に 假寐して、
乞巧兒の夢に 這ひかゝる
花の心も 問ふべきが、
塵は絶えねど 中々に
花は稀なる 世のならひ、



天地を飾る 美はしの
神の心の 芳はしき
痕を尋ぬる 物狂ひ、
身を宿無しと はふらして
露と寐る夜を 重ぬとも、
慾を切り組む 柱立、
冷き瓦 葺きおほふ
家居つゞける 都會には、
人のいきれの ほめき立ち、
物の臭ひの くさくして
清らに澄める 夕月の
光りを汚す 事もあれ、



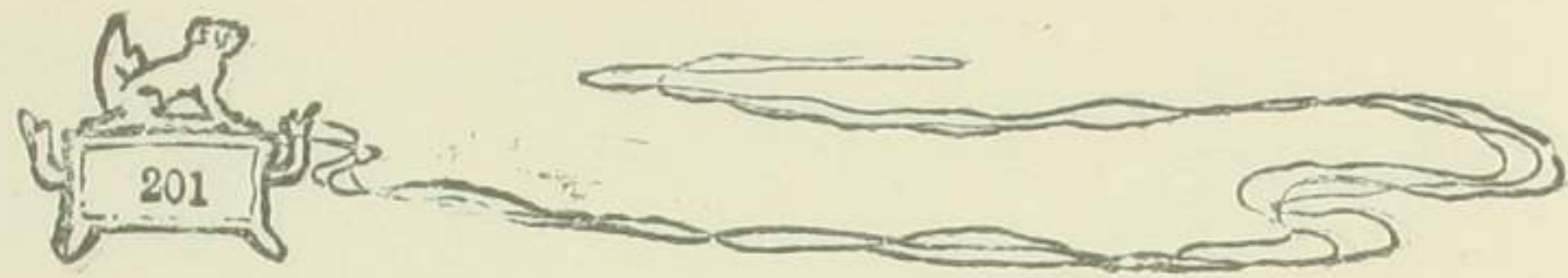
何なつかしき 花咲きて
 何のゆかしき 香の中に
 酔ひて笑むべき 折あらん！。

三

おろかなりけり！。おろかなりけり。
 わが神います 我が廬を、
 いでゝ何處に さまよひて
 何見出して 何爲さむ。

四

絹をいろどり 紙を剪り、
 銅線添へて 枯柴に
 香ひ無き花 取りつくる、



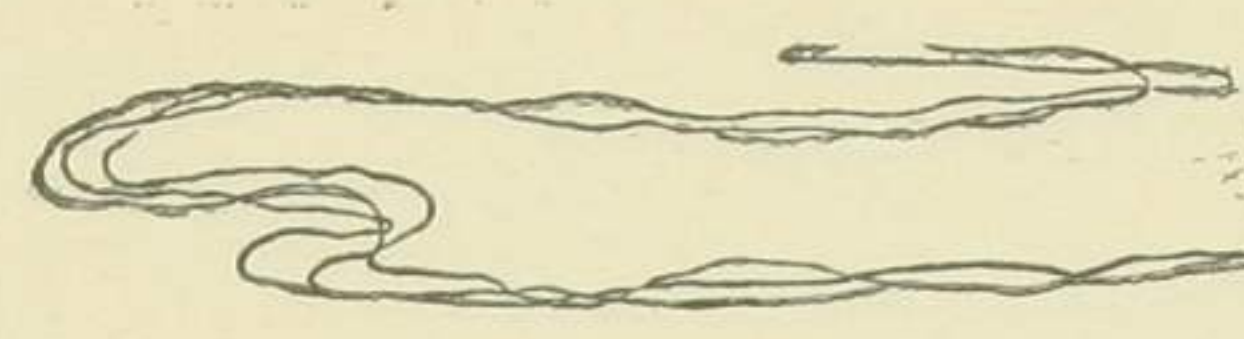
いつはりの業 我 せむや。

第十一章

心を洗ふ 半盞の
 山茶の味の 淡くして
 詩を招び下す 一ト炷タキの
 香の煙の 静なる
 廬イホ 寂々 薄墨の
 夕の色に 鎖されて、
 江村江ノ村の暮 おだやかに
 闇を誘ふ 五位ゴイ鶯渡る。

第十二章

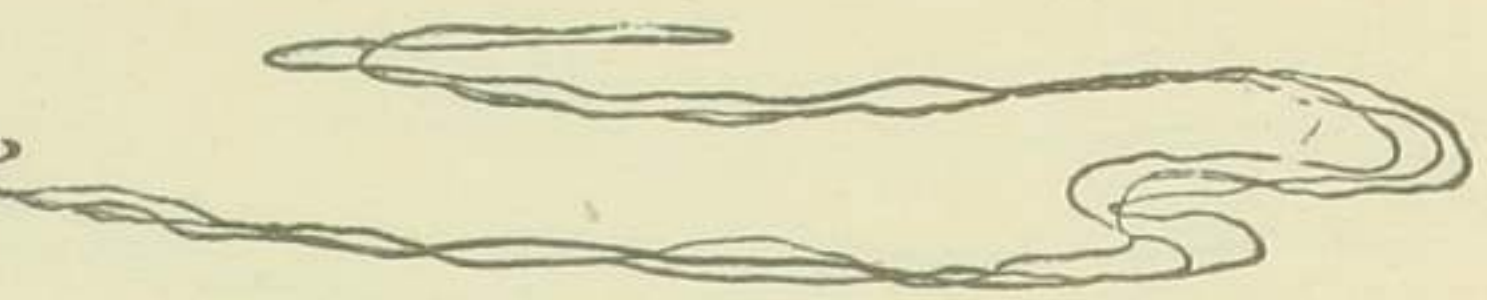
一



里の兒童コドモの 一ト群の
 色の白きや 梅之助？、
 丈夫らしきは 松太郎？、
 二郎三郎 わやくと
 お花お蝶も 打交り、
 寐に就く前の 一ト遊び、
 まだ世の憂さに 染められぬ
 聲美はしう 張り上げて、
 手を取り連れて 歌ひ連れ、
 歌ひ連れ行く 廬の側。

二

潮さし來れば 濡れ／＼て、



濱の小石も 浸るなり。
 潮に浸れる 濱の石、
 濡れ色 玉と 美しや！。
 國 事あれば 何知らぬ
 心無き兒も 勇み立つ。
 心無き兒の 譯も無う
 いさめる氣色ケイシキ 愛らしや！。

三

誰が作りたる 軍歌イクサウタ、
 歌の意イコトの 猛くして、
 誰が節つけし 軍歌、
 歌の調の 烈しさを！。



四

堤の若葉 影暗き
 彼方に子等は 去り行けど、
 若葉 埋ます 歌の聲。
 宵の明星 やく光る
 その空の下 子等行けば、
 明星 抱く 歌の人。

五

若葉の蔭を 出つ入りつ、
 明星の下 徘徊り、
 すどしく歌ふ 軍歌、
 今新しう また起る。

第十三章

兒童の唱へる歌

一

男兒「行けや！ 疾く行け！ いざや行け！」
 女兒「行けや！ 疾く行け！ いざや行け！」
 紅色 匂ふ 東の
 朝日の光り 背に負ひて、
 敏馬の神の 靈勇む
 朝の嵐に 船出して、
 船首に碎く 雪の花、
 萬里の濤を 乗り破り、
 黒雲 鎖す 西の方、
 海のあなたの 大陸の
 間に朝日の 旗立てよ、

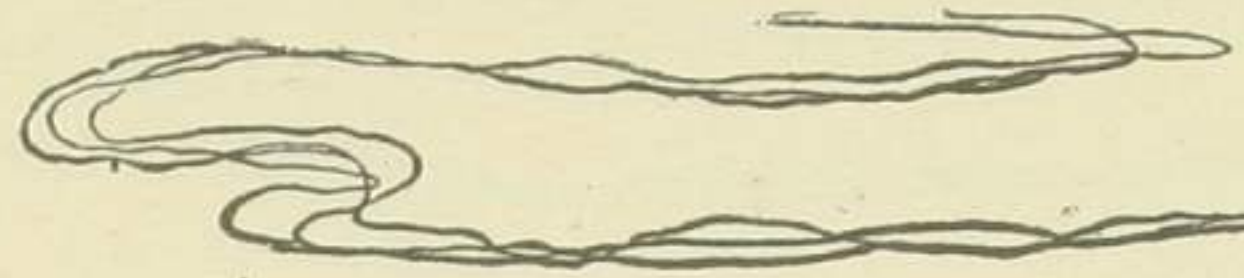




闇に朝日の旗立てよ。
行けや！。疾く行け！。いざや行け！。

二

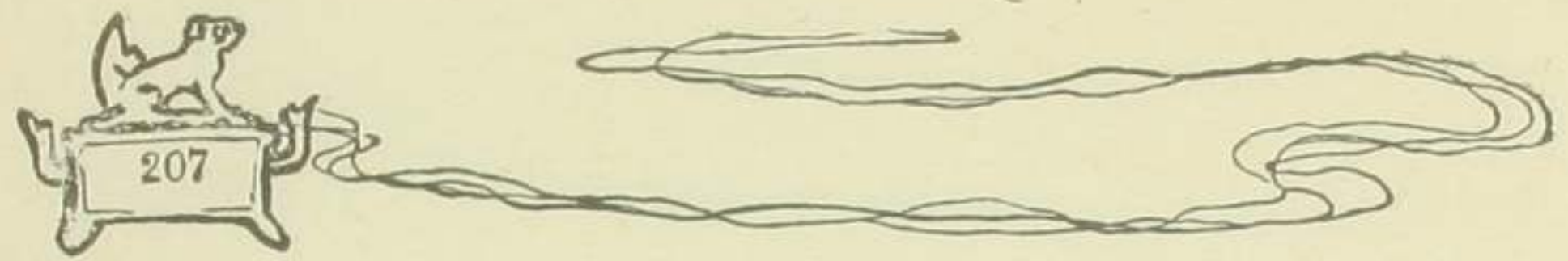
男兒「進めや進め！ いざ進め！。
義理の輝き 明らかに
仁慈の光り あたゝかき
朝日の旗を 押し立てよ、
汚穢ケガレに充てる 大陸を、
洗ひ淨めん 東海の
水の勢威イキホヒ これ見よと、
春は彌生の大潮の
磯に渚に 寄る如く



進めや進め！。いざ進め！。

三

女兒「打てや打て〜！ いざや打へ！。
飽くこと知らぬ 鋭き目、
會釋もあらぬ 毒の爪、
おもひのまゝに 羽を伸して、
我が物顔に 大空を
翔りて荒ぶ 荒鷲の
隣りの鶏の 雛を攫む！。
憎さも憎し 打てや打て！。
打たずばやがて 我が池の
魚をも奪らん 目の配り、





憎さも憎し、打てや打て！。

四

男兒「うてや、うて〜！。うてや、うて！。

天つ御神の御意は

我等が胸中に影さして、

我が大君の御言葉は

我等の頭上に降りたり。

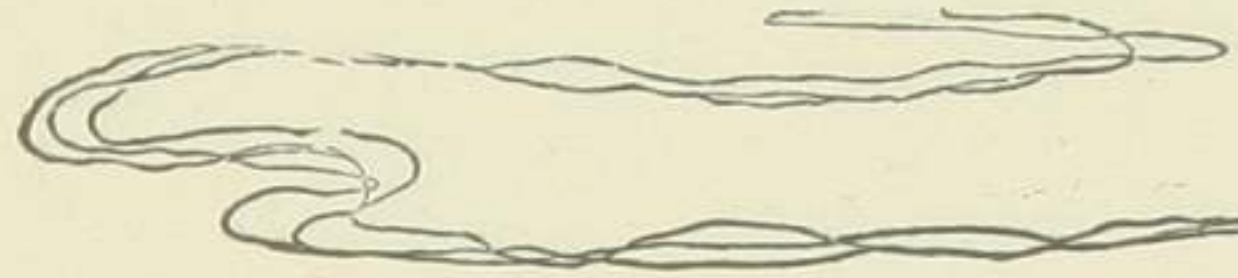
打てよと宣らす天つ神、

打てとおほする國つ皇。

腰に劔あり、肩に銃、

打たではおかじ！我が敵！。

打たではやまじ！我男兒！。



うてや！。うて〜！。打てや！、打て！。

五

男兒「うてや！。うて〜！。うてや！。うて！。

號令既に下つたり。

砲烟既に起つたり。

喇叭の聲は雲に入り、

叱咤の叫び岩を裂く。

生命は軽く義は重し、

敵は何萬ありとても、

我は一心たゞ堅し。

退かじ、撓まじたじろがじ、

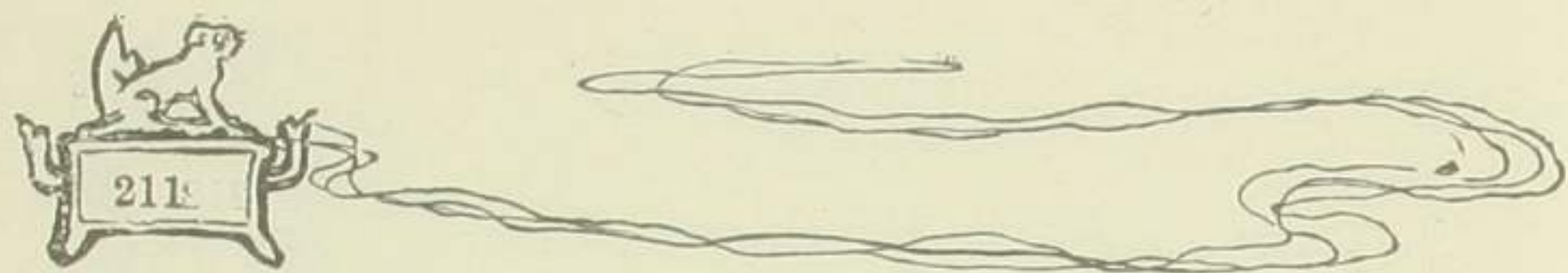
櫻の花と血の散らば、



赤き心を 戦場の
土に印シさん 我が願望チカヒ！
うてや！。うて／＼！。うてや！。うて！。

六

男兒「かゝれや！。かゝれ！。いざかゝれ！。
勝負岐るゝ 戦闘タケヒの
峠を越すか 越さるゝか
雌雄の決する 時は今。
かゝれや！。かゝれ！。いざかゝれ！。
迅雷落つる 砲鳴つて、
霰たばじる 弾丸タマぞ飛ぶ！。
敵も健氣に 振舞ふよ！。」



七
男兒「かゝれや！。かゝれ！。いざかゝれ！。
敵の強きも おもしろし。
ふじくれ立ちし 大木を
斫つてぞ見せむ 大斧オノの冴サエ。」

八

男兒「かゝれや！。かゝれ！。いざかゝれ！。
生命を知らず 飽までも
陣地を守る 剛敵の
防ぎ矢始何に 烈しくも。」

九

男兒「かゝれや！。かゝれ！。いざかゝれ！。
女兒「かゝれや！。かゝれ！。いざかゝれ！。」



敵の防ぎ矢 烈しくも
 何か恐れん 神國の
 勇士の頭カウベ 神宿る！。

十

男兒「かゝれや！かゝれ！。いざかゝれ！。
 女兒「かゝれや！かゝれ！。いざかゝれ！。
 敵はいろめき 立つたるぞ。
 突貫の命 下りたり、
 遅疑せずかゝれ、疾くかゝれ！。

十一

男兒「大洋萬里 濶けれど、
 燕は飛んで 越ゆるなり。
 矢石冒して 突貫し、

勇士駈け入れ！ 敵の陣。

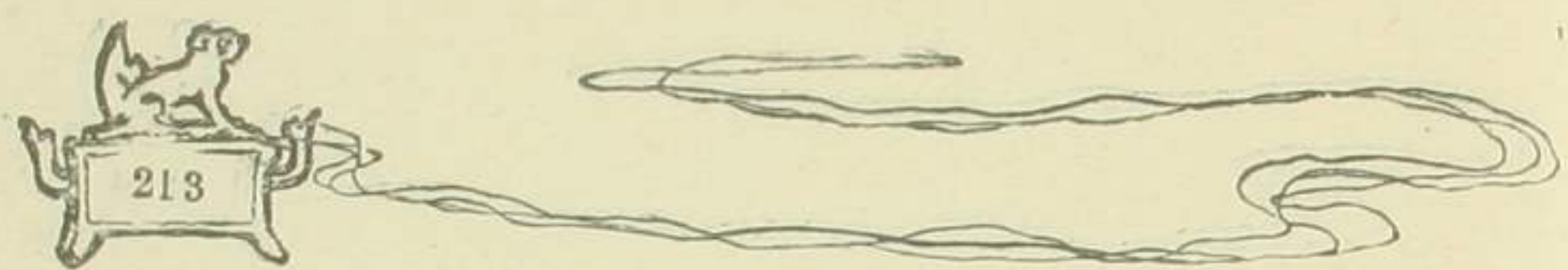
十二

男兒「かゝれや！かゝれ！。いざかゝれ！。
 燕は果敢無き 禽なれど、
 心 萬里の 洋ウミを吞む！。
 勇士もこより 敵を吞む！。

十三

女兒「谷は千仞 深くとも、
 獅子は一躍 越ゆるなり。
 敵の矢ヤ彈ダマの 何あらん、
 勇士切り入れ！ 敵の陣。

十四





女兒「かゝれや！かゝれ！いざかゝれ！
獅子の一ト聲 百獸は
腸 裂けて 死する也。
勇士の前に 敵も無し！」

十五

男兒「勇士駈け入れ 敵の陣、
敵を微塵に 駈け散らせ！
勇士斫り入れ 敵の陣、
敵を木片と 斫り崩せ！」

十六

男兒「山風渡つて 木の葉飛び、
勇士逼つて 敵亂る！」



山谷ごよむ 鬨の聲、
我が旗高し 敵の陣。
見よ戦闘は 勝つたるぞ！
敵は戦場を 踏まへ兼ね、
遺恨の眼 幾度か
此方を睨む 猛將も
駒の頭を 反し得ず
我に背面を 見せたるぞ！
此の圖ぬかさず 追ひまくれ！
ゆるみを呉れず 追ひまくれ！
可愛さ敵の 切齒して
殿戦すとも 何あらん。



我は堤防を切りし洪水！、
 我を支ふるものも無し。
 彼は割られし竹の節！、
 乃^{ヤバ}迎へて皆解けん！。
 押せや、押せく、ひた押しに！。
 總進撃の喇叭鳴る！。

十七

男兒「喇叭の聲の勇ましく
 總軍ふるふ勝戦。
 見よ戦鬪は勝つたるぞ、
 見よ戦鬪は勝つたるぞ。」

十八

男兒「勝つて驕らぬ將軍の
 命をかじこむ氣の締め、
 肅々として静なる
 中に勇威の満を持す。」

十九

男兒「敵の陣地のあとあはれ！。
 右往左往に兵器散り、
 兵器いづれも血を帯びて、
 三々五々と死屍亂れ、
 死屍猶握る劍の柄！。
 硝烟晴れて日の光り
 薄々照らす野の面、

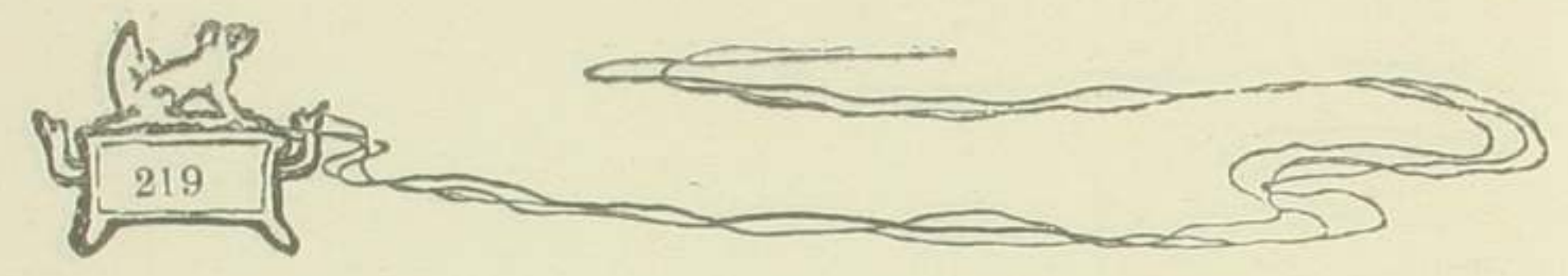




夕暮寒き 風吹けば、
草に倒れて まだ死なぬ
馬の鬣 浪 戦ぐ！。

第十四章

歌ひくゝて 去る子等の
聲やうやくに 遠ざかり、
影は隠れて、また見えす、
天には夜の 色満ちて
星の光りの 稜角^{カド}強し。
遊びくゝて 行く子等の
影やうやくに 距たりて、
歌は薄れて 消えて去る



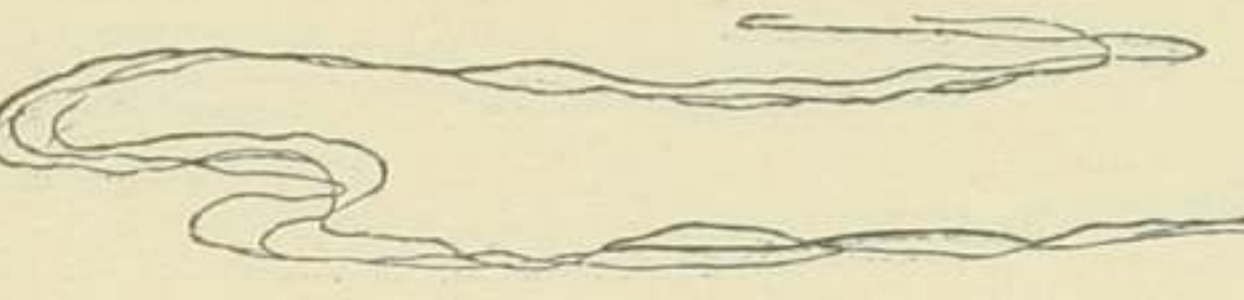
闇に一トしほ 黒々こ
若葉の堤 たゞ残る。

第十五章

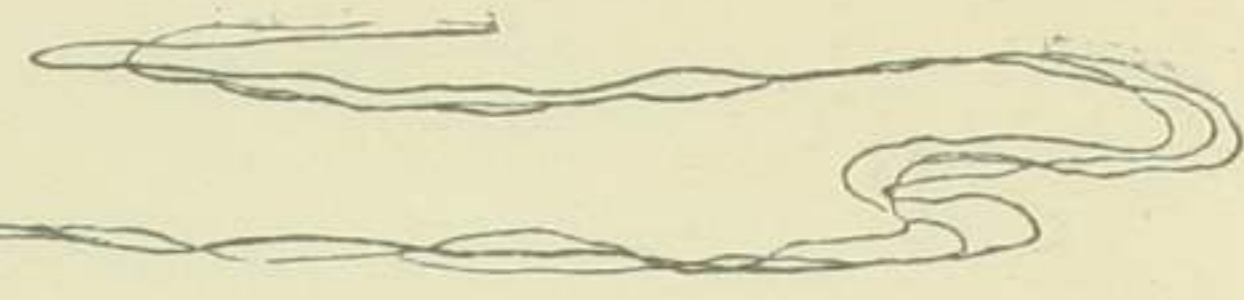
可愛き子等は 闇に去り、
勇める聲は 空に消え、
静かさのみの たゞ遺る、
廬は燈一ツ 人一人。

第十六章

一
我に友あり、『影』と呼ぶ。
『影』たゞ 契り 深き友！
好くも好かぬも 中々に



去らず去られぬ 因果同士。
 月に興する 秋の夜は
 一ツの猪口の 酒飲みて、
 花見てあるく 春の日は
 負ふてやつたり 負はれたり、
 幾歳睦び 語らひて、
 死なば共にの 誓文を
 筆で書くほど 野暮ならず、
 よし鳴神の 落つるとも
 その稻妻の 火の中に
 手を取りあふて 終るべき
 こゝろに虚妄も 無き交ナカの



その友今宵 樂します、
 憂に沈み 壁に倚る。

二

蝶驚けば 蜂も驚き、
 鯉去り行けば 白魚ミナヒまた去る。
 『影』うなだれて 物おもふ夜、
 氣づけば我も いつか頭を
 低く垂れたり 燈火の前。
 低く垂れたり 燈火の前。

第十七章

一

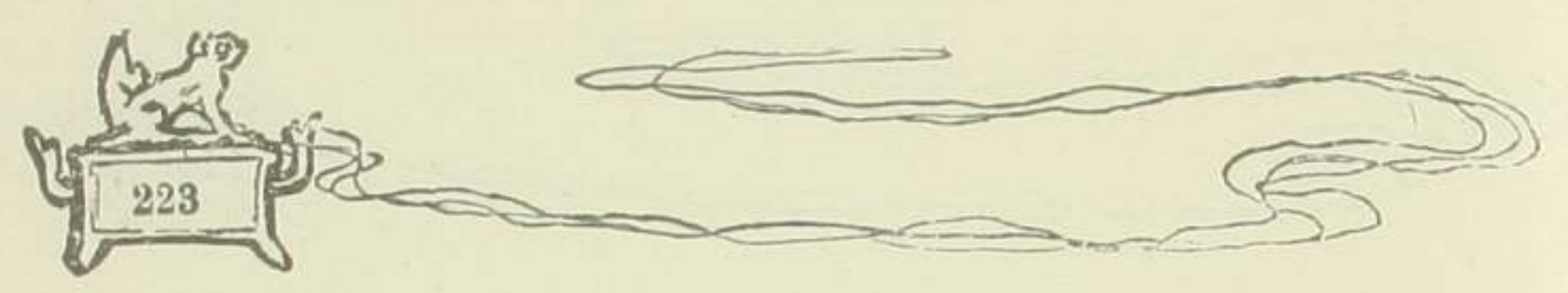
影「おゝ我が友よ！。おゝ汝！。



汝何おもふ？ 此の夕。
 我「おゝ我が友よ、おゝ汝！
 汝何おもふ？、此の夕。」

二

影「汝のおもひ 我は知りたり。
 里の童の 歌に感じて、
 汝ひそかに 物をおもふよ。
 實にも汝は 物おもふべし、
 あはれ汝は 大地^{ツチ}を結びて、
 汝の身をば 成し居たりしよ。
 大地は震へり、大地は震へり。
 汝の心 あはれ震動ふよ。」



三

形「汝のおもひ 我は知りたり。
 里の童の 歌に動ける
 我を汝は いたみ思ふよ。
 實にも汝は 我をいたまん、
 あはれ汝は たゞ光明^{ヒカリ}もて
 身をば成し居て 地に屬^ツかねば、
 大地^{ツチ}は震へど 汝愁へず、
 愁ふる我を いたみおもふか？」

第十八章

一

影「おゝこの我は 光明の兒！」



父は天つ日、母は月！。
 身は 美しう 曇りなき
 光明の中に 生り出でよ
 翼無けれど 軽々と
 虚空に遊び 翔りては
 少時とどまる 物の上、
 沙上石上 苔の上、
 藓蓆の上、壁の上、
 又或時は 青絹を
 のべたる海の 水の上、
 千草没れて 川一ツ
 たゞ残りたる 雪の上、



汝と共に 幾歳を
 睦みくゝて 経たりしが、
 汝は重く 濁りたる
 地より出でし 地の兒の
 國土の縁に 引かされて、
 國に事ある 此の日頃、
 果敢なき心 打震ひ、
 ひとり悩むぞ あはれなる！。

二

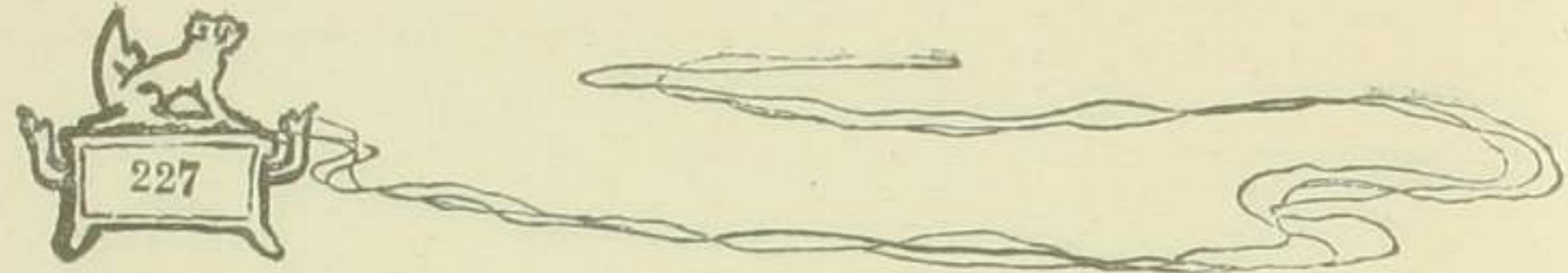
影天は風荒れ 海は浪立ち、
 大地は震へり 大地は震へり。
 里の童の 舌足らぬ



歌に動くも あらあはれ！。

三

影國土の縁に 引かされて
胸のとどろく 此の夕
果敢無き心 打ふるひ、
深きおもひに 沈み行く
汝を我は 悲みて、
つくろいたみ、なげくぞや。
おふいとほしの 我が友よ！。
我は天より 來れるに、
おふいとほしの わが友よ！。
汝は地より 生り出でぬ。



四

影南海の山 清く秀でよ
白鸚鵡 飛ぶ 彼の紫竹林
鸚鵡 自在に 飛びて遊べど、
我 猶 禽の 主^{シユッ} 有るを忘む。
金華の石室^ハの 霧に花さく
蘭の香の中 睡る小羊、
羊悠々 睡り睡れど、
羊のために 仙 無なくもがな！。
我は天より 來りし身、
王土の臣に あらざれば
心ゆたかに あり得れど、

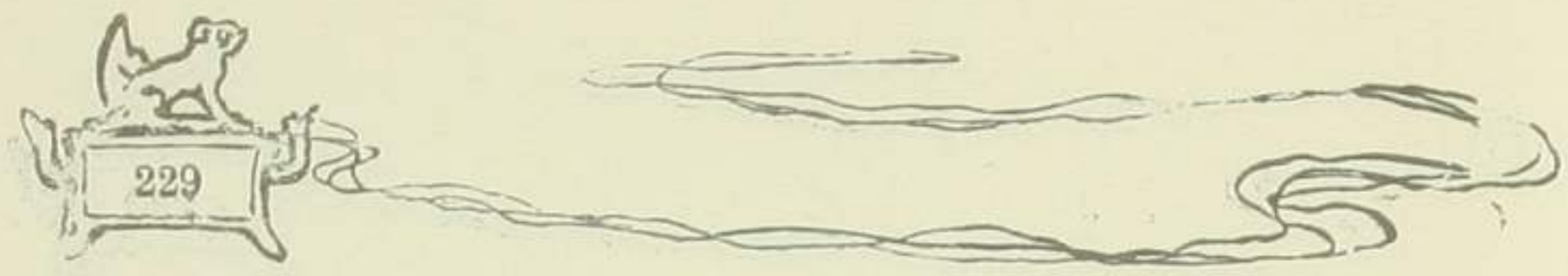


汝は地より 生り出でよ
 國土の恩を 負ひたれば
 胸痛むべき 此の夕、
 我も汝の ため愁ふ！」

第十九章

一

形おゝこの我は 地の人よ！。
 地の鹽凝りて 骨を成し、
 地の水集つて 血をたふふ。
 五尺の形骸 いくにか
 地のおもかげの 宿らざる？。
 おゝこの我は 地の人よ！。



光明の中に なり出でよ
 虚空に遊び 翔りては
 少時^{シヤウジ}地に寓^ヨる 蜻蛉^{カゲロウ}の
 心も軽く 身も軽き
 汝もさすが 我がために
 物をおもひて 此の夕
 しみく なげき 呉るゝかや。

二

形おゝいとほしの 我が友よ！。
 汝は天より 來れども、
 おゝいとほしの 我が友よ、
 我は地より なり出でぬ。」

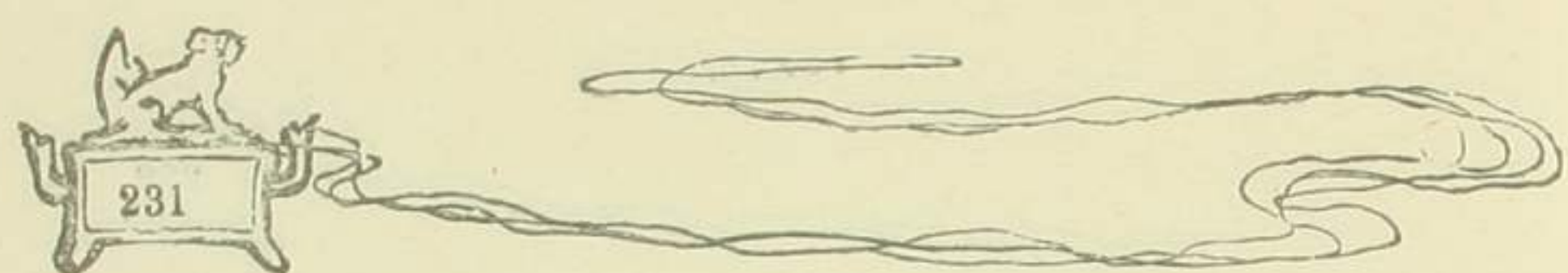


三

形天は風荒れ 海は浪立ち、
大地は震へり 大地は震へり、
國土の縁に 心引かれて
果敢なくおもひ 悩む此の我。

四

形地より成れる 我を見よ！。
地より成れる 我を見よ！。
御代安らけき 大君の
惠の露に 八束穂の
垂穂めでたき 稻食みて、
小田の雀の 身を保ち、



五

今日まで生命 活けるなり。
雀の生命、その生命！。
生命の中に 大君の
惠の露の 珠光る！。
惠の露の 珠光るぞや！。
形地より成れる 我を見よ！。
地より成れる 我を見よ。
神の教の 御すがたご、
清く流るゝ 五十鈴川、
五十鈴の川の 濁りなき
その末汲みて 我が胸に



湛へて澄ます 我が心。

心の中に 神川の

水の清さの 恩籠る！。

水の清さの 徳籠る！。

六

形世にあたくかき 天つ日の

影をうつせる 日の御旗。

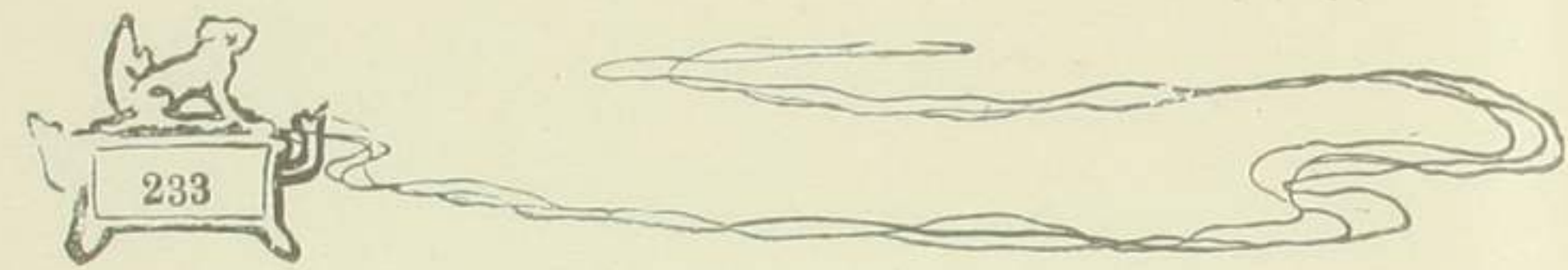
賤民が門にも ひるがへる

御旗のかげに あたくかき

其の風吸ひて また吸ひて

我おひ立ちぬ おひ立ちぬ。

我が血の中に 漲らふ



御旗の靈の あたくかみ！

御旗の靈の あたくかみ！

我が血の中に 漲らふ！。

七

形牡丹 美なれど 富に媚び、

梅 清けれど 世に疎し。

たどならびなき 敷島の

倭の春を うるはしう

飾る櫻の 花美し。

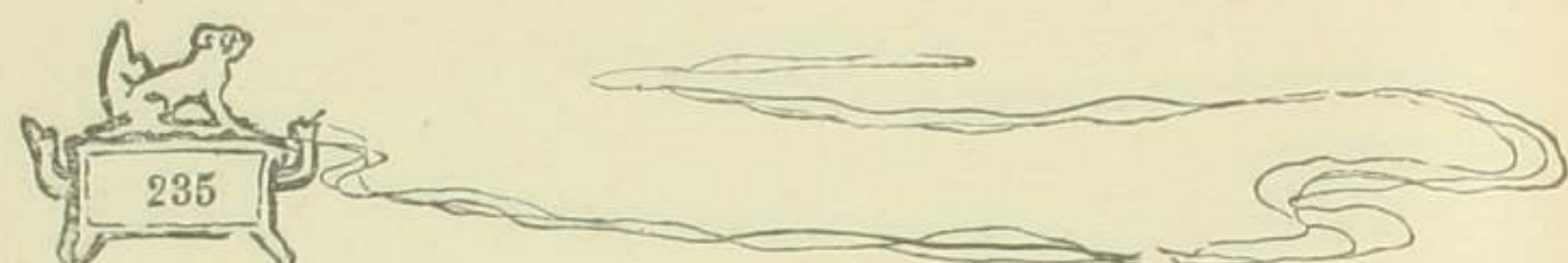
愛情^{ナサク}を含む 紅の

色はありても 婀娜つかで

汚れぬ雪と 咲きほこる



花のたましひ いさぎよき
 その香は浸みて またしみて
 我が骨髄に 宿るなり。
 我が骨宿す 櫻の香、
 我が骨宿す 櫻の香。
 やまとの民と 生れ来て、
 やまとの國に 身は老いぬ。
 幾歳 花の 蔭に立ち、
 幾歳 花の 香に酔ひぬ。
 骨は櫻の 香に染みて
 花に生命と 我契る！
 生きてやまとの 民となり、

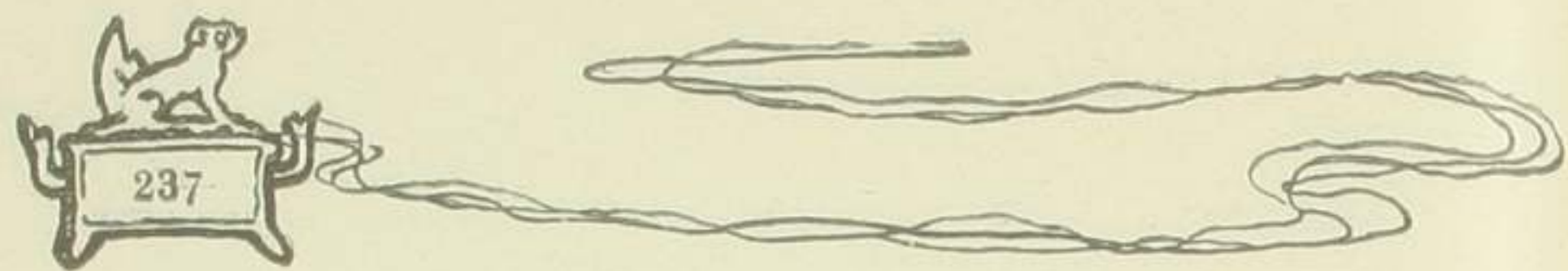


死して櫻に 慚ぢざらん
 願ひは骨に 染めるぞや。
 見よ我死なば 我を焚け、
 煙り 櫻の 香もあらん！
 八
 形我は地より 成れる身ぞ、
 我は地より 成れる身ぞ。
 五尺の形骸 いづくにか
 地のおもかげの 宿らざる。
 上は頭顱の 髪の毛の
 その毛の末の 末までも、
 此の國の水 漲りて、



236

下は地を踏む 我が足の
 足の小指の 爪までも
 此の國の地の 鹽 凝れり。
 我が血 我が骨 我が生命、
 地より來らぬ ものなし。
 我が心そも 誰が心ぞや
 我が心もと 地の心なり。」
 九
 形天は風荒れ 海は浪立ち、
 大地は震へり 大地は震へり。
 我が身もとより 地より生りたり、
 我が心もと 地の心なり、



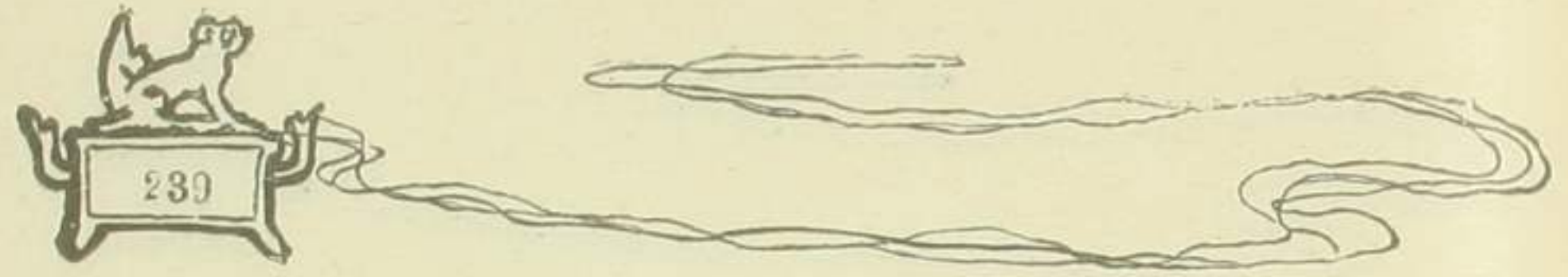
237

國土の縁に 心引かれて
 果敢無く悩む 我を憐め！」
 第二十章
 一
 影實にこそわりよ。こそわりよ！
 汝は地より 出でし身の、
 國に事ある 此の頃は
 やさしき心 打ちめり
 果敢無き里の 童兒ワラシの
 歌に感じて おのづから
 物をおもふも こそわりや。
 栗の葉を食む 栗蟲の



その繭 栗の 色を帯び、
 雪の野に栖む 野兔の
 その毛に雪の 光りあり。
 物皆おのが なり出づる
 本にそむかぬ ならひなり。
 おふいとほしの わが友よ。
 汝は何を 憚りて
 「我は地の人、國の人、
 國に事あり、國のため
 我 太刀執りて 立たうよ。」と
 敢て叫ばで いたづらに
 物をおもふよ 廬の中。」

二



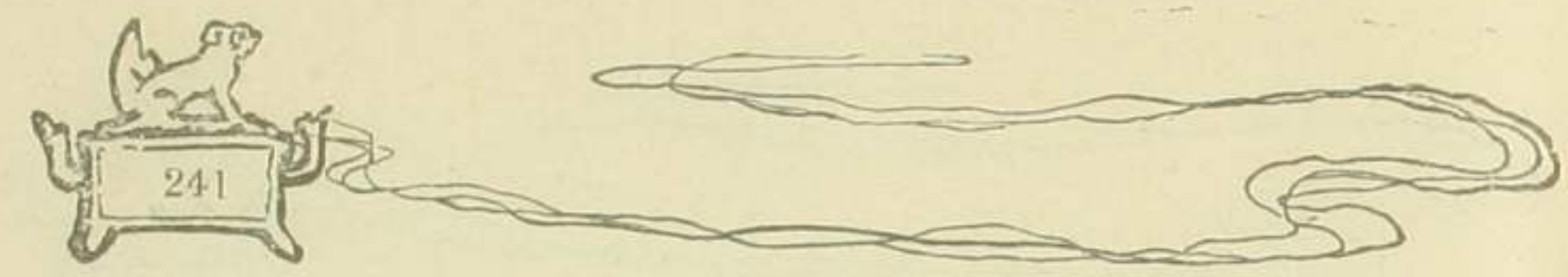
形おふ此の我は 地ツチの人、
 「我は地チの人、國の人、
 國に事あり、國のため
 我 太刀執りて、立たんす」と
 おもはぬことは なけれども、
 我若しこゝを 立出でよ
 地の人とのみ なりも果てなば、
 我は汝と 長く別れん。
 おふいとほしの 吾が友よ、
 我は地ツチより 生り出でぬ。」
 影おふいとほしの 我が友よ、



我は天より 來れる身。
 形我と汝と 長く別れん
 その悲みに 我惱むなり。

三

影我は大地には 屬かぬ身の、
 形虚空に遊ぶ 大自在、
 影此の現世に 縛られで、
 形詩神のあとを 追うて飛ぶ、
 影心宇宙を 狭しとし、
 形おもひ古今を 打忘れ、
 影飄々として 意に任す
 形汝が上の 好まじや。



四

影汝は天の 人ならで
 形みづほの國の 國人と
 影他に よばるゝ
 形神の末裔！
 影春の蘆芽 汚れなく
 形生ひて出でたる 其日より、
 影をのころじまの 潮風の
 形めぐみを受けて
 影育ちつゝ
 形根は移さざる 此の心、
 影飽まで國を



242

形「離れざる」

影「汝のおもひ、また嘉みすべし。」

五

形「たゞ我憾む 我と汝と、」

影「その生^ナり出でし 最初^{ハツメ}異なり、」

形「その生^ナひ立てる 今も異なり、」

影「手を分つべき 心地する今日、」

形「離れんとして 離れ難きに」

影「互に悩む 我と汝と。」

六

形「そのうまれだち 異なれば、」

汝と我と 思ひ 差へど、」



243

影「この情契^{カケテヒ}の 深ければ、」

我と汝と 心 一つに、」

形「我も汝を 捨て得ねば」

影「汝を我も 離れ得ず、」

形「我も汝を いとほしみ、」

影「汝を我も なつかしむ、」

形「たゞ如何にせん 此の夕、」

影「我も汝に 従^ツき得ねば、」

形「汝も我に 伴へぬ、」

影「地に居るものごと 天飛ぶ身、」

形「鶏寒うして 樹に潜み、」

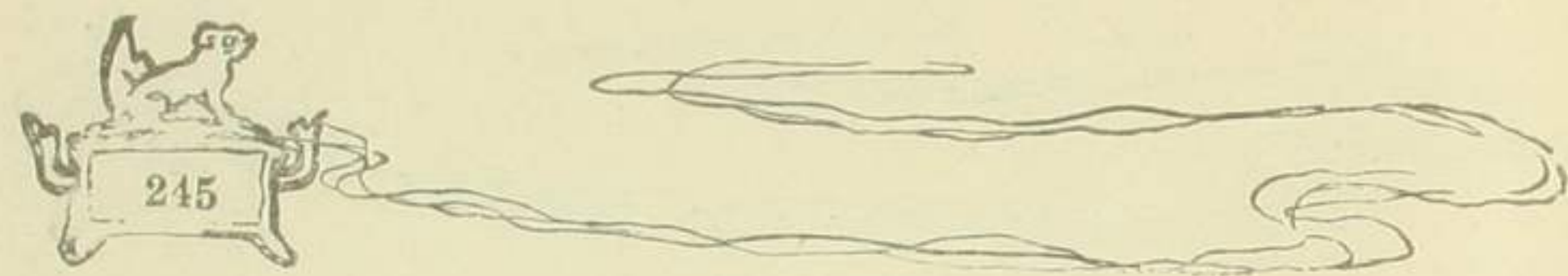
影「鴨寒うして 水に没^イる、」



形異なる中に 同オシテじの
 底の心は ありながら、
 影同じき中に 異オガヒある
 物質モノの隔ヘダテに 分けられて、
 形一つになれぬ 恨めしさ！

第二十一章

一
 影汝を連れて 大空の
 雲の八重垣 立つ裏ウラに
 汝が戀ふる 詩の神の
 玉の御殿ミアラカ おとづれて
 遊ばんとすれば あなあはれ！



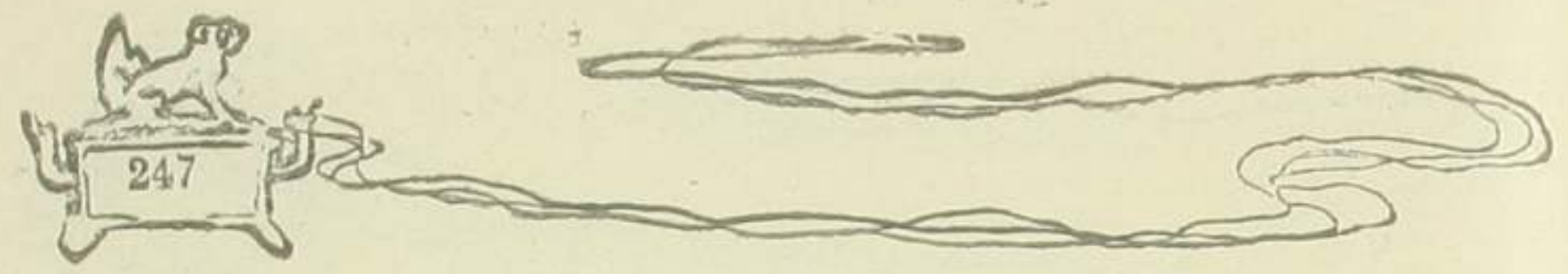
汝は重き 地の人！
 霞を躡フみて 騰トボり行く
 仙人ヒヂリの軽き 氣も無くて、
 櫻の梢 吹きわたる
 此頃の風 うれたみて
 花の樹蔭を 去りやらず、
 空しくおもひ 沈めるよ！

二

形汝を連れて 我はまた、
 我が生ナり出でし 國のため、
 國に事ある 此頃を
 大丈夫オトコの徒坐タラシ 口惜クチごと、



力は よしや 弱くとも、
 心の弓に 弦かけて、
 鋭さ よしや 足らずとも
 思ひの征矢の 鏃 礪ぎ、
 麻にまじらふ 蓬の身、
 勇士の間に 挟まりて
 勵まんとすれば あな憎や、
 汝は軽き 光りの兒！
 百里の園の 美なるにも
 人間の作れる 籠の中に
 垂尾曳かぬ 鳳凰の
 眼は長へに 天を見て



飛ばんとおもひ 焦るよよ！

三

影互におもふ まふならぬ
 形汝いとほし 我もあはれや。
 影互におもひ おもひあふ
 形汝いとほし、我もあはれや。
 影如何にかなさん。
 形如何にせん。

第二十二章

我 手を取りて 『影』を抱けば、
 『影』手を取りて また我を抱く。
 言葉は絶えて 情懷残りて、



残れるおもひ 絶ゆることなし。

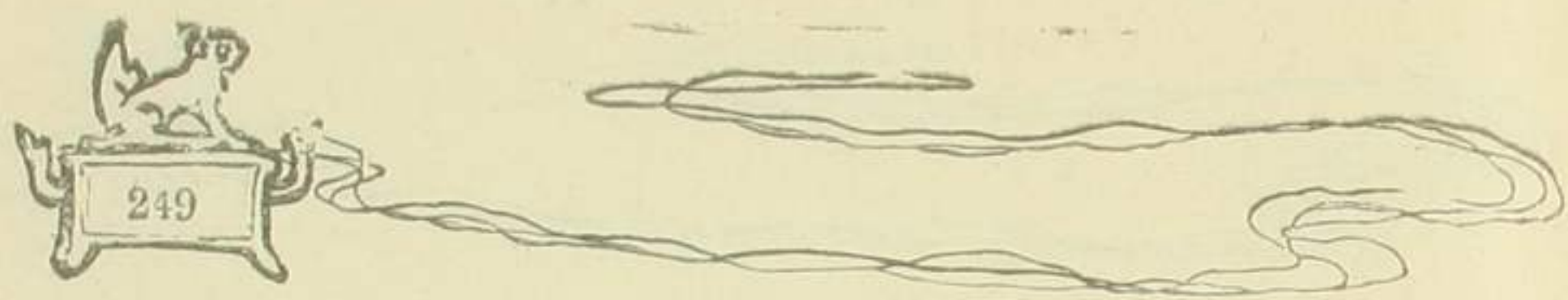
第二十三章

一

怯るゝ馬は 勇者 愛せず、
勇者 咎無し 馬に咎あり。
愚痴なる婦 高士 棄て去る、
高士 罪なし 婦 罪あり。

二

空足搔カラアガキして 駈け出でぬ
馬の醜さ 誰も見らるなり、
勇者 咎なし 勇者 咎なし。
理の明るきに 従はぬ



婦の愚味オロカ 自己ワレは知らずや、
婦 罪あり、婦 罪あり。

三

あら うとましの 我身やな。
詩の神我を 見かへらで、
詩の神我を 棄てたまひけん、
我 詩の神の 玉の御聲を
聞くこと ことくに 長く絶えたり。
あら うとましの 我身やな！

四

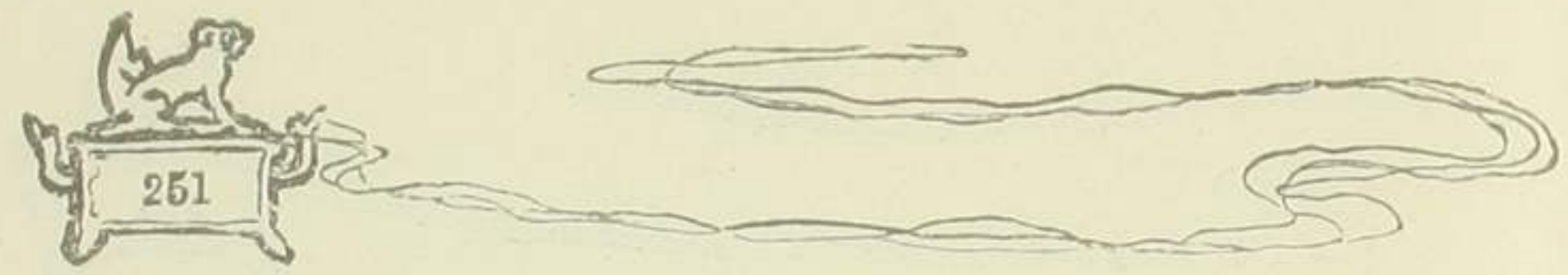
胸に二ツの おもひあり、
二ツのおもひ 争ひて、



詩に進む氣の 張り弱く、
 空足搔する 醜さに
 詩の神 疎み たまひしか。
 取るべき路は 知りながら
 取るべき路を 取りかねて、
 心の慾を 去りなやみ、
 理に就かざりし おろかさ
 詩の神 厭ひ たまひしか。
 我 棄てられぬ 詩の神に、
 あら うとましの 我が身やな！。

五

糧秣マシカ 亂れて 夏 臭く、



馬屋 小暗く 蠖蝶マカバ 飛ぶ
 中に嘶く 瘦馬の
 棄てられて猶 主をおもひ
 主をおもひ鳴く 聲顫ふ！
 主をおもひ鳴く 聲顫ふ！。

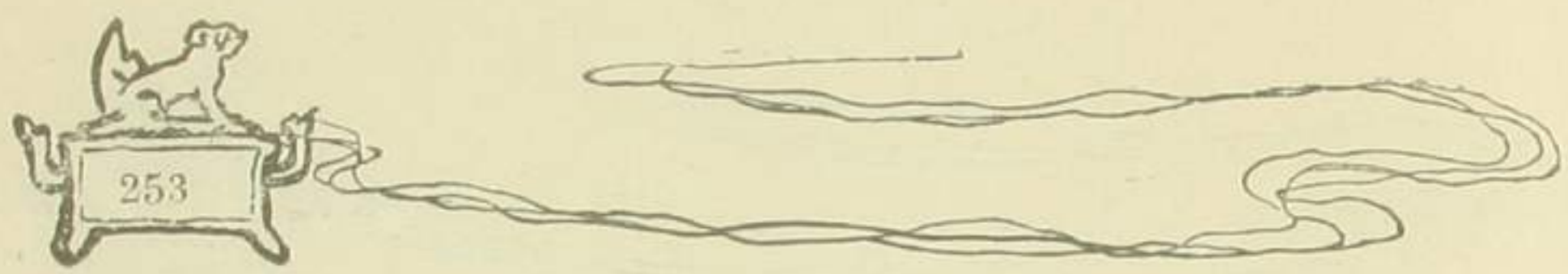
六

油無き髪 卷きつくる
 黄楊ツグの鬢櫛 齒も缺けぬ。
 鏡に負く 日は積みて、
 燕の夫婦 睦まじう
 此の春風に 又も来て
 ひねもす語る 梁の上、



252

一人其燕見て 一人住む
 家たゞ廣く 淋しきに、
 棄てられし妻 おろかにも、
 人の行方を 猶おもひ、
 おもひくゝて つくゝと
 思ひて細る 胸暗く、
 夜に燈火トモシビ 無き心地！
 夜に燈火 無き心地！
 七
 嘶イナく聲の 悲しきも
 駑馬の嘶き 甲斐も無く、
 悔の涙の あつくとも



253

愚婦の涙に 價値アタヒ無し。
 馬悲めど 勇者來らず、
 女泣けども 高士歸らず、
 仙車 痕無く 雲に隠れて、
 靈光 空に 眼に遺るなり。
 八
 仙車 痕無く 雲に隠れて
 靈光 空に 眼に遺るなり。
 我が廬の神 廬を見すて、
 いづくの里に いでまじにけむ、
 世に妙なりし 空想の香は
 今 現世の 塵と變れる！



254

廬の中は いつか荒びて

いづくに神は 去りまじにけん、

神の御聲は 更に聞えず、

人の叫の 耳にのみ入る！。

我 詩に餓えて 詩をおもへども、

詩の影さゝす 芸窓の下。

我が神戀ひて 神を呼べども、

神降りまさす 小齋の中。

九

身は繫がるゝ 馬杓、

杓に傍ひて 主をおもふ

思ひ悶ゆる 鶯馬の

心の恨 長くして、

胸に深霧立つ 獨り居の

夕 悲しき 鐘の聲、

消えにし聲の あとを追ふ

女心の おろかにも

郎を慕ふ 遣る瀬無の

迷 果無き 我がこゝろ！。

我 詩の神の 玉の御聲を

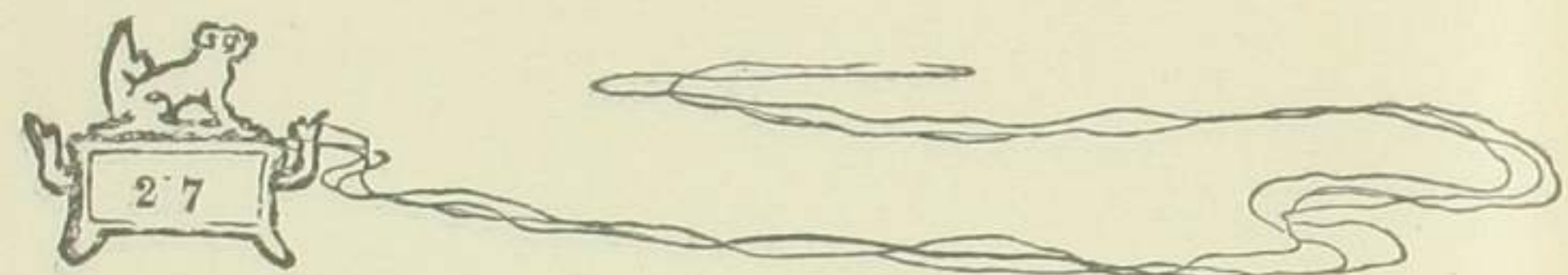
聞くことごとくに 長く絶えたり、

あら うとましの 我身やな！。

我 棄てられぬ 詩の神に！。



255



第四篇

第一章 若き人の歌

一

人の歌皆 墨を以て成る。

我が歌ひとり 血を以て成る。

血をもつて成る 我が歌の文字、

一と起つて 大空に舞へ。

二

男兒歌はず 蝶鳥の情、

野客ヤカク猶知る 君王の恩。

國開けて 二千五百年、



國に事あり 我が血湧き立つ。

我願はくば 歌を作りて、

我が血の沸ゆる 音を寫して、

歌に鐵鼓の 響あらせん。

歌に鐵鼓の 響あらせん。

三

鼓を作る 百煉の鐵、

鐵鼓一トたび 鳴つて響けば、

野草魔えて 末葉露散り、

蟋蟀鳴かず 土に平伏す。

四

心頭燃え燃ゆ 愛國の念、

心火怒つて 我が血沸え立つ。

男兒たゞ歌ふ 愛國の歌、

歌に一世を おほふ意氣あり。

五

血をもつて成る 愛國の歌、

歌成つて句々 皆生命あり。

鬼神を拉ぐ 精神盛んに、

道義を輔く 氣象大きく、

星よ莖よ 月よ百合よの、

歌皆羞ぢて 逃げ走るなり。

六

我 國のため 國をこそおもへ、





なに歌のため 歌をつくらん。
 人たゞあれや 愛國の念、
 歌たゞあれや 血の沸ゆる音。

七

硯の海に 紫色ムラサキの

雲湧く墨の 色佳きも、

墨をもて成る 其歌の

句 そもく 何かある！。

八

花をいたみて 泣く涙、

戀にやつれて 詠む愁、

歌めかす歌 やさしきも

おもひの終に 何になる！。

九

男兒歌はず 蝶鳥の情

野客猶知る 君王の恩。

我 歌人ウタヒトと 呼ばるゝを愧づ、

たゞ愛國の 狂と呼ばれん。

十

言葉あやざる 歌の奴隸ヤツコの

拜ヲガむ神を 脚下アシに踏まへて、

梁ホコ横ヨコたへて 歌をつくりて、

軍の神に 犠牲ヒとささげん。

第二章





形「聞け、我が窓の 外の聲。」

影「歌の御神を 軽しめて」

形「誇りに誇る 其人の」

影「物狂はしう 嘯きて」

形「過ぐるを聞くも」

影「うとまじや。」

形「如何なる人ぞ、」

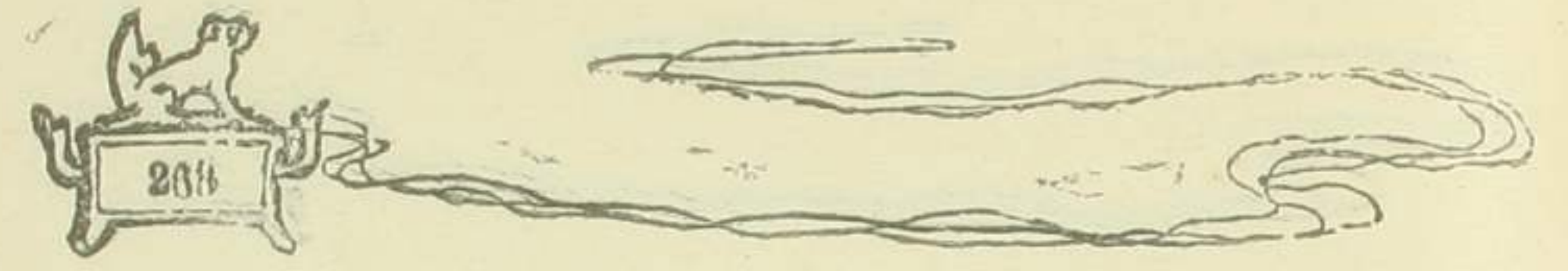
影「何人ぞ？」

第三章

形「窓前の客！、窓前の客！」

君「なご歌の 神を卑む？」

國をおもふは さもあらばあれ、



詩を罵るは 何のこころぞ。

瑪瑙 火に飽く 君の容顔、

君「なほ若し 血のみ 身に満つ！」

璞 琢磨かれぬ 君の言語、

言語の圭角 何ぞ苛らぐ！。

君 青春の 意氣に誇るも、

浮世の水の 酸さを啣みて、

ひそむる顔の 皺に老い行く

我が身の秋の 暮に臨まば、

君「また終に 此の我が如、」

必ず知らん 詩の神の徳。

詩の神いつく 此の廬の前、



神を驥すな 若き血の人！

第四章 若き人の言

一

「小廬の主人！ 何啣つ！」

我 老いたりとおもふほど

世に愚なるものは無し。

たゞ永久に 若き血を

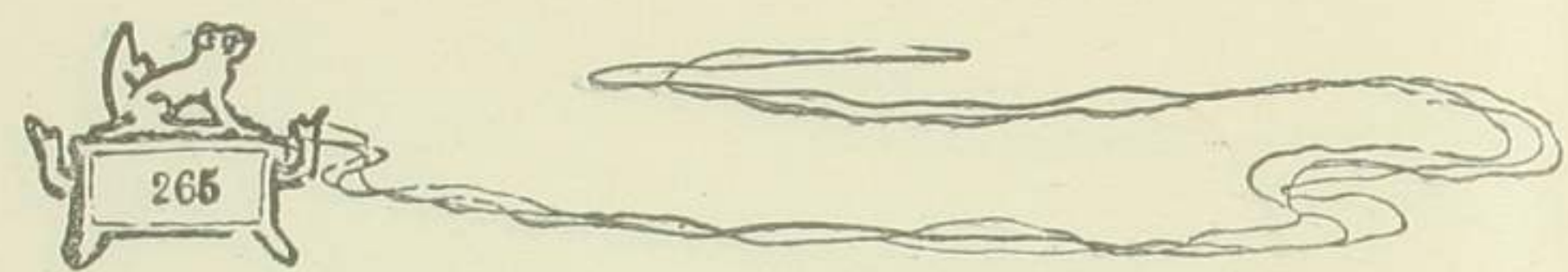
湛へて生きん わが願望！

われ老い進む ことあらじ、

我 詩の神を 何にせん。

詩の神や何！、 ことをかし。

二



男兒歌はず 蝶鳥の情、

野客猶知る 君王の恩、

國開けて 二千五百年、

國に事あり 我が血湧き立つ。

我 國のため 國をこそおもへ、

何 歌のため 歌を作らん、

人たゞ有れや 愛國の念、

歌たゞ有れや 血の沸ゆる音。

三

汝 小廬の主人 且つ聞け、

現今はそもく 何の時ぞや。

大戦 海の 外に起つて、



國のためにと 男兒 身を捨つ。

見よ うら若き 女泣く、

彼が夫の 遺髪の前。

見よ いたいけの 兒童泣く、

父の寫眞の 其の下に。

四

涙の眼には 花も無く、

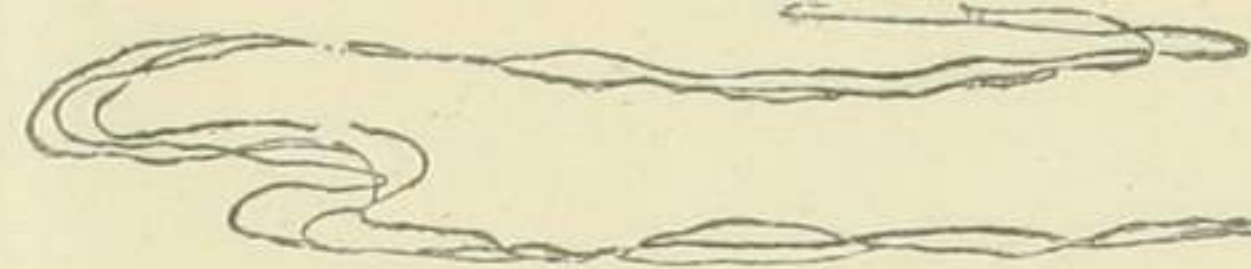
愁の耳に 鳥も無き

此の時何の 歌あらん。

此の時何の 歌あらん。

歌の神！、去れ！。なまぬるじ。

歌人！、退れ！。なまぬるじ。



五

知らずや詩仙 李太白、

巴陵に登り 洞庭の

戦鼓の音を 聞ける日は、

東籬の下に 徘徊る

彼の淵明を 嘲みしを。

六

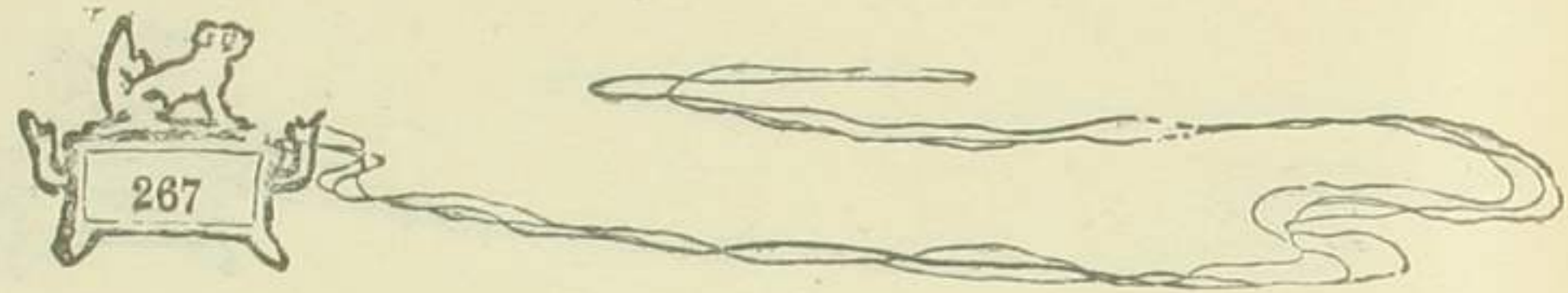
優遊の人 憎むべし。

優遊の人 憎むべし。

言葉あやざる 歌の奴隷の

拜む神を 脚下に踏まへて、

槩 横たへて 歌を作つて、





軍の神に 賛と獻げん。

第五章 形の言

壯士過ぎませ、吾が廬の前。

人おのゝくに 希望あり、

希望異へば 業 異ふ。

人おのゝくに 心あり、

心たがへば 氣もあはず。

山に柴刈る 山樵と

海に魚取る 漁翁と、

相見て笑むは 市中の

酒屋の帘の 習風に

人を手まねぎ する蔭の



たゞ束の間に 過ぎざらん。

鱗雲 立つ 夕空を

ながめて海の 人は去り、

山鴉 啼く 聲きよて

山人歸る 山の家。

おもひゝくの それぐに、

面と面 相反き、

背と背 互に 遠ざかる

それも浮世の すがたなり。

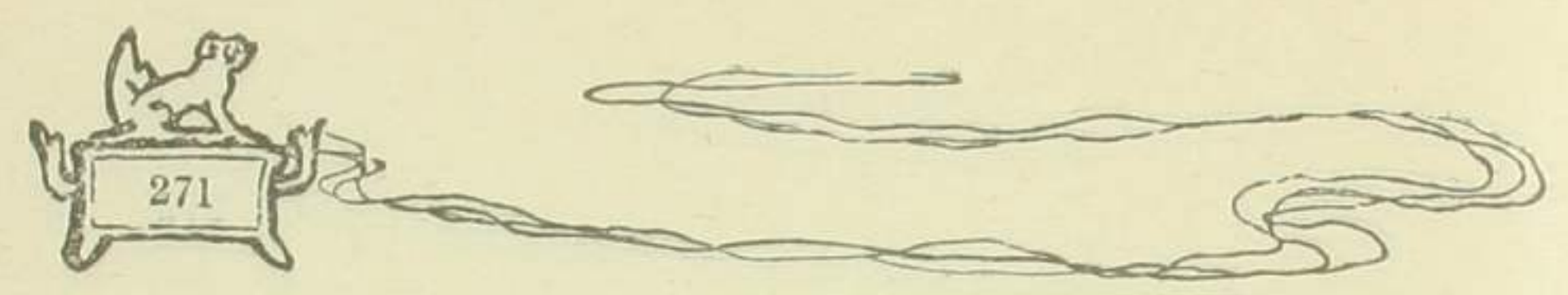
我等は歌に あこがるゝ、

君はしきりに 世をおもふ。

我等は歌に あこがれて



一句得なやむ 夜を深み、
 髭を思案の 手すさみに
 燃りくゝて 燃り断つ
 をかじきわざに 身をせめて、
 世にはおのづと 疎く經ぬ。
 君のしきりに 世をおもふ
 心は鐵の まろかせの
 眞紅の火炎 揚げ居りて、
 觸るゝ塵 皆 焚き盡す
 それにも似たる 勢に
 歌をも詩をも 卑しむる。
 我は山樵 海を見ず、



斧杖つきて 山を愛で、
 君は漁翁 山知らず、
 釣竿をかたげて 海を褒む。
 おもひくゝの それくゝに
 おのれはおのれ 君は君。
 希望たがへば 業たがひ、
 心たがへば 氣も合はず、
 争ふもまた 甲斐無しや。
 君たゞ過ぎよ 吾が廬の前。
 君たゞ過ぎよ 吾が廬の前。
 第六章 影の言
 狂士去れ去れ、 吾が廬の前。



酒はたゞく　酒なるが酒！
 歌はたゞく　歌なるが歌！
 酒ならぬ酒、酒　厭ふべし、
 歌ならぬ歌、歌　嫌ふべし。
 此の現世の醜の奴と
 なりて甘なふ　醜の奴の
 瘡肘怒る　蟻螂の姿、
 國のためとて　うたふ其の歌、
 蛙の聲の　あだに騒ぐも
 蛙、蟻螂、歌は得なさじ。
 歌の御神も　仰ぎまつらぬ
 汝　狂客　憎き我が敵！

狂士去れ　　吾が廬の前。

第七章　若き人の言

一

笑ふべし　小廬の人の
 胸せまく　我を怒るか。
 逐はるとも、居りたくば居て、
 留むとも　倦かば去るべし。
 川添の　水づくところ、
 割葦鳥は　愛でも宿れ、
 我が見ては　戀ふにも足らぬ
 此の廬の　ほとりに立ちて
 此の夕　我　何にせん。



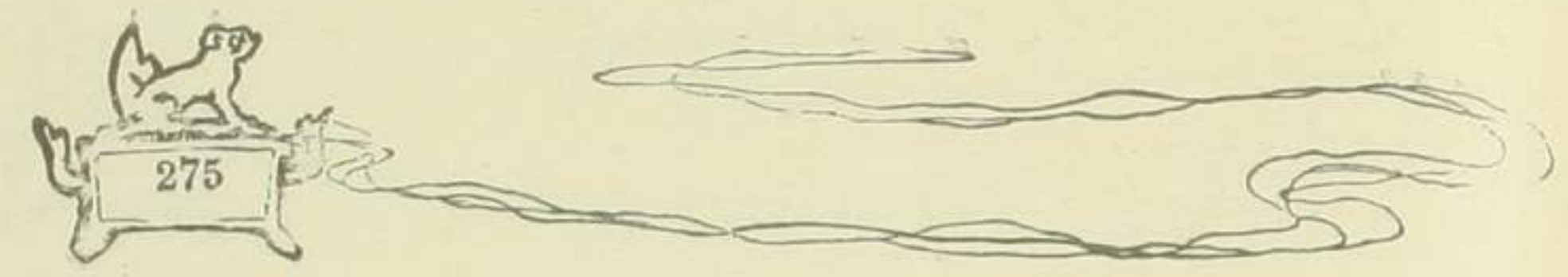


二

おろかや 爾！
 わが言を 聴け！
 爾はおのが 廬にすくみて
 廬を天地と 思ひ做すらん、
 我は天地を 吾が家にして
 心も高く 世をぞ経るなる！

三

秋風吹きて 紅葉して
 やがて嵐に 散り行かん
 山路の 蔦の 葉の裏に
 わが世を頼む 蝸牛の



四

自ら限る おのが殻、
 殻に潜みて 籠り居の
 我 賢じと 誇ることも
 はかなき活計 誰 褒めん
 雲に羽を伸す 鴻鵠の
 ゆたけき態は 無きまでも、
 榛の樹林 栗林
 心まかせに 飛びうつり、
 必らず森の 第一の
 高き梢に 身を置きて、
 鋭き聲に 威を誇る



百舌鳥にも慚ぢよ 廬の主！。

五

人の世に在る 二萬日。
首をすくめ 尾をすくめ、
手足すくめて 藏六の
龜の醜き 智慧假りて、
たゞ事無きを こひねがひ、
世の慾捨てて 詩に睦び、
詩に親みて 世を忘れ、
二百十日の 風の日も、
天見て歎く 農人の
深き恨は 餘所にして



おのが庭なる 女郎花
尾花かるかや 秋草の
しごろもごろに 亂るゝを。
悲しみて詠む 痴歌、
吟哦に耽る 二十四時、
病も無くて 泣き呻き、
白紙汚す 墨汁と
頭上の髪の 黒色をば
使ひ盡して 文字書いて
浮世に遺す それが何！。

六

歌とは何ぞ 何ものぞ！。



世に役立たぬ のらものが、
泣きし笑ひし 夢の骸骨ホネ！
赤白シヤクビヤクの肉 解け失せて
雨打つ野邊に 骨残り、
悲歡の夢の 痕消えて、
風寒き世に 歌存る！
歌とは何ぞ？。夢の骸骨のみ！
夢の骸骨たゞ 世に残ることも、
歌仙の名さへ 悲しからずや。

七

人の世に在る たゞ二萬日！、
惜みてもまた たゞ二萬日！。



甲を日に乾す 泥龜の
睡り静けく 沼中の
小島に棲みて 老ゆるごと
生命イノチ生くとも 何にかはせん、
たゞ二萬日！ たゞ二萬日！。
意氣を重んじ 身を輕んじて、
朝アサに笑みて 夕ユフ死すべし。

八

花は樹に咲く 春の一時！。
人は世に在る 我が身一代！。
婦女メナはあはれ 世に愛されよ、
男兒は敢て 國を愛せよ！、



臘脂と咲く花！。雪と咲く花！。
臘脂たゞ濃かれ！。雪清くあれ。

九

我 幸に 男兒たる身の
萬念すべて 洗ひ盡して
たゞ愛國の 一念を有つ。
この念 胸に 燃えて熾りて、
男兒と生れ 出でたりし身の
尊き事を わづかにぞ知る！。
男兒歌はず 蝶鳥の情、
野客猶知る 君王の恩、

十

吾が脚は吾が 路を行くべし、
我が運命は 吾が手取るべし、
汝は睡れ 小齋の中、
我は去らなん 長堤の陰。

第八章

むしの嫌ひし 道連も
晝 追分に 分れては、
並樹の松に 日の暮るゝ
夕 淋しき 習なり。
有りのすさびに つらくせし
人も去りては なつかしく、
呼び返したき 心地して、





廬イホ 音無く 更け行けば、
 夜の色おほふ 水黒く、
 川添柳 風絶えて、
 柳も睡り 水も寐る。

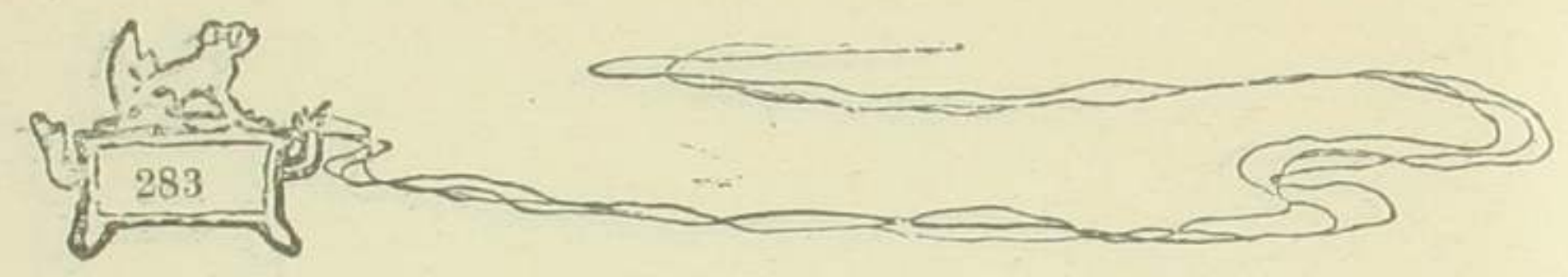
第九章 客詩人の歌

一

禽は睡る 樹の茂み、
 魚は寐る 水の澱ヨド。
 小夜ふけて 睡らぬは
 愚なる 詩人のみ。

二

大空に 巖黒く、



山は寐る 闇の底。
 奥山の 闇深く、
 雲は寐る 岩の窟アノ。
 小夜更けて 睡らぬは
 おろかなる 詩人のみ。

三

罪あるものは いねがてに、
 戀する人は 夢成らず。
 身は罪も無く 戀もせで、
 夜を寐がてに 物おもひ
 更けて夢路に 猶入らず。
 誰が褒めもせぬ 詩に凝つて

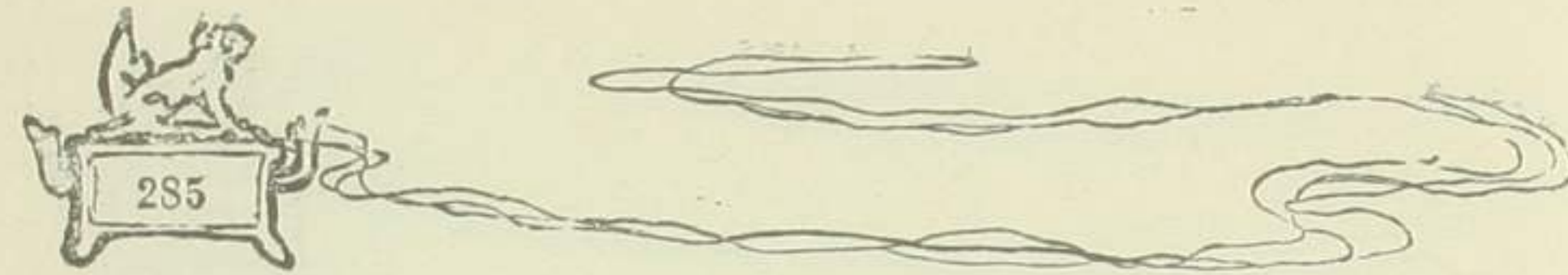


燈油と共に 生命耗る
 短檠の下 句を練れば、
 人を侮る 荒れ鼠、
 奇々と嘲みて 駈け走る。

四

むかしの粹は いひけらし、
 夜道を照らす 小提灯、
 更けて歸るは 俳諧師ぞと。
 今宵おろかの 此の我は、
 夕暮出でし 詩の友を
 たづねて闇に 迷ひ迷へり。

五



こゝに廬あり 廬に人あり。
 人何をおもふ 燈火の下。
 燈火揺れて 影は動けど
 人は動かす ものをのみおもふ。
 柳も睡り 水も寐し
 中に覺めたる たゞ一人、
 この人もまた 詩をやおもへる？
 この人もまた 詩をやおもへる？。

六

更けて睡らぬ 人に尋ねん。
 貴卿そもく 何をおもへる？
 柳も睡り 水も睡れり、



禽も睡れば 魚も睡れり、
戀に悶へて 一人覺むるか、
わがごとく 若し 詩をやおもへる。

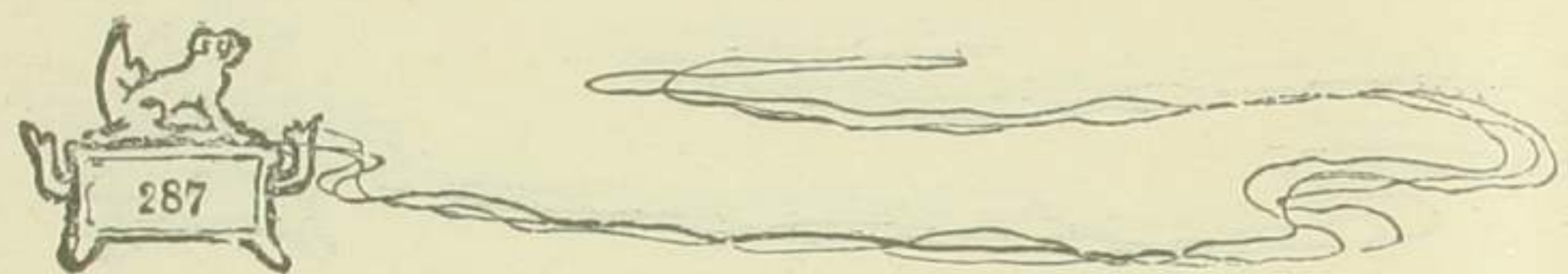
第十章

一

主「何？。わが如く 詩をやおもへる？。
おんみは さては 詩をばおもふか。」
客「詩をおもはずば 如何で此の世に
あり得んごまで おもひ居る身ぞ。」

二

主「嬉しや、酒を 酒盞は得ぬ。
佳き友よ友！、廬に入りませ。」



酒盞 酒に あへる哉、
佳き友よ友！ 廬に入りませ。

第十一章

客「廬 物無く、たゞ四壁立つ！。
物無き廬 おもしろき哉。
詩は貧を招び 貧は詩を招ぶ、
物無き廬 詩もや盈つらん。
嗚呼廬好し 廬好し、
こゝにして人 詩を語る、
半盞の茶に 興有らん。
我に酒無し たゞ詩あり。
酒盞 酒に あへりごは



をかじき人の 戯言や！。

第十二章 主人の言

一

主外の言葉は 戯れて、

内の意は 誠意なり。

味無く香無き 雨水は、

地に落つることも さもあらばあれ。

琥珀かぐやく 醇酒を、

沙にそぐぎて 何とすべきや。

琥珀かぐやく 醇酒は

其の一滴も 惜むべし。

露ばかりぞと 人のいふ



露の珠なす 一滴も、

七十粒の 美稻の

美膏を 搾りてぞ

わづかに醸みて 成ると聞く。

琥珀かぐやく 醇酒は

そぐぐべからず 砂の上。

必らず盛れや 玉盃に、

盛れや 汚れぬ 酒厄に。

二

君 詩ありとは 云はざるや、

詩は酒ならで 何ならん。

稻の膏は 酒となり、



心の膏 詩とぞなる。

人をば酔はす 歌の一句の

その源は 涙幾滴、

滴々あつき 眞實凝らして

わづかに歌は 成り出づるなり。

酒惜むべし、歌惜むべし。

三

我 一樽の 酒ありし日は

これを注ぐべき 酒卮の

清きを得んと 願ひにき。

われ一篇の 歌ありし夜は

これを聞かさん 友もがなと



心ひそかに おもひたり。

詩を戀ふれども 詩を得ぬに、

心悶ゆる 今の我、

君にすゝめん 酒無きも

地にそゝがせじ 君が酒。

四

あはれ酒卮 羞かしや、

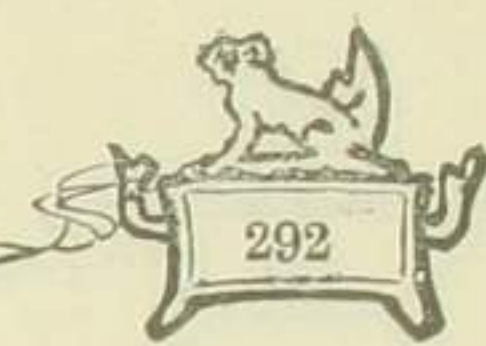
黄金にあらす 玉ならず、

心のみたゞ 深草の

土器の清き ばかりにて、

見る目陋しく 悲しきも、

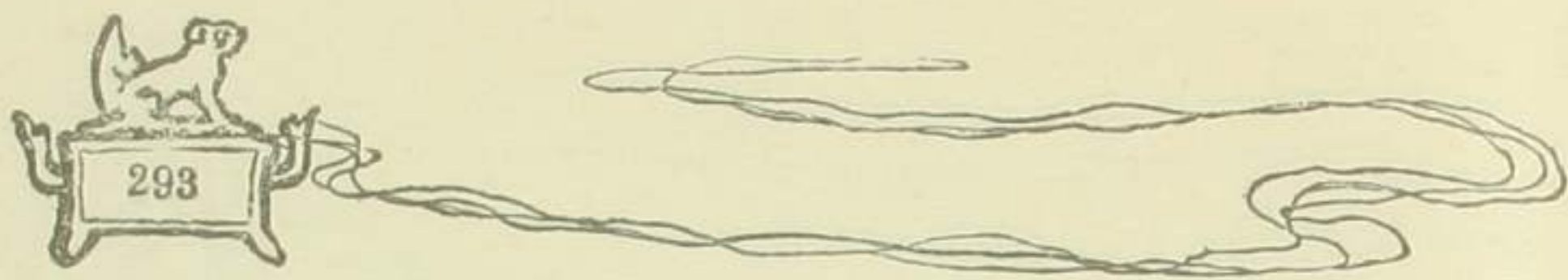
君 幸に 厭はざれ。



第十三章 客の言

一

「味ある君が 言葉かな、
 實に〜歌は 酒ぞかし。
 たゞ我が酒の 淡くして
 人を酔はさん 滋味足らず、
 君が酒卮 美しき
 こゝろに相應ふ 色香無し。
 我が酒薄し 酒薄し。
 薄きも無きに 勝れりと、
 むかしの人は 云ひたれど
 無きにも劣る 薄き酒！」



二

浮世に遠く 火の氣無く、
 夜露 朝霧 たゞ寒き
 深山の奥の 岩陰の
 岩のくぼみに 蛇葡萄を
 摘みて集めて 猿丸が
 醸すとも無く 醸したる
 その猿酒に 紅葉を
 誘ひておつる 村時雨、
 雨水入りて 薄まりし
 其酒にも似たる 我が歌を
 君に獻げん 由も無し、



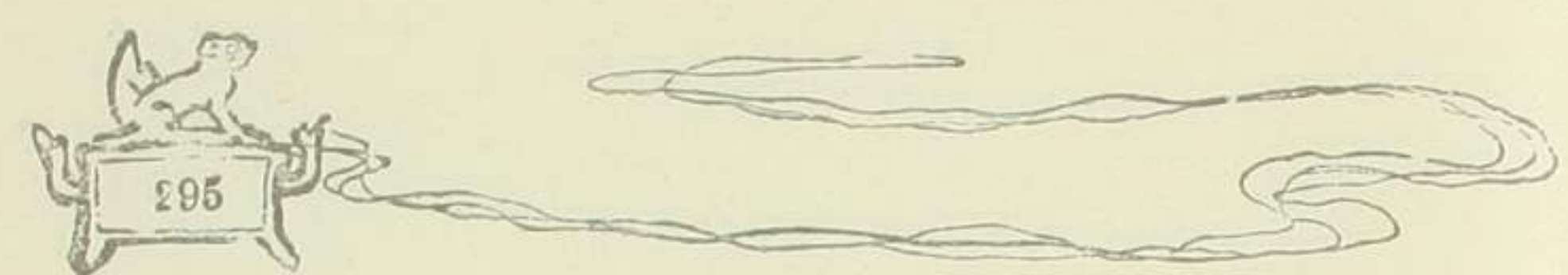
歌といはんも おもふせや！。

三

おもしろき歌 よき酒は、
仙家の春を 世に招べど、
拙き歌と 酸き酒は、
たゞ皺ましむ 人の眉。

四

清みて静けき 壽相あれども、
濁りて厚き 福相は無く、
詩人の面、五嶽六府に
春色無くて 秋氣多きを、
更に悪詩の 贈り物して



君が面を ^{オモテ} ひそましめんや。

君が眉根を 皺ましめんや。

五

美女には贈る ^{オク} 玉の簪、
武夫にはおくる ^{カンク} 汗血の駒。
詩を好く君に あへる此の夜、
おくるべき詩の 無きぞ悲しき。

六

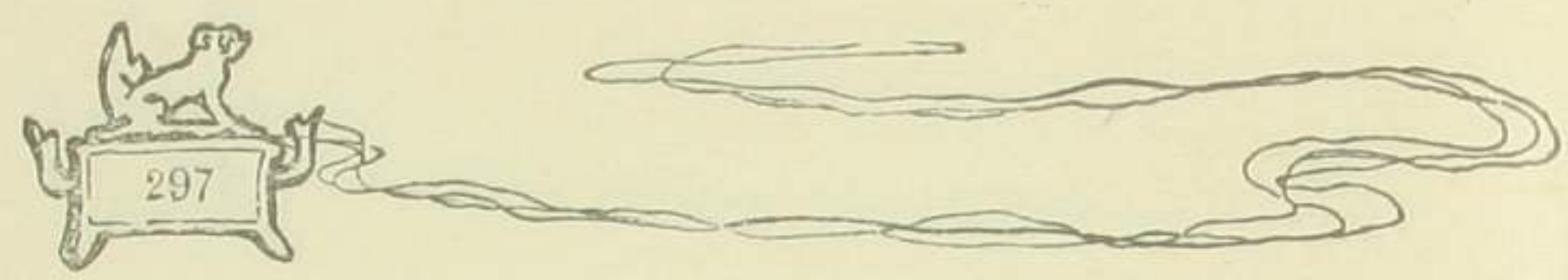
君聞け、我に 若き友あり。
竹の大地を ^{ダイチ} 出しごとき人！。
世をおもへども 詩をばおもはず、
詩をおもはねど 心やさしく、



たゞかりそめの 喜怒も笑罵も
 口を出でずは 皆歌となる。
 其の友と、我 ころに來つらば、
 如何に樂しき 今宵ならんを、
 被を共にして 昨夜寐つれど、
 手を携へて 出でし今日しも、
 川邊の蘆の 蘆の葉がくれ、
 相失ひて 相別れたり

七

維摩の女 月上が
 手には蓮花の 咲きに咲き、
 まことの歌の 神の兒の



胸より歌は 溢れ溢る。
 彼だにあらば 詩あらんを、
 直に此處に 詩あらんを。

第十四章

ま男兒歌はず 蝶鳥の情、
 野客猶知る 君王の恩、
 聲高やかに 幾度か
 此の一聯の 句を誦して
 意氣に誇れる 若俊の
 先にこゝをば 過りにき。
 君が友若し その人か？



われ其の人と 語りたり。」

二

客_ニ聞の千鳥は 聲にあらはる。
言葉を聞けば、その人は見ゆ。
そは吾が友に 疑も無し、
など君 彼を ことめざりしぞ？」

第十五章 主の言

一

我はひたすら 詩をおもひ、
彼はしきりに 世をおもふ。
詩をおもふ人 世を疎_{ツト}み、
世をおもふもの 詩をあざむ。



山に柴刈る 山樵_{ヤマカウ}と

海に魚取る 漁翁_{イサギミ}と

希望_{キボウ}たがへば 業_ノたがひ、

意_イあはねば 氣_キもあはず、

西と東に 立別れ、

左と右に そむきたり。

二

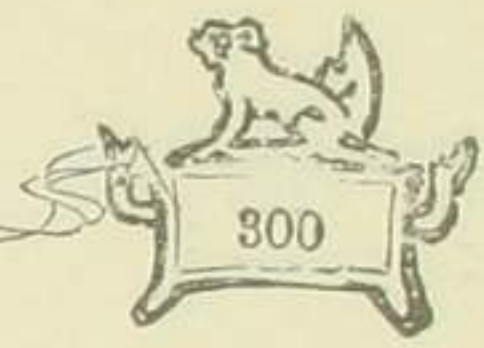
彼の人 鐵_{テツ}と 剛_{コウ}くして、

我_ガまた 石_{イシ}と 堅_{ツル}意_イ地の、

圭_{カド}角_{ツノ}觸_フれあふて 火_ヒをすつて

石_{イシ}の火_ヒ飛_トべる 後_{ノチ}聞_ク、

直_ナに別_{わか}れて また會_あはず、



互に離れ 退きしのみ。

第十六章 客の言

一

「あら、聞えざる 事を聞くかな。
あふ、いはれ無き 事をきくかな。
世をおもふ人 詩をあざむとや！
詩をおもふもの 世をうとむとや！
聞えぬ道理！、何の故ぞや、
あふ、いはれなし 何の故ぞや、
鶴毛、雲雄毛、栗毛、騮、驪、
馬と馬とは 毛嫌ひもすれ、
火性、金性、木性、水性、



人と人とは、性も合はざれ、
詩と世と何の あだむことある！、
世と詩と何の 背くことある！。

二

詩は鏡なり、詩は鏡なり。
鏡の中の 影像さまざま、
そは現世の 眞實ならずや。
影像なければ 鏡 色無く、
世をほかにして 詩ある事なし。

三

現世は土！ 現世は土！。
土に生ひいづる 花のいろく、



そを歌といひ 詩ともいふなり。
 土の腴瘠は 花にあらはる、
 詩と異なる 世あることなし。

第十七章 主の言

一
 弓は弓の 隸僕なれども
 弓に倣はず 直に世を経て、
 的は射る箭の 脇師なれども
 箭に諂ひて 身動ぎはせず。
 客をうやまふ おもひ深きも
 我をあざむく 心持たねば、
 罪得がましく 悲しけれども、



君が言葉を 我戻かなん。
 弓絃 直なり 勿怒りそ 君！、
 的 静なり ゆるせかし 君！。
 二
 我 世を疎み 世を棄てよ
 たゞ詩をおもひ 詩に暮す。
 歌は浮世の 影映る
 鏡か水か 我知らず。
 さし潮の芥 退き潮の芥、
 芥の流れを 時運とはいひ、
 東風の塵 西風の塵、
 塵の颯るを 世態とぞいふ。

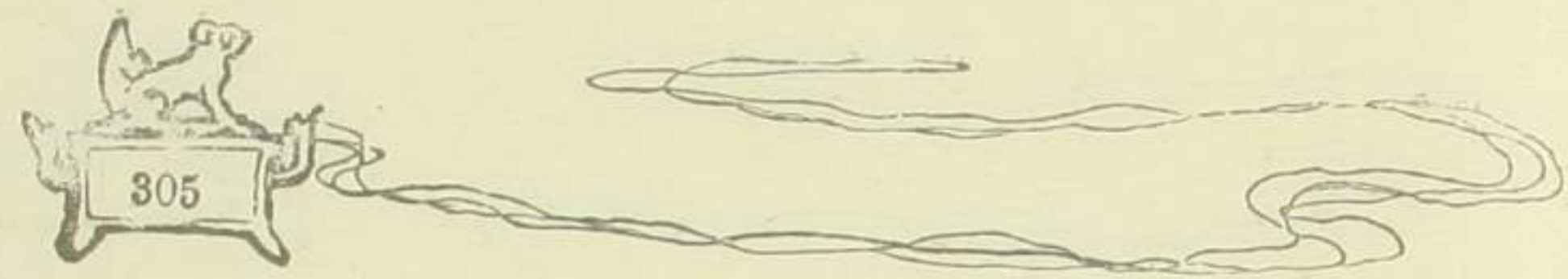


304

鏡か水か 我知らず、
 芥の流れ 塵の舞、
 見ても甲斐なく おろかしき
 映れる影を 何愛でん。
 映れる影を 誰愛でん。
 見ても甲斐無や おろかしや。

三

世を厭へばぞ 詩をおもふ！。
 銀河の水を 地に招びて、
 娑婆の垢汚を 洗ひ去り、
 雲螭に騎つて 天かけり、
 胸臆の苦悶を 晴けたき



305

心よりこそ 詩をおもへ。
 されば君開け 聞けや君。
 茶はたゞ無かれ 腥羶氣、
 詩はたゞ無かれ 世の臭味。
 詩によりて 我 芥 無き
 海の廣きを 眼にうかめ
 詩によりて 我 塵の無き
 風の清きに 呼吸せんと
 日頃ねがへり 日頃ねがへり。
 鏡か水か 我知らねども、
 我 詩をおもふ 世をばおもはず。

第十八章 客の言

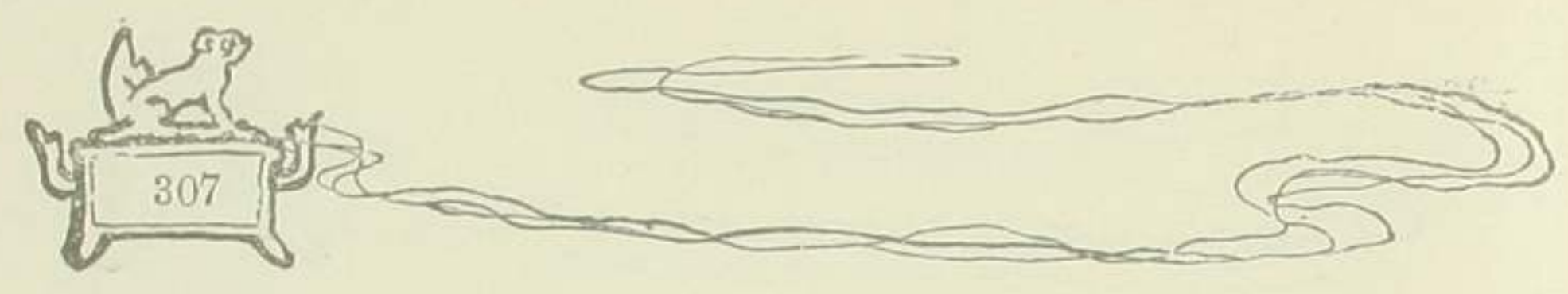


一

君は小川の底の小石の
水にそまらぬ心懐きて
ひとり常盤に堅く眞白く
月日経るにも似たる人哉！

二

風吹かば吹け雲行かば行け、
風と雲とは空に任せて、
淵は瀬となれ瀬は淵となれ、
淵瀬の變に身はあづからず、
物動けども我は動かす、
形移して神移さず、



三

生れのまゝに生命静けく
過ぐす小石を君は學ぶか、
おのれを托げて吾が生淋しく
過ごす小石に君の何ぞ似る！

四

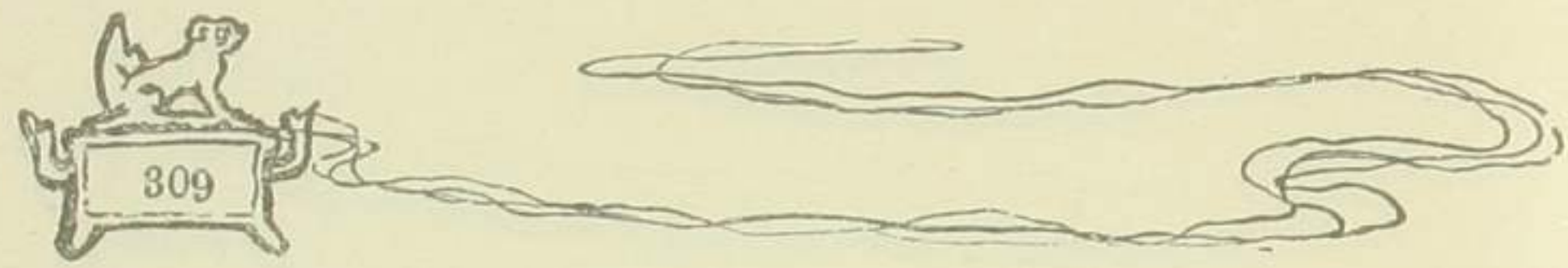
小川の底の石よ！。小石よ！。
守る操は餘りありとも
餘りに世にはそむき過ぎずや。
小川の底の石よ小石よ！。
白き清さは餘りありとも、
餘りに堅く小さからずや。



君聞けや君 試みに聞け！
 世を厭ふ人、世を愛づる人、
 人はそれぐ 怒り笑へど、
 世は人々を 容れて餘れり。
 花薫る世や、嵐吹く世や、
 世はさまざまに 清み濁れども、
 詩は世を容れて 餘りあるなり。

五

君聞けや君 試みに聞け。
 南天遠き 十字星、
 十字の星の 御座より、
 北洋 照らす 七星の



軸の子星チボシに 至るまで
 蒼穹 長さ 幾千ぞ！
 たゞ紺青の 空高く、
 壽星を見れば 辰星を見ず、
 子の星見れば 十字星クロッスを見ず。
 天 渺々ハテシ 際涯無く
 思へば廣く 濶けれど、
 詩聖の歌に 入る時は
 わづか詩卷の 一頁ペジ！。

六

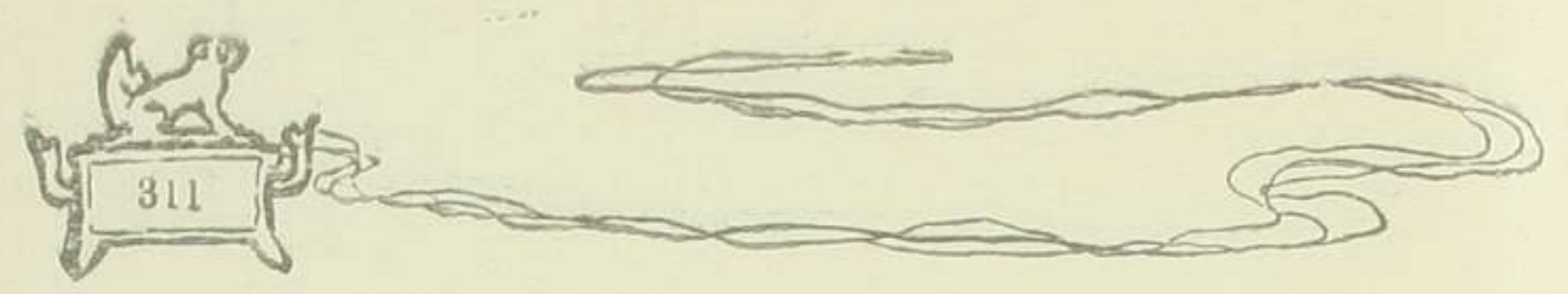
印度のむかし 霧籠めて、
 埃及の史も おぼろなる



上つ世の其の上つ世の
 エデンの園も 猶成らぬ
 アヅアの時の 遙けじや！
 時 悠々そ 久しくて
 おもへば遠く 遠けれど、
 古今を須叟に 寫し取る
 筆の穂先の 露の間の事！

七

何を嫌はん 何を嫌はん、
 詩は大なり 詩は大なり、
 天地を罩めて 日月を呑み、
 三世に亘り 十方を兼ねぬ。



街衢は廣し、物を嫌はず。
 雨に散る花、風に散る花、
 花散る時は 花を飛ばしめ、
 東風の塵、西風の塵、
 塵 舞ふ折は 塵 颯らしむ。

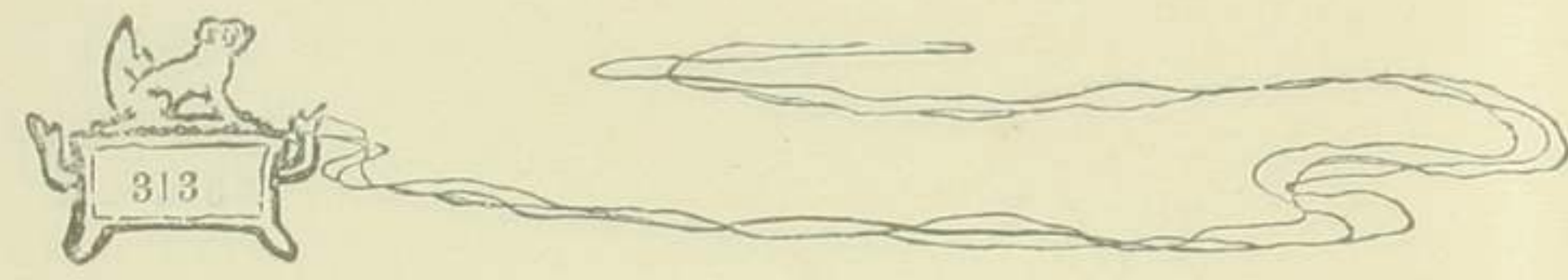
九

海はゆたけし、心せまらず。
 黒き鷗、白き海鷗、
 鳥 居る時は 鳥を浮めて、
 上げ潮の芥 退き潮の芥、
 芥ある折は 芥も身に負ふ。



十

花の散る よし、塵の舞ふ 好し、
 鳥の居る よし、芥の行く よし。
 五彩まじつて 錦繡且つ成り、
 若葉 落葉に 樹は育ち立つ。
 詩は街衢より 猶廣くして
 海よりも詩は 猶もゆたけし。
 詩は大なり 詩は大なり、
 何を厭はん 何を厭はん。
 十一
 仁者は 人を あだむこと無く、
 勇士は 敵の 無きを悲む。

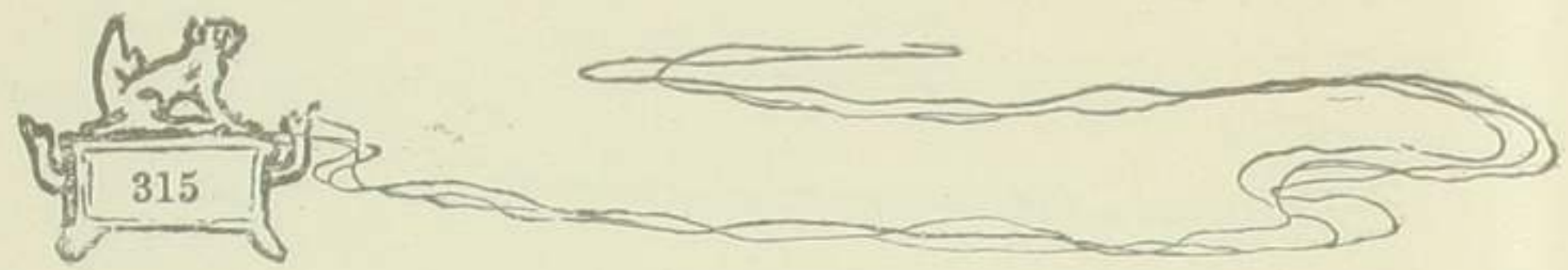


十二

世を詩の嫌ふ ことは無からん、
 詩と世と何の 悪きことある!?
 詩は世を容れて 餘りあるなり。
 君 詩の神を あやまりなせそ。
 すでに 君 詩を おもひながらに、
 世を厭ふとは 何の意ぞ?
 あゝ所以無し、あゝ所以無し、
 世は詩の神の 掌の中の珠!
 十二
 君 聞けや 又 試みに聞け!
 天地 わづかに 開け開けて、
 雲 水 いまだ 分れ別れず



浮脂ウキアブラのごと 國 若き日は、
 獨り成りたる 神もおはしき。
 葉は秋に落ち、花は春 咲き、
 山岳 聳え、江河 流れて、
 萬法 既に 定まれる世は、
 獨り成るもの 更に有る無し。
 霜は あしたの 冷えに結ばり、
 氷は 夜の 風を得て凝る。
 詩は如何にして 成りて出づるぞ、
 何 しら雲の 山を離れて
 空に遊びて 漂ふがごと
 たゞおのづから 湧くといふとも、



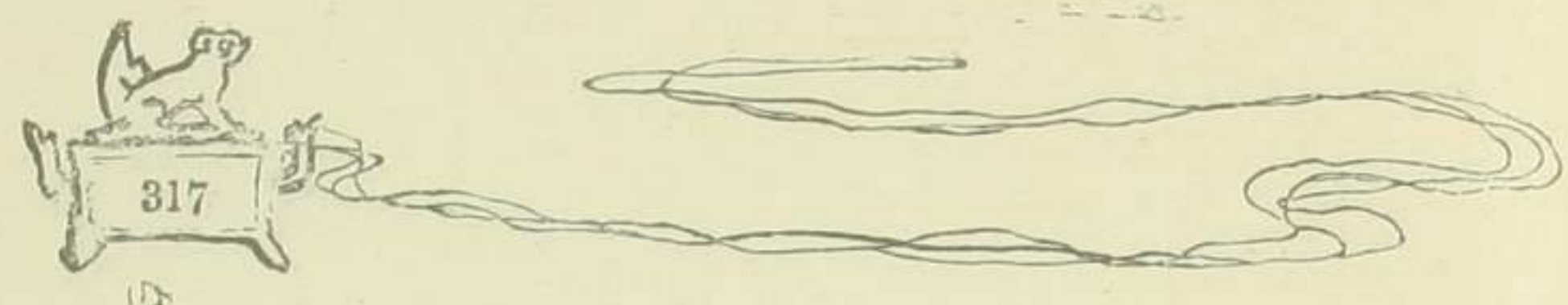
雲は土石の 蒸せる氣に成り、
 詩は世運セウウンに 醸カされて成る。
 十三
 小雨じづかに あたふかき朝、
 大魚 躍つて 水を出でても、
 魚はたちまち また 水に入り、
 足る事知らぬ 心 つのれば、
 浮世浮世と 世をうとみても、
 人は浮世を 離れ得ぬなり。
 萬法 既に 定まれる世は
 獨り成るもの 更に有る無し。
 雲は土石の 蒸せる氣に成り、



詩は世運に 醸されて成る。
 世を離れ得ぬ 人のこの身の
 思ひのつくる 歌の幾篇、
 篇篇に皆 世の香^カ 有るべし、
 篇篇に皆 世相 やざらん。
 浮世の すがた 世のにほひ、
 たゞ そのまゝに 詩ならずや。

十四

花の咲く日は 花を歌ひて、
 歌に留めよ 其の花の香を。
 月の照る夜は 月を歌ひて、
 歌に寫せや 其の月の照り。



花に眼を閉ぢ 物思ひして
 春光九十 あだに過すな。
 月に早寐の 扇^{トホッ} 固めて
 秋おもしろき 夜をよそにすな。
 風も歌なり、雲も歌なり、
 雪も歌なり、霧も歌なり、
 鶯の聲 それも歌なり、
 燕の舞の それも歌なり。
 頭をあげて あめつちを見よ、
 造物 日々に 我に贈るに
 取れども盡きぬ 歌を以てす。
 たゞ其の儘に 寫し取りなば、



318

そこにめでたき 歌は成るべし。

十五

歎き 悦ぶ 人のいろく、

泣くも 笑ふも 歌ならぬかは！

亂れ 治まる 時のさまく、

凶きも 吉きも すべて歌なり。

見よ、太平の 春風の中、

風船買つて 三歳四歳の兒に

持たせて 親子 につこりと笑む

其の 眼と 眼との なかに歌あり。

見よ、いくさある 昨日此頃、

曲れる腰の 白髪の婆、



319

村の鎮守の 神の御前に、

満州の野は 風荒くとも

吾が兒 無事なれ、恙 無かれど、

合はせて祈る 骨節高の

其の掌の 甲に霞 散る

涙の雫 幾滴の

中に 悲しき 歌のあらずや。

よろこびも歌 悲しみも歌。

幾歳 おもひ おもはれし

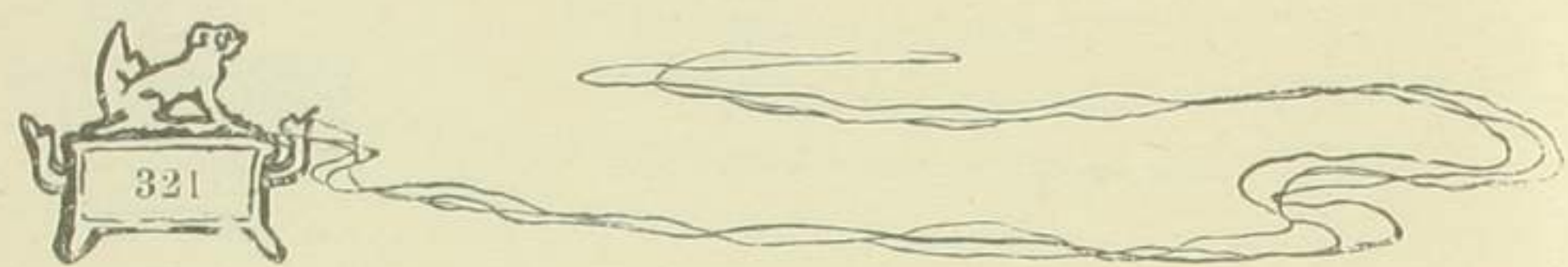
二人のおもひ 今日 遂げて、

金屏の中 さかづきに

心 ときめく それも歌。



召されて 出づる 軍装の
 夫を送る 停車場、
 涙 こらふる 人の前、
 綾の手巾 咬みしぼる
 妻のおもひの それも歌。
 太平の日は 笑みて歌ひて、
 太平の世を 飾り いろどり、
 戦ひの世は 戦ひの世の
 すがた寫して 歌と 残せや。
 世のいろくに 耳を塞ぎて、
 さま おもしろき 世を よそにすな。
 戀も歌なり、 罪も歌なり、



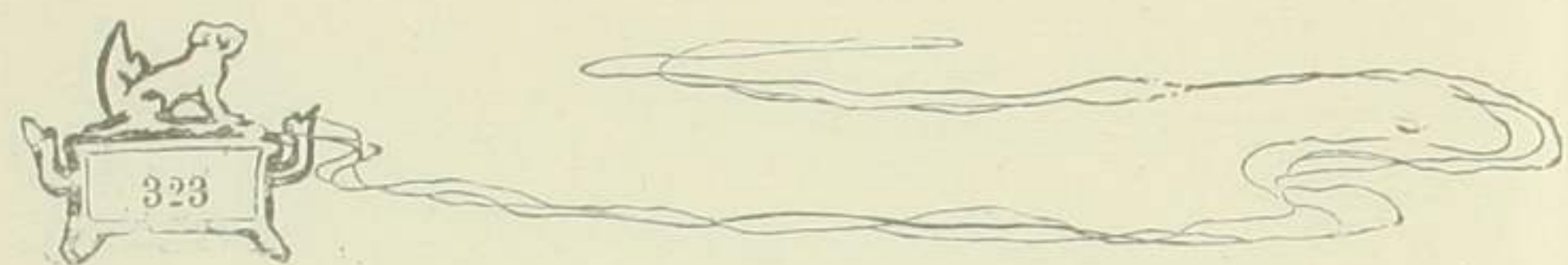
まよひ 歌なり、 恨み 歌なり、
 勇士の怒る それも歌なり、
 仁者 憂ふる それも歌なり、
 熱涙も、 熱血も歌、
 燃えに燃えたつ 愛國の意氣、
 それも歌なり それも歌なり、
 湧きに湧き立つ 懐郷の念、
 それも歌なり それも歌なり。
 頭をあげて 八方を見よ、
 浮世は日々に 人に贈るに、
 取れども盡きぬ 歌を以てす。
 たゞ其のまゝに 寫し取りなば、



そこにめでたき 歌は成るべし。

十六

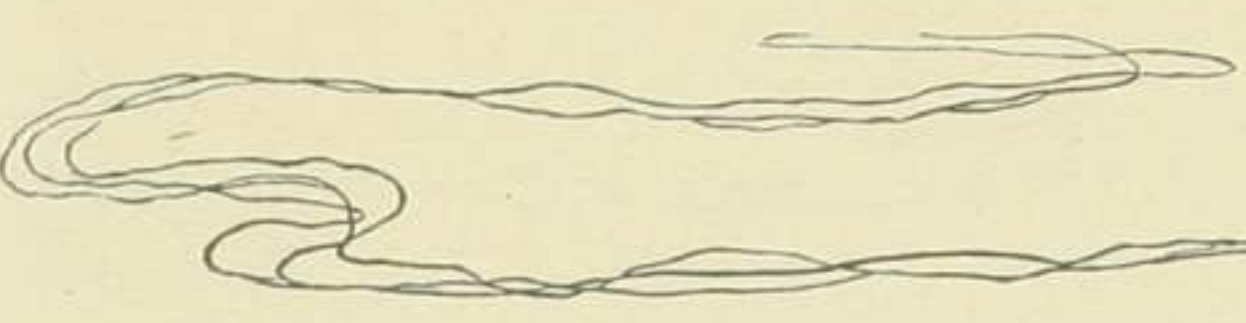
水を離れて 住む魚も無く、
世を遁れ得る 人もあらねば、
花の咲く日は 花を歌ひて、
花に浮かれて 酔ふも宜からん、
月の照る夜は 月を歌ひて、
月に嘯ぶき 行くも宜からん。
浮世のすがた 世のにほひ、
たゞ そのまゝに 詩ならずや。
詩は世よりこそ 成りもすべきを、
君 など 詩をば おもひながらに、



空しく 世をば 厭ひ棄つるや。

十七

地に躓づきて 倒れたるもの、
地をあだみても、地に依りて起ち、
地をば離れて 起つことも無し。
世を見限りて 世を厭ふもの、
世を厭ひても、世に依り立ち、
世をば離れて 立つことも無し。
厭ひて厭ひ 果つる世ならば、
世を厭ひても 有りぬべけれど、
身を無きものと 思ひ棄てても、
世に雪の降る 其の日 寒くば、



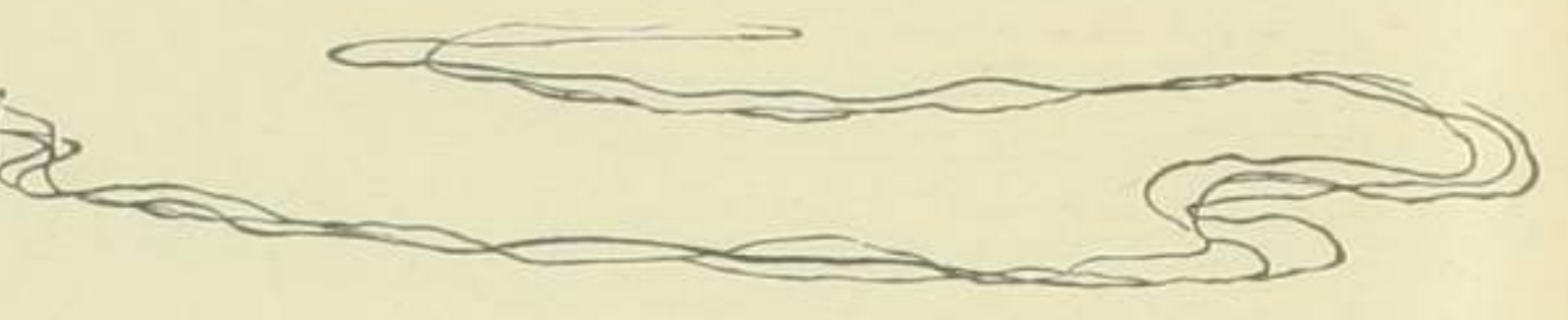
厭ふとてしも 遁れ得ぬ世に、
 浮世浮世と 啣ちごとする
 それも よしなの あだな縁言！
 詩にあこがれて 世をば厭ひて
 ひとり いほりに 君 籠るども、

國に事ある 昨日此頃、
 君の心の ひとり 安きや、
 君の心の ひとり 安きや。

第十九章 主の言

一

金^コ鉦^{ペイ} 觸れぬ 病^{ベウ}眼の膜！
 おく、我が心 安きこと無し。



國に事ある 昨日此頃、
 心 分れて 迷ひ わづらふ。
 人の世の風 吹きて荒べば
 心の海に 浪の騒ぎて、
 我が詩の帆船 破れ たゞよふ！
 詩をおもへども 詩を思ひ得ず、
 悶え わづらひ 悩み苦しむ！
 金^コ鉦^{ペイ} 觸れぬ 病^{ベウ}眼の膜！
 おく、我が心 安きこと無し。

二

金^コ鉦^{ペイ} 觸れぬ 病^{ベウ}眼の膜！
 痛くも痛き 君の言葉に



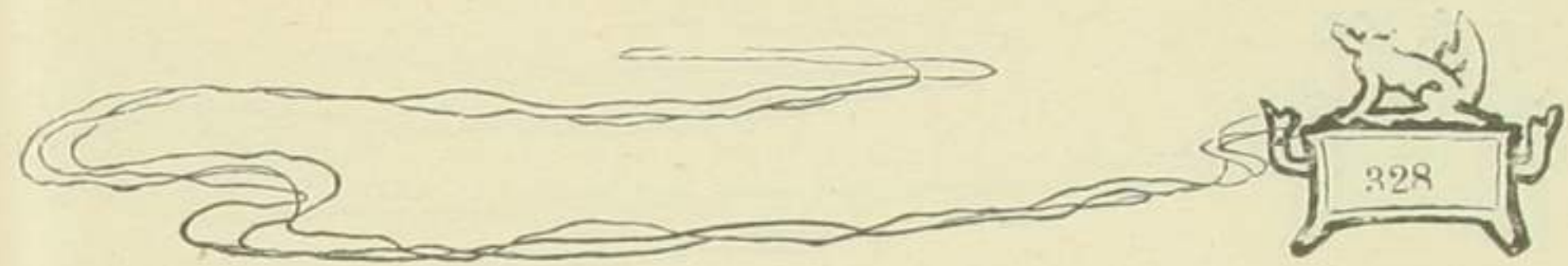
今 我 知りぬ、我悟りたり。
 我は 我たゞ ひとり居て、
 我がいつはらす 欺かぬ
 心の奥の 深きより
 詩を 汲み得んと 願ひたり。
 我は 野中に 掘りかねの
 深くも深き 井を鑿りて、
 磐の底より 眞清水の
 清きを得んと 願ひたり。
 君は 人の世 それんゝの
 すがたの中の 清きより、
 詩を掬くべよと 示すなり。



君は 山の根 谷のあひ、
 巖間の清水 苔清水、
 笹の下行く 細流れ、
 白沫立つる 瀧川の、
 到るところに よき水を
 見て掬くべよと 示すなり。
 三
 我 今 知りぬ 我 悟りたり。
 掘り井の水も 水は水！
 泉の水も 水は水！
 水には何の たがひ無けれど、
 天に雨無き 土用早、



實に造物は 人に贈るに
 取れども盡きぬ 歌を以てす。
 實にも浮世は 人に贈るに
 取りて盡きざる 歌をもつてす。
 井を掘るほかに 水を得る道
 無じと ねもひじ 迷ひ 忘れて、
 其の井の ほどり 去りて見遣れば、
 清き川あり 清き瀧あり、
 水は掬ぶに 餘りありけり。
 耆婆キバの眼マナコの 照し見る時、
 野もせに茂る 千草八千草、
 藥ならざる 草も無からん。



雲 火を含む 夏の日
 小なき我が井 涸れ果て
 水 汲みかねて 悶えたるなり。
 膏雨アラメ 降る 太平の
 世の静かさの昨日 去り、
 塵を捲き立つ 戦ひの
 風騒がしき 今日に遇ひ、
 小なき 心驚きて、
 詩を得惱みて 苦みしなり。
 四
 實に〜 歌は いと大なり。
 實に〜 世をば 人は距り得ず。



詩は我が胸の奥の奥より、
湧きて湧き出で 成るばかりかは、
天の四時に 人の七情、
浮世のすがた すがたさまさま、
詩ならぬものも 少かるべし、
詩ならぬものも 少かるべし。

五

小さき^{イホリ}盧！。いほり 何せん！。
いほりを出で、眼をあげて見て、
大平の世は 笑みて歌ひて、
戦ひの日は 戦ひの日の
すがた留めて 歌を残さん！。



實在も歌。空想も歌！。
小さき盧！。盧 何せん！。
詩神は盧に いますばかりか、
天地いづくに 歌の御神の
おはさぬところ そもや あるべき！。
天地は すべて 歌の御神の、
其の御殿と 今ぞ知りぬる！。
いほりを出で、立つて望めば、
天地 歴々 寸眸に在り。

第二十章

小さき禽の 聲の小さく、
節調のはで 歌 澁るとも、



長き夜の夢 今覺めて、
朝日に勇む 我が心、
身を寄せ馴れし 一ト枝の
安きを あとに 振り棄て、
あしたの風の つめたきに、
羽ぶしを鳴らし 飛び立つて、
千里萬里の 野に翔り、
我がまだ知らぬ 八千草の
花の色香を 尋ねくゝて
歌ひ歌ひて 神にむくはん。



明治三十七年十二月二十九日印刷
明治三十八年一月一日發行



著者 幸田成行

發行者 和田ム人
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行所 春陽堂
東京市日本橋區通四丁目五番地
(電本五二)

印刷者 齋藤章達
東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東京印刷株式會社
東京市日本橋區兜町二番地

SE
店

7
9

近刊

出廬抄註

神谷鶴伴著

是は鶴伴氏、出廬の中の故事出典等を、一々露伴氏に質問し、其の答を得たるを書き集められしものなり。

SEKAI-DO-SHOTEN
WASEDA TOKYO
店書屋世

